

なかつたであらう、故に彼の空論や虚議を擲け棄て此處の眞截根源の宗旨を參徹して自から佛祖なることを得んとある、文相は誠に平易にして解し易いが、祖訓の在るところ三復して慈恩に報ゆるの行持がなければならぬ。

故に祖師の道、殊に大悟大徹せずんば其人に非ず。故に純清絶點にも住まらず、虚空明白にも住まらず。故に船子和尚曰く、直に須らく身を藏す處蹤跡なく、蹤跡なき處身を藏すことなかるべし。吾れ三十年藥山に在て祇だ斯事を明らむ。純清絶點是れ身を藏す所に非ず。光境共に忘すと謂ふとも猶ほ此處に藏身すること勿れと謂ふ。更に古今と説くべき所なし。迷悟と論ずべきことなし。恁麼に參徹する時、十方壁落なく四面又門なし、處々脱白露淨なり。故に大に須らく子細にすべし、卒爾なること勿れ。

かやうなわけであるに依て祖師の道は殊に大悟大徹せざれば其人に非ず、然らば其の大悟徹底の地は如何なる風光かといふに、純清絶點すなはち萬里の晴空一點の雲影もないといふが如き心地にも住ま

らず、虚空明白にも住まらず、虚空とは無心の地、明白とは悟得の境、此等の域をも超出せよ。其れに就て船子和尚の語を引證せられた、船子和尚といふは名を徳誠と曰ひ藥山惟儼禪師の法嗣であるから、洞山大師のためには法叔である、常に華亭の吳江に船を泛べて其中に棲んで居られたに依て世に船子和尚と稱したと云ふ。其の和尚或時衆に示されて曰く、直に須らく身を藏す處蹤跡なく蹤跡なき處身を藏すことなかるべし、身を藏すといふは安身立命の處といふほどのこと、其の謂ゆる安身立命の地は一切の煩惱妄想すべての諸縁を離れ萬事を排したところ即ち蹤跡の絶えた所でなければならぬ、然ればとて又其の蹤跡の絶えた謂ゆる純清絶點の處にも住着して足を留めては成らぬぞと云ふ。即ち身を藏す處蹤跡なかるべしといふは向上進趣の姿「般若心經」に謂ゆる色即是空の境界、永平高祖は之を身心脱落と仰せられる、偈又さらに蹤跡なき處に身を藏すなかれといふは退步却來の姿「般若心經」に謂ゆる空即是色のところ、永平高祖は之を脱落身心と示させられる。船子和尚は吾れ三十年藥山に在て祇だ斯事を明らむと言はれる、其の明らめ得たるところ、乃ち純清絶點是れ身を藏す處に非ず、光境共に忘すと謂ふとも猶ほ此の處に身を藏すこと勿れと云ふことになるのである。光境といふことは前にも有たが光は心のはたらき境は色聲香味觸等のこと、乃ち今は身も心も皆忘れ去たからといふても猶ほ此處に藏身すること勿れといふ、偈又時間の上に於ても更に古今と説くべき



所なし、無始劫このかた未來永劫今も昔も差別はない、結局迷悟と論ずべきなし、迷ひの凡夫だの悟りの佛だのといふ差別の認むべきは無い。恁麼に參徹する時、十方壁落なく四面又門なし、空間的に十方法界無碍自在に處々脱白露淨、何の處にか物を燒かない火が有らうぞ何の世にか物を濡さない水が有らうぞ、故に大に須らく子細にすべし卒爾なること勿れと警誡せられた、實に古人が放身捨命して、精進せられたは只だ此事の爲めであるぞ。

今朝此因縁を説破せんとするに卑頌あり。聞かんと要すや。

善吉維摩談未到 目連鶖子見如盲

若人親欲會這意 鹽味何時不的當

善吉といふは釋尊十大弟子の中に解空第一と稱せられる須菩提尊者のことである、須菩提といふ梵名を空生とも譯し又は善吉とも善業とも譯してある。維摩は具さに言へば維摩羅詰、漢譯しては淨名と曰ふ、釋門第一流の居士である。善吉は「大般若經」の對向衆で空理を解すること第一と稱せられ、維摩は不二法門に於て文殊其他の諸大菩薩を壓倒したほどの人であるけれども、本章に謂ふ所の如き

眞義に於ては談じて未だ到らず、如何となれば元來說默に拘はらざる妙法であるからである。又目連は具さに言へば目健連乃ち十大弟子中の神通第一、鶖子といふは智慧第一の舍利弗の譯名、是等の人々に於ても無生の眞理は見て旨の如し白とも黒とも見分けのつくものではない、元來見聞聲色を超越したる大道であるからである。若し人親く這の意を會せんと欲せば、鹽味何時か適當ならざる、一切の料理割烹只彼の一片の鹽味を得て其美味を得るが如く、結局冷煖自知して獨り莞爾と微笑する時節に到達するの外はない、天真獨朗の妙諦は決して他人の注入を待つべきものではない、一切食物の甘い辛い他人の口を借りて分るべきではない、自分に美味と感じた鹽加減を決して他人に味はせることの出来るものでは無いぞとの御教訓である。



第九章

第九祖。伏駄密多尊者。聞<sub>レ</sub>佛陀難提。說<sub>レ</sub>汝言與<sub>レ</sub>心親。父母非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>比。汝行與<sub>レ</sub>道合。諸佛心即是。外求有相佛。與汝不相似。欲識汝本心。非合亦非離。師乃大悟。

以上本章の本則甚深の宗意須らく以下の親教に依て參究せよ。

師は提伽國の人なり、姓は毘舍羅、佛陀難提、行化して提伽國城の毘舍羅が家に至る。舍上に白光ありて上り騰るを見て、其徒に謂て曰く、此家に當に聖人あるべし。口に言説なし、眞に大乘の器なり、足地を踏まず、觸穢を知るのみ、則ち是れ吾が嗣ならんと。言ひ訖るに、長者出て禮を致して問ふ、

何の須むる所ぞ、尊者曰く、我れ侍者を求む。長者曰く、我に一子あり、年已に五十口未だ曾て言はず、足未だ曾て履まず、尊者曰く、汝が説く所の如くならば眞に吾が弟子なりと、尊者之を見て是の如く云ふを聞き、師即ち遽かに起て禮拜して、偈を説て相問て曰く、「父母非<sub>レ</sub>我親。誰是最親者。諸佛非<sub>レ</sub>我道。誰是最道者。」尊者、偈を以て答て曰く、「汝言與<sub>レ</sub>心親。乃至非<sub>レ</sub>合亦非<sub>レ</sub>離。」時に師妙偈を聞て、即ち行くこと七步。尊者曰く、此子昔、曾て佛に値て悲願廣大なり。父母の愛情捨て難きを慮るが故に、言はず履まざるのみ云々。

以上此の本則の問答のあつた前後の様子を敍べられた、文は誠に解し易い、第九祖の伏駄密多尊者は提伽國といふ處の毘舍羅氏の子であつた。或時第八祖の佛陀難提尊者が、其家へ往かれ屋根の上に白い光の上るのを見て、此家には聖人が居り、生れてからこのかた一言も物を言はない天稟の大乘佛教徒である、生れてからこのかた一足も歩いたことがない、地に觸るれば穢れあるが爲めである、只在家に生活して居るといふまでのことで其の境界は全く無爲の道人である、此の聖人こそ我が此の正法



眼藏を傳へて第九祖の位に即かしむべきものであると、斯う隨行の弟子に言はれた、其言葉のまだ終らぬうちに其家の主人の長者が出て来て、第八祖を禮拜し何ぞ御用で御座りますかと問ふた、第八祖は我は侍者たるべき弟子を尋ねて居るのであると答へられた。長者は私の家に一人の子がありまして年は已に五十になりませうけれども、是れまで一言も物を申したこともなく、一步も地を踏だことも御座りませぬ。尊者は大に喜ばれた様子で若し其方の言ふ通りであるならば、本統に其れが我が弟子である。斯う云はれるのを伏駄密多が聞いて、是れまで一步も歩いたことのない者が遽に起て八祖を禮拜し偈を以て御問ひ申しあげた、其偈は「父母は我と親きに非ず、誰が是れ最も親き者ぞ、諸佛は我道に非ず、誰か是れ最たる道なる者ぞ」、父母は此の肉體の生育に就てこそ親しいやうなもの、我が此の心性の上に於ては特に親しいものとは言はれぬ、然らば何物が一番に最も親いのでありませうぞ、諸佛は諸佛の道をこそ説かれたれ他の口で説いたものを我が道とは言はれぬ、然らば何が最も自己に大切なる道でありませうぞといふのである。八祖が之に答へられたのが即ち今の本則の一偈である、本則には師乃ち大悟すとあるが、此には時に師妙偈を聞いて即ち行くこと七歩とある、行くこと七歩といふは釋尊降誕の時にありし祥瑞である、今も亦た第九代の現身佛が此時に降誕せられたのである。そこで八祖は更に語を續いで此子は過去の世に於て佛に値ひたてまつり廣大なる慈悲の誓願を發した

のであるが、肉身の父母の愛情の捨て難いのに遠慮して是れまで物も言はず地も履まずに時節到來を待て居たのであると言はれた。

實に父母は我が親に非ず、諸佛は我が道に非ず。故に正しく親きことを知らんと思はば、父母に比すべきに非ず。正しく道なることを知らんと思はば、諸佛に學すべきに非ず。所以は何となれば汝が見聞卒に他の耳目を假らず、汝が手足他の動靜を用ゐず。衆生も恁麼なり、諸佛も恁麼なり。彼れ是れを學び是れ彼れを學ぶは、卒に是れ親きに非ず、豈に道とすべけんや。恁麼の道理を護持保任する故に口にもいはず、足ふまず、稍や五十年を経たり。實に是れ大乘の器、觸穢中に在らざらまくのみ。

以下まさしく太祖の御提唱である、實に父母は我が此の形骸の生るゝに就ては尤も親き因縁なれども、已に生れ畢りたる上に於ては會者定離を免れぬ、故に眞實に我が親きには非ず、諸佛の説くところは我が心の影のみであつて、其れが決して我が道には非ず、故に正しく眞實に親きことを知らんと思はば、



形骸のみの父母に比すべきに非ず、更に正しく眞實に我が道なることを知らんと思はゞ、他の諸佛などに學すべきには非ず、其れは如何なるわけかといふに汝が見聞卒に他の耳目を假らず、如何に慈愛深き父母であつても子に代りて物を見たり聞たりすることは出来ぬ、汝が手足他の動靜を用ゐず、佛の手を借りて物を持つことも出来ねば、祖師の足を借りて歩くことも出来ぬ、衆生も恁麼なり諸佛も恁麼なり、吾々も眼横鼻直にして一段の光明の在るあり佛も亦た眼横鼻直にして天上天下唯我獨尊である。然るに若し彼れ是れを學び是れ彼れを學ぶは卒に是れ親きに非ず、門より入るものは家珍に非ずとも云へば、徒らに隣の寶を數ふるにも譬へられる、隣の寶が、何とて自家の用に立つべきぞ、然らば今佛の道を如何ほど聞ても豈に道とすべけんや、決して自分の道とするには足らぬ。今此の第九祖伏駄密多尊者は恁麼の道理を宿世から法然自爾に護持保任するが故に、口にもものいはず足ふます稍や五十年を経たのである、實に是れ大乘の器であるから其の行ひが自然に大乘の道理に契ふて居る、觸穢中に在らざらまくのみ、こゝで觸穢といふは在家男女の罪業深き中に捨て置くべきものでは無いといふのである、此の一段の因縁唯だ一片の神話の如く看過してはならぬ、正に是れ不染汚の行持にして大に吾人の丰標となすべきである。

父母我親に非ずと謂ふ、即ち是れ汝が言なり。是れ方に汝が心と親しし。諸佛吾道に非ずと謂て足遂に履ます。即ち汝が行なり道に合す。然れば外に有相の佛を求むる、卒に是れ非行。之に依て祖師門下、不立文字直指單傳して見性成佛してもてゆく。故に人をして直指なることを知らしめんとして單傳せしむるに他の榜樣なし。唯人をして直に意根下を坐斷して口邊に白醜を生ぜしめもてゆく。是れ言を忌むに非ず、黙をよみするに非ず、汝が心恁麼なることを知らしめんとなり。

此の一節別して本則の第八祖の偈を提唱せらる、父母我親に非ずと伏駄密多が言ふた、此れは他人が言ふたのでない全く自分が言ふたのである、自分が斯う言ふたのは自分の心が自分の口に顯はれたのであるから、是れ方に汝が心と親しし、此れほど自分と親しいものは無い、是れ父母に疎なれとは非ず、方に是れ全自己の一方究盡である。諸佛吾道に非ずと謂て足遂に履ます、此れは誰から命ぜられたのでもなく他人の眞似をしたのでもない、即ち汝が行なり、其れが自分の行であるから其儘に自



分の道である。其うして見れば其外に別<sup>べつ</sup>に有<sup>あ</sup>相<sup>さう</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>を求<sup>もと</sup>むるとしたならば其<sup>そ</sup>れは卒<sup>そつ</sup>に是<sup>ぜ</sup>れ非<sup>ひ</sup>行<sup>ぎやう</sup>、決<sup>けつ</sup>して自<sup>じ</sup>分の道<sup>みち</sup>ではない、有<sup>あ</sup>相<sup>さう</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>といふは釋<sup>しやく</sup>迦<sup>か</sup>如<sup>にょ</sup>來<sup>らい</sup>や阿<sup>あ</sup>彌<sup>み</sup>陀<sup>た</sup>佛<sup>ぶつ</sup>の如<sup>ごと</sup>く三<sup>さん</sup>十<sup>じふ</sup>二<sup>に</sup>相<sup>さう</sup>八<sup>はち</sup>十<sup>じふ</sup>隨<sup>ずい</sup>形<sup>ぎやう</sup>好<sup>かう</sup>を具<sup>ぐ</sup>へて八<sup>はち</sup>相<sup>さう</sup>成<sup>じやう</sup>道<sup>だう</sup>滿<sup>まん</sup>足<sup>そく</sup>するのであるが、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>には自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>にして足<sup>た</sup>らざる所<sup>ところ</sup>がない、何<sup>なに</sup>も別<sup>べつ</sup>に其<sup>そ</sup>の樣<sup>やう</sup>な佛<sup>ぶつ</sup>を他<sup>た</sup>に求<sup>もと</sup>むるには及<sup>およ</sup>ばぬ、然<sup>しか</sup>るに若<sup>も</sup>し強<sup>じやう</sup>て之<sup>これ</sup>を求<sup>もと</sup>むるとしたならば卒<sup>そつ</sup>に是<sup>ぜ</sup>れ非<sup>ひ</sup>行<sup>ぎやう</sup>である決<sup>けつ</sup>して自<sup>じ</sup>家<sup>か</sup>の珍<sup>ちん</sup>寶<sup>ぼう</sup>ではない、是<sup>こ</sup>れも有<sup>あ</sup>相<sup>さう</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>を信<sup>しん</sup>ぜざれどにはあらず有<sup>あ</sup>相<sup>さう</sup>無<sup>む</sup>相<sup>さう</sup>を越<sup>こ</sup>えざる自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>法<sup>ほふ</sup>身<sup>しん</sup>の活<sup>くわつ</sup>卓<sup>たく</sup>々<sup>たく</sup>である。之<sup>これ</sup>に依<sup>よ</sup>て祖<sup>そ</sup>師<sup>し</sup>門<sup>もん</sup>下<sup>げ</sup>即<sup>すなは</sup>ち我<sup>われ</sup>が禪<sup>ぜん</sup>宗<sup>しゆ</sup>に於<sup>お</sup>ては初<sup>しゆ</sup>祖<sup>そ</sup>達<sup>たつ</sup>磨<sup>ま</sup>大<sup>だい</sup>師<sup>し</sup>が不<sup>ふ</sup>立<sup>りつ</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>直<sup>ぢく</sup>指<sup>し</sup>單<sup>だん</sup>傳<sup>でん</sup>して見<sup>けん</sup>性<sup>じやう</sup>成<sup>じやう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>しめてゆ<sup>ゆ</sup>く、不<sup>ふ</sup>立<sup>りつ</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>といふは經<sup>きやう</sup>論<sup>ろん</sup>の文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>言<sup>げん</sup>句<sup>く</sup>に現<sup>あら</sup>はれたる名<sup>な</sup>相<sup>さう</sup>に囚<sup>とら</sup>はれず其<sup>そ</sup>の玄<sup>げん</sup>旨<sup>し</sup>を見<sup>けん</sup>破<sup>は</sup>するの意<sup>い</sup>であつて、決<sup>けつ</sup>して文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>を棄<sup>す</sup>てよといふのでは無<sup>な</sup>い。直<sup>ぢく</sup>指<sup>し</sup>といふは直<sup>ぢく</sup>に人<sup>にん</sup>心<sup>しん</sup>を指<sup>さ</sup>すといふことを省<sup>しやう</sup>略<sup>りやく</sup>した言<sup>ごん</sup>葉<sup>はふ</sup>、經<sup>きやう</sup>論<sup>ろん</sup>の文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>には拘<sup>か</sup>はらず直<sup>ぢく</sup>に吾<sup>ご</sup>人<sup>にん</sup>の心<sup>しん</sup>を捉<sup>とら</sup>へて其<sup>そ</sup>の本<sup>ほん</sup>性<sup>じやう</sup>を達<sup>たつ</sup>見<sup>けん</sup>する、其<sup>そ</sup>れが即<sup>すなは</sup>ち自<sup>じ</sup>家<sup>か</sup>の成<sup>じやう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>である、斯<sup>こ</sup>の道<sup>だう</sup>は佛<sup>ぶつ</sup>々<sup>たく</sup>祖<sup>そ</sup>々<sup>たく</sup>の印<sup>いん</sup>可<sup>か</sup>證<sup>じやう</sup>明<sup>めい</sup>し來<sup>きた</sup>つたところであるから其<sup>そ</sup>れを單<sup>だん</sup>傳<sup>でん</sup>といふ、單<sup>だん</sup>は單<sup>だん</sup>獨<sup>どく</sup>の義<sup>ぎ</sup>で他<sup>た</sup>人<sup>にん</sup>と並<sup>なら</sup>び行<sup>い</sup>くべきでない、「法<sup>ほふ</sup>華<sup>け</sup>經<sup>きやう</sup>」には唯<sup>あ</sup>獨<sup>どく</sup>自<sup>じ</sup>明<sup>めい</sup>了<sup>りやう</sup>餘<sup>にん</sup>人<sup>にん</sup>所<sup>しよ</sup>不<sup>ふ</sup>見<sup>けん</sup>と示<sup>しめ</sup>されてある。故<sup>ゆ</sup>に人<sup>にん</sup>をして直<sup>ぢく</sup>指<sup>し</sup>なることを知らしめんとし、て單<sup>だん</sup>傳<sup>でん</sup>せしむるに、他<sup>た</sup>の榜<sup>ぼう</sup>樣<sup>やう</sup>なし、別<sup>べつ</sup>に教<sup>きやう</sup>へやうもなければ傳<sup>でん</sup>へやうもない、榜<sup>ぼう</sup>樣<sup>やう</sup>とは形<sup>けい</sup>式<sup>しき</sup>といふほどのこと、唯<sup>あ</sup>人<sup>にん</sup>をして直<sup>ぢく</sup>に意<sup>い</sup>根<sup>こん</sup>下<sup>げ</sup>すなはち己<sup>こ</sup>れ<sup>の</sup>意<sup>い</sup>想<sup>さう</sup>を以<sup>もつ</sup>て種<sup>しゆ</sup>々<sup>たく</sup>に思<sup>し</sup>慮<sup>りよ</sup>分<sup>ぶん</sup>別<sup>べつ</sup>する妄<sup>まう</sup>見<sup>けん</sup>妄<sup>まう</sup>識<sup>しき</sup>を悉<sup>ことごと</sup>く坐<sup>ざ</sup>禪<sup>ぜん</sup>の力<sup>ちから</sup>を以<sup>もつ</sup>て斷<sup>だん</sup>除<sup>じよ</sup>させて、謂<sup>いは</sup>ゆる冷<sup>れい</sup>煖<sup>だん</sup>自<sup>じ</sup>知<sup>ち</sup>の境<sup>きやう</sup>に達<sup>たつ</sup>した上<sup>うへ</sup>には、口<sup>くち</sup>邊<sup>へん</sup>に白<sup>はく</sup>醜<sup>しゆ</sup>を生<sup>せい</sup>ぜしめもてゆ<sup>ゆ</sup>く、此<sup>これ</sup>

は雲<sup>うん</sup>居<sup>こ</sup>道<sup>だう</sup>膺<sup>やう</sup>禪<sup>ぜん</sup>師<sup>し</sup>の語<sup>ご</sup>に若<sup>も</sup>し是<sup>こ</sup>れ體<sup>たい</sup>得<sup>とく</sup>底<sup>てい</sup>の心<sup>しん</sup>は臘<sup>らつ</sup>月<sup>げつ</sup>の扇<sup>せん</sup>子<sup>し</sup>の如<sup>ごと</sup>し、直<sup>ぢく</sup>に得<sup>え</sup>たり口<sup>くち</sup>邊<sup>へん</sup>に醜<sup>しゆ</sup>の生<sup>せい</sup>ずることとある。醜<sup>しゆ</sup>は酒<sup>しゆ</sup>や醋<sup>そ</sup>などに生<sup>せい</sup>ずる微<sup>ゐ</sup>のこである、即<sup>すなは</sup>ち口<sup>くち</sup>を閉<sup>と</sup>めて物<sup>もの</sup>を言<sup>い</sup>はぬ形<sup>けい</sup>容<sup>よう</sup>、是<sup>こ</sup>れ言<sup>げん</sup>を忌<sup>こ</sup>むに非<sup>ひ</sup>ず物<sup>もの</sup>云<sup>い</sup>ふことを嫌<sup>きら</sup>ふといふわけではない、又<sup>また</sup>黙<sup>もく</sup>して物<sup>もの</sup>云<sup>い</sup>ふはないのを好<sup>この</sup>むことと思<sup>おも</sup>ふでもない、汝<sup>に</sup>が心<sup>しん</sup>恁<sup>にん</sup>麼<sup>ま</sup>なることを知らしめんとなり、人<sup>にん</sup>々<sup>たく</sup>の心<sup>しん</sup>性<sup>じやう</sup>みな言<sup>げん</sup>説<sup>せつ</sup>なり、能<sup>よ</sup>く陳<sup>ちん</sup>べ得<sup>え</sup>られるものでないといふことを知らせんが爲<sup>ため</sup>である、故<sup>ゆ</sup>に雲<sup>うん</sup>居<sup>こ</sup>禪<sup>ぜん</sup>師<sup>し</sup>も前<sup>まへ</sup>の語<sup>ご</sup>に續<sup>つ</sup>いて是<sup>こ</sup>れ強<sup>じやう</sup>て爲<sup>な</sup>すには非<sup>ひ</sup>ず任<sup>にん</sup>運<sup>ゆん</sup>に此<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>しと示<sup>しめ</sup>されてある、然<sup>しか</sup>らば其<sup>そ</sup>の心<sup>しん</sup>性<sup>じやう</sup>の姿<sup>すがた</sup>は如<sup>ごと</sup>何<sup>な</sup>なるものかといふのに。

清水<sup>せいすい</sup>の如<sup>ごと</sup>く、虛<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>の如<sup>ごと</sup>し。純<sup>じゆん</sup>白<sup>はく</sup>清<sup>せい</sup>潔<sup>けつ</sup>にして和<sup>わ</sup>融<sup>じゆう</sup>無<sup>む</sup>碍<sup>がい</sup>なり。故<sup>ゆ</sup>に自<sup>じ</sup>心<sup>しん</sup>の外<sup>がい</sup>に顯<sup>けん</sup>はるゝ一<sup>いち</sup>物<sup>ぶつ</sup>なく、己<sup>こ</sup>靈<sup>れい</sup>の上<sup>うへ</sup>に纖<sup>せん</sup>塵<sup>ちん</sup>の遮<sup>さ</sup>るべきなし。全<sup>ぜん</sup>體<sup>たい</sup>明<sup>めい</sup>瑩<sup>えい</sup>にして珠<sup>しゆ</sup>玉<sup>ぎよく</sup>に列<sup>れつ</sup>せず。日<sup>じつ</sup>月<sup>げつ</sup>の光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>を以<sup>もつ</sup>て自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>の光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>に比<sup>ひ</sup>すること勿<sup>な</sup>かれ、火<sup>くわ</sup>珠<sup>じゆ</sup>の光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>を以<sup>もつ</sup>て自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>の眼<sup>がん</sup>睛<sup>せい</sup>に比<sup>ひ</sup>すること勿<sup>な</sup>かれ。道<sup>だう</sup>ふことを見<sup>み</sup>ずや。人<sup>にん</sup>々<sup>たく</sup>一<sup>いち</sup>段<sup>だん</sup>の光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、明<sup>めい</sup>らかなること千<sup>せん</sup>日<sup>じつ</sup>並<sup>なら</sup>び照<sup>てい</sup>すが如<sup>ごと</sup>し。暗<sup>くろ</sup>き者<sup>もの</sup>は外<sup>がい</sup>に向<sup>むか</sup>て覓<sup>み</sup>め明<sup>めい</sup>かなる者<sup>もの</sup>は内<sup>うち</sup>に向<sup>むか</sup>て存<sup>ぞん</sup>せず。靜<sup>じやう</sup>かに思<sup>おも</sup>ふべし内<sup>うち</sup>を以<sup>もつ</sup>て親<sup>しん</sup>きとするこゝなく、外<sup>がい</sup>を以<sup>もつ</sup>て疎<sup>そ</sup>とするこゝ



なしと。

吾人の心性は恰かも清水の如く虚空の如し、清水の如くであるから純白清潔であつて煩惱業障の汚染を帯びぬ、虚空の如くであるから和融無碍であつて諸佛と平等にして法界に圓通して居る、和融無碍であるから宇宙萬象悉く皆之に攝せられぬものが無いに依つて、此の自心の外に顯はるゝ一物もあるべきでは無い、純白清潔であるに依つて、宇宙萬象悉く皆包容しながらに、己靈の上に纖塵の遮るべきなく決して其れに汚されるといふことはない。己靈といふも自心といふも同じことである、譬へば明かなる鏡は如何なる物でも其影をうつすけれども、其影のために鏡に疵のつくといふことの無いやうなものである。實に我が此心性は全體明瑩にして珠玉に列せず、如何なる玉でも比べものにはならぬ、日月の光明を以て自己心性の光明に比すること勿れ、況や復た火珠の光明を以て自己の眼睛に比すべきではない、眼睛といふも自己といふも皆自心己靈のことである。道ふことを見ずやとあるは古人の語を引證されたのであるけれども、誰の語であるやら未だ考ふるところがない、然かし其語意は能く分つて居る、人々一段の光明すなはち謂ゆる自心己靈の本性は、明かなること千日の並び照すが如し、苟くも眼あるもの誰にも見えるはずであるにも拘はらず、其の眼が開けないで暗き者は外に向て覺める、此の大光明は決して外から來るものではない、去ればとて内に在るものでも無いに依つて正眼の明かなる者は内に向ても存せず、畢竟心性は十方法界一相平等の大光明である、靜かに思ふべし内を以て親きとすることなく、外を以て疎とすることなしと、古人も曾て示されてある。

古往今來是の如くなりと雖も、自倒自起し來ること勿れ。故に祖師親切に相見す。只恁麼に相逢ふ、更に多子なし。適來の因縁を以て明めつべし。必ずしも修證に依て到るべしと謂はず、參學に依て窮むべしと謂はず、只汝が心全く汝と親し。汝方に是れ道なりと謂ふ。此外に有相の佛も求めず、無相の佛も求めず。實に知りぬ汝誰にか合せん、誰とか離せん。卒に合に非ず離に非ず。設ひ是れ身と説くも是れ離に非ず、設ひ是れ心と説くも亦是れ合に非ず。恁麼の田地に到ると雖ども身の外に心を覓むること勿れ。設ひ生死去來すれども身心の作に非ず。

斯の道は古往今來昔も今も是の如くにして毫末も變りはない、畢竟自心己靈は少しも他人に關係のな



いものではあるけれども、其れならばとて自倒自起と自分の自由勝手といふわけには往かぬ、故に祖師親切に相見す、迦葉の悟りは迦葉の悟りであつて釋尊の悟りではないけれども、拈華微笑の相見があつて始めて佛祖である。迦葉の悟りを阿難に授けたのではないけれども、多子塔前の相見あつて始めて單傳の實がある。只恁麼に相逢ふ更に多子なし、多子なしとは別に更に加ふべきものはないといふのである。適來の因縁すなはち此の本則の第八祖と第九祖との相見、九祖の言行を其儘に八祖が保證したまでのことである。此れが必ずしも修證に依て修行の機能を積で心性を證得するに到るべしと八祖が言はれたのではない、又參學に依て窮むべしと教へられたのではない、只汝が心全く汝と親し、汝方に是れ道なりと謂はれたまでのことである。此外に有相の佛も求めずさればとて更に無相の佛も求めず、誰にか合せん誰とか離せん、元來合すべきものもなければ離るべきものもない、乃ち卒に合に非ず離に非ずである、是に至りては設ひ是れ身と説くことが有ても心の外に身を説くのではないに依て固より離に非ず、又或ひは心と説くことが有ても、敢て合に非ず、乃至佛と説くも衆生と説くも生死と謂ふも涅槃と謂ふも、唯に離合の相なきのみならず、去來も増減もあるべきではない。恁麼の田地に到ると雖も身の外に心を見むること勿れ、身は是れ生死去來して無常變遷するけれども心は涅槃寂靜にして常住不滅であるなど、身と心とを分けて妄想分別すべきではない、設ひ生死去來すれども其の生死去來は畢竟身心の作に非ず、淨法界身は本より出沒なし、大悲の願力、去來を示現すといふやうなものである。

諸佛も恁麼に保任して三世に常に證し、諸祖も恁麼に保任して三國に現はれ來る。諸仁者も恁麼に保任して更に分外にすること勿れ。十二時中卒に未だ相錯ることなし。十二因縁却て是れ轉法輪なり。此田地に到る時、五道の輪轉自ら大乘の翻軸なり。四生の受業まさに是れ自己の活計、設ひ情と説き非情と説くも、恰も眼目の異名なり。設ひ衆生と謂ふとも、心意の別稱なり。心を勝れたりとして、意を劣れりとする事勿れ。豈に眼を賤みて目を貴しとせんや。這箇の田地、卒に根塵の境界なく、心法の所見なし。故に人々悉く是れ道なり、事々都て心ならざることなし。

此の法は法界平等一相無差別であるに依て、諸佛も恁麼にして三世に證し、諸祖も恁麼にして梵漢日本三國に現はれ來る、彼れ何人を吾れ何人を諸仁者も恁麼に保任して更に分外にすること勿れ、人



皆な本分あり此事を本分の外に放過すべきではない。十二時中飢ては食ひ疲れては眠る卒に未だ相錯ることなし、是に至りては十二因縁順流して生死に展轉するも、其の生死流轉そのまゝに却て是れ轉法輪なり、十二因縁とは無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二で是れは過去の業因に依り現在の果を招き現在の業因に依りて未來の果を感ずる因縁相を示されたものである。此田地に到る時、地獄餓鬼畜生修羅と人間との五道の輪轉自ら大乘の轉軸なり、胎生卵生濕生化生の四生の受業まゝに是れ自己の活計である、永平高祖は此道理を六趣四生の輪轉皆な此れ菩薩の行願となると示されてある、轉軸といふは轉經といふも同じこと實に大乘の經典は花とも轉ずれば月とも翻ずる。故に設ひ情と説き非情と説くも恰も眼目の異名なり、眼と目とは名が異なるまでのことで其實は同一體である如く、人畜等の有情と謂ふも草木等の非情と稱するも畢竟同一體の異名に過ぎぬ、設ひ佛と謂ひ、衆生と謂ふとも心意の別稱なり、こゝに（佛と謂ひ）の一句が落ちてゐるかと思ふ、已に經にも心と佛と及び衆生と、是の三は差別なしとある通り、只々心と謂ひ意と謂ふの別稱の如きもので、其實は同じものである、心を勝れたりとし意を劣れりとする事勿れ、豈に眼を賤み目を貴しとせんや、要するところ這箇の田地の場合に到りては卒に根塵の境界がないに依て見るべき眼根もなければ見らるべき色塵もない。心法の所見なし、已に根塵等の色法がないのであるから、之に對する心法といふものもない、故に人々悉く是れ道なり事々都て心ならざるることなし、其實は山川草木皆道である、開花落葉ことごとく心ならざるものはないのである。

今朝又此因縁を指説せんとするに卑語あり。大衆聞かんと要すや。

莫言語默涉離微

豈有根塵染自性

言ふこと莫れ語默離微に涉ると、豈に根塵の自性を染むる有らんや、離微といふことは僧肇法師の「寶藏論」に離微體淨品といふ一段がある、其の中に離微の二字は蓋し道の要なり、六入の跡なきを離と謂ひ、萬用の我なきを微と謂ふと云ふてある、又字書には離は明なりとも註し微は妙なりとも云ふてある、孰れにしても今は心性の靈妙なる形容を離微と謂ふたのである。乃ち此の靈妙不可思議なる道の本體、心の本性を語默を以て彼れの此れのと論量すべきものと思ふては成らぬぞといふのが第一句の大意、他の説を以てすれば、離微は入離出微とも釋して居るから本則の離合の二字に該當す、祖師門下に於ては或時は無舌人の語を打し或時は淵默して他の舌頭を裁斷す、默の時説、説の時默、大施門開て壅塞なし語默動靜體安然である、に依て其の儘離微を超越して居ることを知らねばならぬ、此の意を第一句に於て示されたものである。



又第二句の根塵といふは例の通り眼耳鼻舌身意の六根と色聲香味觸法との六塵、此の六根六塵が都へての煩惱妄想の本であるといふのが教相の常談であるが、如何ほど六根六塵が煩惱を起したからといふても、豈に自性を染むること有らんや、自心己靈の本性は元來染淨を超越したものであるから、如何なるものにも染汚されるといふことが無い、故に此の不染汚の本性を徹證し來れ、方に汝が本心の合に非ず、離に非ざることを了ぜんと示されたのである、本章の大要實に此の二句の外はないのである。

### 第十章

第十祖脇尊者。執侍伏駄密多尊者左右三年。未嘗睡眠一日尊者誦修多羅及演無生。師聞悟道。

以上本章の本則以下太祖の御提唱子細に參究するが宜い。

師は中印度の人なり、本名は難生。初め師將に誕れんとす、父夢むらく、一の白象、脊に寶座あり、座上に一の明珠を安ず、其の光り四衆を照すと。既に覺て遂に生る。伏駄密多尊者、中印度に至て行化す。時に長者香蓋と云ものあり。一子を携へ來て尊者を瞻禮して曰く、此の子處胎六十歳、因て難生と號す。復た嘗て一りの仙者に會へり、謂く此の兒は凡に非ず、法器と爲る



べしと。今尊者に遇ふ、當に出家せしむべし。尊者爲めに落髮授戒せしむ。處胎六十年、生後八十年、都盧一百四十年なりしに、始て發心す。老耄せること至て老耄せり。此に依て發心せんとせし時、人皆な諫めて汝既に老耄す、徒に清流にあとして是れ何にかせん。出家に二種あり、一には習禪、二には誦經、汝が堪ゆべきに非すと。

先づ最初に例の如く第十祖の生縁と出家との事歴を擧げられた。第十祖脇尊者は中印度の人である、梵名は婆栗濕縛であるが此には本名は難生とある、難生と名けられたわけは、第十祖が生れる前に其父が一の白象の背に寶座あり座上に一の明珠を安じ其の光り比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆を照すといふの夢を見た、其夢が既に覺て遂に生る。其後八十年を経てのことと見えるが、第九祖伏駄密多尊者中印度に至て行化す、時に長者香蓋と云ものあり、一子を携へ來て尊者を瞻禮して曰く、此子處胎六十歳、因て難生と號す、復た嘗て一の仙者の能く人相を觀るものに會へり、其の仙者の謂く此の兒は凡庸に非ず必ず法器と爲るべしと、今尊者に遇ふ當に出家せしむべし、尊者爲めに落髮授戒せしむ。母の胎内に居ること六十歳、生後さらに八十年、都盧一百四十年なりしに、(百四十歳の一子を携へた

る其父の年は幾許なりしか到底尋常人智を以て測るべきのことでは無い) 今百四十歳にして始て發心す老耄せること至て老耄せり、此に依て發心せんとせし時、人皆諫て汝既に老耄す、徒らに清流にあとし(異本には跡を清流に濫してとある)て是れ何にかせん、佛法の清き流れに身跡を委ねて何を修むべきや、出家に二種あり一には専ら禪定を修する習禪あり、二には専ら智慧を練磨する誦經あり、孰れにしても汝が堪ふべきに非すと云て其の出家の志をこばまんとした。然るに

師、世人の謗りを聞て、自ら誓ひて曰く、我出家して若し三藏を學通し三明明を得ることなくば、誓て脇を席に着けずと。是の如く誓ひて晝は參學誦經し、夜は安禪思惟して卒に睡眠せず。初め出家せんとせし時、祥光座を燭して、仍て舍利三七粒現前することを感ず。此れより精進して疲れを忘るゝこと三年、遂に三藏を學通し三明智を開く。一日尊者修多羅を誦じ、無生を演へたまふ時、師聞て悟道し、卒に第十祖に列す。

師は世人の謗りを聞て自ら誓ひて曰く、我出家して若し經と律と論との三藏を學通し、生死智明と宿



命智明と漏盡智明との三明を得ることなくば、誓て脇を席に着けて眠らずと、是の如く誓ひて晝は參學誦經し夜は安禪思惟して卒に睡眠せず、ひたすら刻苦勉勵せられた。初め出家せんとせし時、祥瑞の光明ありて室内の座を照らし、佛骨の舍利三七粒現前することを感ず、舍利とは梵語の舍利維を省略したので、漢譯すれば骨身と曰ふ、釋尊入滅の時に遺身を火葬したてまつりしに、多くの珠の如きものを得たるを佛舍利といふ、至誠に信心を凝らして祈請する者は往々之を感得するの例、古より幾らもあると云ふことである。第十祖は此れより精進して疲れを忘るゝこと三年、遂に三藏を學通し三明智を開く、一日第九祖伏駄密多尊者修多羅を誦じ無生を演べたまふ時、師聞て悟道し、卒に第十祖に列す、以上第十祖の生緣および出家修證の來歴の大略である、以下太祖の御提唱。

知るべし佛祖の功業として是の如く精進疲れを忘れて參學誦經安禪思惟す。  
 祖師も亦尋常に修多羅を誦じ及び無上を演ふ。此修多羅と謂ふは正眞大乘經なり。同く佛說なりと雖も、大乘經に非ざれば誦することなし、了義經に非ざれば依ることなし。此大乘經といふは織塵を拂ふと説かず、妄想を除くと

言はず。了義經といふは、必ず理を盡し妙を盡すのみに非ず、即ち其事を盡し來る。謂ゆる事を盡すといふは、諸佛の發心より菩提の涅槃に至り、三乗五乗を説き來て劫國名號皆以て盡さずと云ふことなし、此を了義とするなり。然れば佛經は是の如しと知るべし。

上來第十祖の勇猛精進せられたる經歷に考へて見ても、都て佛祖の功業としては是の如くに精進して疲れを忘れて參學誦經安禪思惟せられたものであるといふことを能く知らねばならぬ。乃ち如何なる祖師と雖も尋常普通の修行者の如く修多羅を誦じ及び無上（異本には無生とある、本則の本文に考へ合せて見ても、無上は全く無生の寫誤であらうと思はれる）を演べられるのである。さて此修多羅と謂ふは梵語であつて漢語には契經と翻譯する、佛の説かせられた經文のことである。契とは理に契ひ機に契ふと註し萬代不易の眞理に契合し又衆生の根機にも契當するの意である。佛の説かせられた經文には小乘經と大乘經との差別がある、其中に今祖師の誦せられたのは正眞の大乘經である、同く佛說なりと雖も大乘經に非ざれば誦することなし、偕又其の大乘經の中にも了義經と不了義經との差別がある、其中に祖師の受持せられるのは了義經に非ざれば依ることなし、依るといふは證據とし



又標準にするといふほどのことである。此大乘經といふは穢塵を拂ふと説かず妄想を除くと言はず、  
 都べての煩惱妄想を拂ひ除くのが大乘佛法の主意ではない、都べての煩惱妄想を其儘に涅槃菩提の光  
 明を放たせるのが、大乘佛教の目的である。了義といふは必ず理を盡し妙を盡すのみに非ず、即ち其  
 事を盡し來る、都べて此の理と事との二つに片寄らぬやうにするが肝要である、道理にのみ片寄て事  
 實を忘れては空論になる、さればとて事實にのみ片寄て道理を忘れては妄動になる。今こゝで佛法を  
 道理の上から言へば草木國土悉皆成佛で吾も人も皆此儘に佛である、けれども之を事實の上に顯はす  
 に就いては諸佛の發心より菩提の涅槃に至り、段々と修行證果の階級があり、初め人間天上聲聞緣覺  
 菩薩の五乘または聲聞緣覺菩薩の三乘といふ處から説き來て遂には其成佛する時代の劫數も成佛した  
 後の淨土の國の名も又其佛の名號も皆以て盡さずと云ふことなし、此を了義とするなり、然れば佛經  
 は是の如しと知るべし、祖師の誦じ且つ依らるゝ正眞の大乗經は是の如きものであると知るべきで  
 ある。

設ひ一句を道得し、一理を通得すと雖も、一生參學の事畢らずんば、即ち是  
 れ佛祖と許し難し、然れば必ず精進疲れを忘れ、發心群を抜け、修行倫を絶

して、子細に參到し委悉に究辨して夜を以て日に續ぎ、志を立て力を起し、  
 佛祖出世の本懷、自己保任の旨趣、悉く明辨して、一生の間に於て理として  
 通ぜずといふことなく、事として盡さずといふことなくして、即ち是れ佛祖  
 なるべし。近來祖師の道すたれ、參學の實處なきに依て、卒に一言を通じ一  
 理を通ずるを以て足りぬと思へり。恐らくは是れ増上慢の類なるべし。大に  
 畏るべし。

設ひ一句を道得し一理を通得して一時の省悟があつたとしても、尙ほ一生參學の事畢らずんば、即ち  
 是れ佛祖と許し難し、一生參學の事といふは吾人生涯最終の目的唯此の參學の能事を畢らしむるに在  
 りといふの意味である、此事は必ず此一生の間に成就せしむべきことであつて、決して他生後生を待  
 つべきものではない。其れ故に必ず精進して疲れを忘れ、其發心の初めより尋常の人の群を抜け、其  
 修行も亦た倫を絶して他に比類なきほどに仔細に參到し委悉に究辨して夜を以て日に續ぎ、志を立て  
 力を起し、佛祖出世の本懷に契ひ自己保任の旨趣を完うする。佛祖出世の本懷といふは「法華經」に  
 佛は一大事因縁の爲めに世に出現すと説かれてある、其の一大事因縁といふは佛の知見を開示悟入す



るといふのであるが、今は其れを自己保任の旨趣を明辨すると言はれた。實に此の自己保任、自己果して何ものぞ其の自己の自己たる所以が眞實に保任せらるゝ、其れが即ち佛知見の開示悟入である、即ち一大事因縁である、斯くて一生の間に於て理として通ぜずといふことなく、事として盡さずといふことなくして即ち是れ佛祖なるべし。然るに近來祖師の道すたれ、參學の實處なきに依て、卒に一言を通じ一理を通ずるを以て足りぬと思へり、僅に一則の公案に就て省發があつたとか、一時の機會に於て思慮分別の轉變があつたとかいふほどの事を以て、見性と稱し悟道と名け、謂ゆる一生參學の能事畢れるが如くに思ふもの今の世に尤も多く、恐くは是れ増上慢の類なるべし、慢心といふに多種あるが其中に未得謂得未證謂證と謂て、未だ得道せざるに已に得道せりと思ひ、未だ證悟せざるに已に證悟せりと思ふ、此等を増上慢といふべきである。若しも誤つて是の如き邪坑に陥ることあらば、萬劫にも取り返しのつかぬことになる。大に畏るべしと謂はねばならぬ。

道ふことを見ずや。道は山の如く、登れば益々高し。徳は海の如し、入れば益々深し。深きに入て底を究め、高きに登て頂を極めて、始て眞の佛子たらん。身心徒に放捨すること勿れ。人々悉く道器なり。日々是れ好日なり。只

子細に參と不參とに依て、徹人來徹人あり。必ずしも人を選ぶに非ず、時を選ぶに非ざることを、今の因縁を以て知るべし。

道は山の如く登れば益々高し、徳は海の如し入れば益々深し、此れは誰の語であるやら未だ考ふる所はないが、永平高祖の語にも山に登らば須からく頂きに到るべし海に入らば須からく底に到るべしと示されてある。實に深きに入て底を究め高きに登て頂きを極めて始て眞の佛弟子たらん、其れに就けても此の受け難き最勝の身心これを徒に放捨せぬやうに慎まねばならぬ。此れ亦永平高祖は人身受け難く佛法遇ふこと稀なり今我等受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に遇ひたてまつれり。生死の中の善生、最勝の生なるべし。最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れと示されてある。實に是れ我等々々悉く道器なり誰か復た得道せられざるものあらん。且又日々是れ好日なり孰れの日か參禪辨道せられざるの日あらん、只子細に實參實究するや否や即ち參と不參とに依て、其道に到徹するや否やの差別を生じて徹人未徹人の分が定まるのである。敢て必ずしも人を選ぶに非ず、如何なる人にも實參すれば徹人たるべきである。敢て時を選ぶに非ず、如何なる時でも因縁機縁純熟すれば忽ち佛祖の位地に列することの出来るは、今の因縁すなはち第十祖得道の機縁



を以て知るべきである。

既に百四十餘、老耄す。然れども志無二に依て精進疲れを忘れしかば、卒に一生に參學し畢る。實に憐むべき老骨の身として、左右に侍すること三年、卒に睡眠せずといふ。今人は殊に老て怠たることあり。遙かに往古の先聖を思ひやりて、寒苦をも寒苦とせず、暑熱をも暑熱とせずして、身命を斷ずと思ふこと勿れ。心慮及ばずと思ふこと勿れ。若し能く是の如くならば則ち稽古の人なるべし。是れ則ち有道の士なるべし。若し稽古あり有道ならんが如くんば、誰か是れ佛祖に非ざらん。

今此の第十祖脇尊者は百四十歳の老耄の身を以て、始て第九祖に相見して發心出家せられたのである。然れども其志に餘念なく純一無二、精進して疲れを忘れ、卒に一生に參學し畢る、實に憐むべき老骨の身として第九祖の左右に侍すること三年といふ久き間、脇を席に着け横になつて睡眠したことは無いといふ。其の精進勉勵の様子思ふべきである。然るに今時の人は殊に老て怠たることあり、誠に慚愧すべきである。遙かに往古の先聖を思ひやりて寒苦をも寒苦とせず、暑熱をも暑熱とせずして、身命を斷ずと思ふこと勿れとは寒熱などのために身命も續かぬかと思ふが如き心配をせず、身も命も道のためには惜まぬやうにせよといふこと。心慮及ばずと思ふこと勿れとは、往古の先聖の如き精進勉勵は到底吾等の企て及ばぬところであるなどと思ふ自暴自棄に陥らぬやうにとの誡め。若し能く是の如くならば則ち稽古の人なるべし、稽古といふことは「書經」の堯典に稽古帝堯とあるのが本で都べて、古の道を考ふることを稽古といふやうになつたのである。即ち稽は考なりと註して思考することである。是れ則ち有道の士なるべし、有道とは道を保有するの義であるから、即ち得道の人といふも同じことである。若し稽古ありて修行が積み其の結果を證得したる有道の人ならんが如くんば誰か是れ佛祖に非ざらん、乃ち稽古ありて有道なる人を名けて之を佛祖と稱するまでのことである。

既に修多羅を誦ずといふ。夫れ修多羅を誦すること、必しも口に誦じ手に取て以て轉經とのみすべからず。子細に佛祖の屋裡にして徒らに聲色の中に功夫せず、無明胎中に行履せず、處々に智慧發生し、時々心地開明して、須ら



く修多羅を誦すべし。十二時中恁麼に行履し來るに、曾て依倚せざらんが如くんば、即ち是れ無生の本性を體達せざる無かるべし。

今我が第九祖は既に修多羅を誦すといふ其の修多羅すなはち經文を誦するといふことは、必ずしも口に誦し手に取て以て轉經とのみすべからず、子細に佛祖屋裡の家業は果して如何なるものであるかといふことを究明して、徒らに聲色の中に功夫したり無明胎中に行履したりせぬやうに警戒を加へなければならぬ。聲色の中に功夫するとは六根六塵の爲めに支配されて思慮分別の間に妄解を弄することである。無明胎中の行履といふは行住坐臥すべての作業が皆悉く貪瞋痴慢の種因になるといふことである。今我が佛祖屋裡の功夫行履は全たく其れと異なり、處々に智慧發生し時々心地開明して須らく修多羅を誦すべし、處々皆修多羅であるから佛殿も法堂も山河も草木も悉く無字の經文ならざる所はない。時々皆修多羅であるから明けても暮れても無始劫來未來永劫悉く誦經の時節ならざるは無い。是の如き處々時々行住坐臥すべて佛祖の智慧を發生し自己の心地を開明する、即ち是れ佛祖屋裡に修多羅を誦する狀況である。十二時中寢ても起きても恁麼に行履し來るに曾て一事一物に依倚せざらんが如くんば即ち是れ無生の本性を體達せざる無かるべし、依倚せずといふことは何事も皆因縁に任せて善惡邪正是非曲直悉く心に留めず情に執せず任運自由に行ひゆく姿である。無生の本性といふことは、次下の御提唱に於て自づから明らかになる。

知らずや。生じ來れども從來する所なく、死し去れども亦去處なし。當處に出生し、隨處に滅盡す。起滅時と共に怠たらず。故に生是れ生に非ず。死是れ死に非ず。然も參學人として生死を以て心頭に掛ること勿れ。見聞を以て自ら隔ること勿れ。設ひ見聞となり聲色となるとも自の光明藏なり。眼根より光明を放て色相莊嚴を作し來り耳根より光明を放て音聲の佛事を聞き得たり手裡に光明を放て自を轉じ他を轉ず。脚下に光明を放て進歩退歩す。佛法の一大事は生死の解決を以て最第一とするのであるが、熟々生死來去の相を觀するに、生じ來れども其の生の從來する所なく、どこからどうして生れて來たといふことも無い。又死し去れども亦去處なし、死でから何處へ往くといふ處もない。去來ありと雖も去來の儘が眞如實際にしてその跡を留めぬ。畢竟唯是れ因縁假和合の離合出沒であるから、當處に出生し隨處に滅盡す、恰かも大海に波瀾



の出没するやうなものである。少しも實體の認むべきものはない、乃ち因縁起れば當處に生じ、因縁盡れば隨處に滅す、毫も定相の認むべきものはない。實體なく定相なき其儘に起滅時と共に怠たらずとは、前が滅すれば後が生じ後が生ずれば前が滅す、其れが無始劫このかた未來永劫止む時がない、故に生是れ生に非ず死是れ死に非ず、即ち無生にして無滅である。然るに謬りて其生に實體あり其滅に定相あるが如くに執着するに依て、生死を以て苦厄となし起滅を以て煩惱とするのである。今其れ佛祖の門下に於て參學人ともいはれる者が是の如く實體もなく定相もなき生死を以て心に掛くべきわけではない、然らば如何にして此の生死の間に處すべきかといふに、永平高祖が生死を厭ふべきの法ぞと思へるは佛を厭ふの咎となる、生死は佛の御命なり厭ふべからずと示され、又生死を生死に任ずとも示されてある。此れが佛祖屋裡の生死に處する標準である。故に今我が太祖は見聞を以て自ら隔ること勿れと仰せられた、見聞といふは眼根に色塵を受け、耳根に聲塵を受ける乃至他の鼻舌身意に香味觸法を受ける。是等を以て生死去來の原因とするは敎家の常談であるが、設ひ見聞となり聲色となるとも、其の見聞聲色そのまゝに自の光明藏なりと知るべきである。乃ち眼根より光明を放て色相莊嚴を作し來り、東坡居士が山色豈に清淨身に非ざらんやと詠じたのも此の莊嚴である。耳根より光明を放て音聲の佛事を聞き得たり、東坡居士は此の實況を溪聲使ち是れ廣長舌と讚歎したのである。

手裡に光明を放て自を轉じ他を轉ず、世尊が拈華せられたのも、天龍が一指を豎てたのも皆此の光明の波動である。脚下に光明を放て進歩退歩す、日夜に佛殿に上り庫堂に走るも、白雲萬里の境に退身三步するも、百尺竿頭に更に一步を進るも皆此の消息の八兩半斤である。佛祖屋裡に正眞の修多羅を誦ずる景況は大凡是の如きものである。

今日又恁麼の道理を指說せんが爲に、卑語を着けんと思ふ。聞かんと要すや。

轉來轉去幾經卷 死此生彼章句區

轉じ來り轉じ去る幾經卷といふは修多羅を誦ずる行持を頌じ、此に死し彼に生ずといふは無生を演ぶる祖意を頌す。而して章句區なりの三字を以て前の修多羅に結歸せしめられた。實に此の十方法界を一枚の紙となし宇宙萬象を文字となしたる經卷は幾千萬億卷とも數を知らず。且つ其の章句の區々なることは、六道の章句もあれば四聖の章句もある、迷悟昇沈生滅去來皆其の大文字ならざるは無い。



### 第十一章

第十一祖富那夜奢尊者。合掌立脇尊者前。尊者問曰、汝從何來。師曰、我心非往。尊者曰、汝何處住。師曰、我心非止。尊者曰、汝不定耶。師曰、諸佛亦然。尊者曰、汝非諸佛。諸佛亦非也。師聞此言、經三七日修行、得無生法忍。告尊者曰、諸佛亦非、非尊者。尊者聽許付正法。

以上本章の本則であることは例の通りであるが、此の本則は豫め少し辯じて置くべき必要がある。第十一祖の富那夜奢尊者が合掌して第十祖脇尊者の前に立たれた。其時に第十祖が汝何れよりか来るやと問はれた。富那夜奢は之に答へて我心は往に非ず、何處から来たかとの御問であるが、私の心は何處へも往たり來たりは致しませんといふ。然らば汝は何の處に住するや、我が心は止に非ず、私の心は動いたり止まつたりは致しません。然らば汝は不定であるか、往きもせず來りもせず動きもせず止まりもせず、孰れとも定まらぬのであるか、其れは私ばかりではありませぬ。諸佛も亦然り、十方三

世の諸佛も皆不定であります。いや汝は諸佛に非ず、其方は諸佛では無い。一體に諸佛などといふのが非すなはち謬りである、其方は自分の外に諸佛とかいふものが別にあると思ふて居るが、莫妄想と叱られた氣味である。こゝで富那夜奢は自分の悟りを悉く取りあげられてしまふたに依て、大疑團を起した。乃ち三七二十一日の間専心一意に修行せられた結果、遂に無生法忍の悟りを開られた。仍て更に第十祖に調して實に諸佛といふも亦非でありましたが、我師を尊者といふのも亦た謬りでありました。結局彼れの此れと名くべきものは無いのでありますと申しあげた。是に於て第十祖は其の悟りを聽許せられて第十代の祖位に即かしめられたのである。無生法忍といふことに就ては教家には色々の説もあるが「註維摩經」の僧肇の註に法の無生を見るを以て、心智寂滅堪受して退かず、故に無生法忍と名くとあるのが、尤も簡潔にして分明であると思ふ。一切諸法は皆悉く無生無滅であるといふことは之を識得することが出来ても、其の理致を實際に堪受して退かないといふことが難いのである。そこで此の忍といふことが尤も大切になるのである忍は即ち能く擔任保持して不退轉なる姿をいふのである。

師は華氏國の人なり。性は瞿曇氏。父は寶身、脇尊者初め華氏國に至て一樹



の下に憩ふ。右手に地を指して衆に告て曰く、此地金色と變ぜば、當に聖人ありて入會すべしと言ひ訖りて、即ち地金色と變ず。時に長者の子、富那夜奢と云ふ者あり、合掌して立つ云々。尊者因に偈を説て曰く、此地變金色預知有聖至。當坐菩提樹。覺華而成已。夜奢復偈を説て曰く、師坐金色地。常説眞實義。回光而照我。令入三摩諦と。尊者、師の意を知て即ち度して出家し戒法を具せしむ。

以上第十一祖の生縁と學歴とを叙べらるゝこと例の如くである。第十一祖富那夜奢師は華氏國といふ處の瞿曇姓で寶身といふ人の子である。華氏國といふは中印度で彼の名高い阿輪迦王の都のあつた處であるさうだ。或時第十祖波利濕婆尊者が其華氏國へ行化なされて、或る一樹の下に憩はれ、右手に地を指して衆に告て曰く、此地金色と變ぜば、當に聖人ありて入會すべしと言はれた。此れは其實のところ第十一祖に限つたことではない、人々各自に立脚の地が皆黄金とならねばならぬのである。更に言ひかえれば、人々各自大悟徹底の人にさへ成れば其人の脚下が皆金色になるのである。今も第十祖が斯う言ひ訖ると同時に即ち地金色と變ず、時に寶身長者の子富那夜奢と云ふ者あり、合掌して立

つ云々。其時の問答が即ち前の本則である。そこで更に第十祖の脇尊者因に偈を説て曰く、此地金色と變ぜり豫め聖の至ること有るを知れり、汝は必ず聖者となるべき人であるに依て、當に釋尊大悟の時の儀式の如く菩提樹の下に坐して覺華して成し已るべしと言はれた、菩提樹といふことも別に樹木を指すのではない、現に神秀上座は身は是れ菩提樹ともいふた。要は菩提を成就すべきの立場をいひ、覺華とは正覺の華の開くを立ふのである。富那夜奢は此偈を聞て復た偈を説て答へ且つ願はれた。師は金色の地に坐して常に眞實の義を説きたまへり、願はくは其光を回らして我を照し三摩諦に入らしめたまへと。是に於て脇尊者は富那夜奢の意を知て即ち度して出家し戒法を具せしむと初めて僧伽の身とならしめられた。是れから本則に謂ふ所の三七日の修行に及ばれたものと見える。三摩諦といふは常には多く三摩提と書く孰れにして梵語の對譯字に過ぎぬ、漢譯すれば正定となる「大智度論」には一切の禪定に心を攝するを皆三摩提と名くといふてある。戒法を具せしむといふは、小乘戒に於ては二百五十戒、大乘戒に於て十重禁戒と四十八輕戒、ことごとく受けて始めて眞の大比丘僧となるのである。

適來の因縁。夜奢尊者元來是れ聖者なり。之に依て我心は往に非ず。我心は



止に非ず。諸佛も亦然りと説く。然も猶ほ是れ兩個の見なり。所以者何となれば、我心も是の如く諸佛も是の如しと會す。是に依て尊者耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ。眞實得道の人も猶ほ是れ自救不了なり。何に況や諸佛を存することあらんや。是に依て汝諸佛に非ずと説く。

適來叙べたる所の第十祖と第十一祖と相見の因縁を考ふるに、夜奢尊者は元來是れ聖者である。之に依て我心は往に非ずだの我心は止に非ずだの諸佛も亦然りだのと説かれたのである、然も猶ほ是れ兩個の見である、其の所以は何となれば我心も是の如く諸佛も是の如しなどといふところ、未だ我と諸佛とを二つ並べて見て居る、我心の外に諸佛といふ尊いもののあるやうに思ふて居る。是に依て第十祖尊者は耕夫の牛を驅るが如く飢人の食を奪ふが如くに、富那夜奢の此上もなく珍重して居る所の諸佛を奪ふて、汝は諸佛に非ず諸佛といふも非なりと叱られたのである。是の如き場合になつては眞實得道の人であつても猶ほ是れ自救不了也、自救不了といふは手の着けやうがないといふほどの俗語である。是に至りて諸佛を存すること有らんや、諸佛亦然りなど云ふて居るべき場合ではない、是に依て第十祖は汝非諸佛と説き示されたのである。

是れ理性を以て知るべきに非ず。非相を以て辨ずべきに非ず。故に諸佛の智を以て知るべきに非ず。自己の識を以て量るべきに非ず。故に此言を聞てより三七日の間修習行道して措くことなし。遂に一日覺觸して方に我心を忘じ、諸佛を解脱す。是を無生法忍を悟ると謂ふ。遂に此理に通じて邊表なく内外なきに依て、其得處を説くに曰く、諸佛亦非非尊者なりと。

さて此の汝は諸佛に非ずといふの一句、眞實に二物對待の見を離れて謂ゆる無生の眞際に到達するといふことは、是れ理性を以て知るべきに非ず、眞理は此の如しか法性は彼の如しか之を知ることには知り得べきも、之を實際我物とするとは容易のことではない。非相を以て辨ずべきに非ず「金剛經」などに説かれてある非相の道理は設ひ之を辨ずべしとするも、之を實際我物とすることは容易のことではない。況んや他の諸佛の智を以て之を知るべきに非ず、門より入るものは家珍ではないからである。然らば自力かといふに自己の識を以て量るべきに非ず、すべての思慮分別は皆妄識の轉變に過ぎぬ結局如何にすれば好いのであるぞ。永平高祖は曾て此法は人々分上ゆたかに具はれりと雖も修せざるには顯はれず、證せざるには得ることなしと示されてある。今第十一祖は此言すなはち汝非諸



佛の一言を聞いてより三七日間修習行道いはゆる菩提樹に坐して措くことなし諸縁を放捨し萬事を休息して只管に辨道せられた結果、遂に一日覺觸して方に我心を忘じ諸佛を解脱す、我も佛も一時に空寂に歸し了つた、之を無生法忍を悟ると謂ふのである。遂に此理に通じて邊表なく内外なきに至り、十方法界一切諸法實相無礙の境に達せられた富那夜奢尊者は、其得處を説くに諸佛といふも亦非、又尊者といふも尊者に非ずとの意を叙べられた、是に於て始て祖立に即くことを得るに到つたのである。

實に是れ祖師の道は、理を以て通ずべきに非ず。心を以て辨すべきに非ず。故に法身法性萬法一心を以て究竟とするに非ず。故に不變とも説くべからず。清淨とも會すべからず。何に況や空寂なりと會せんや。至理なりと辨せんや。故に諸家の聖者、悉く此處に到て初心を回し再び心地を開明して、直に入路を通じ速に己見を破す。今の因縁を以て知るべし。已に是れ聖者たるに依て來る時地即ち變じ、徳風物を驚かす力あり。然れども尚ほ三七日の間、修習して此所に達す。故に諸仁者子細に明辨して、僅に小徳小智己見舊情を以て

宗旨を定むること勿れ。大に須らく子細にして始て得べし。

實に是れ祖師の道は理を以て通ずべきに非ず、故に教外別傳と謂ふ、心を以て辨すべきに非ず、故に心を覺むるに不可得とも謂ふ、法身法性とか萬法一心とかいふも、皆是れ教相上の戲論に過ぎざれば究竟とするに非ず、不變とも説くべからず、變通自在でなければならぬ、清淨とも會すべからず、故に如何なるかは是れ清淨法身といふの間に答へて、膿滴々地と謂ふ場合もある、何に況や空寂なりと會せんや、空即是色は衲子の常談ではないか、然らば至極の道理は言語道斷心行處滅であると謂ふの外はないかといふに、祖師の道は決して其の様な手の着けやうのないものではない、細大精粗洩さるべきものはない、豈至理なりなどと謂ふて濟まし得べきものならんや。畢竟如何といふに諸家の聖者如何なる碩學の高僧だちも悉く此處に到て初心を回し、從前の學解も悟道も皆打棄て、更に再び心地を開明し周金剛が年來學得したる經疏を悉く燒棄て、龍潭禪師に參隨し遂に徳山禪師と爲られたやうに、直に入路を通じ速かに己見を破て、會て如何なる自己の見解があつたにもせよ、其れを皆一時に自ら破棄して明師の指導に隨順することは、今の因縁此の本則を以て知るべきである、第十一祖富那夜奢尊者は已に是れ聖者である、故に始て第十祖の前に來る時に地即ち變じ徳風物を驚かす力が有



つた、然れども尙三七日の間修習して此所に達せられたのである、故に諸仁者子細に明辨して僅に小徳小智己見舊情を以て宗旨を定むること勿れと誡められた。達磨大師が震旦の二祖を誡められた時にも、諸佛無上の妙道は曠劫に精勤して行じ難きを能く行じ忍び難きをも能く忍ぶべし、豈に小徳小智輕心慢心を以て眞乘を冀はんと欲し徒らに勤苦に勞せんやと示された如く、實に大に須らく子細にして始て得べきである。

今朝又此因縁を會せんとするに、忝く卑語を以てす。大衆聞かんと要すや。

我心非佛又非汝。來往從來在此中。

第十祖と第十一祖の相見乃至付法に到るまでの因縁を唯一句に我心は佛に非ず又汝に非ずと頌せられた。此一句を更に佛は心に非ず又汝に非ずとも參じ、又汝は佛に非ず又心に非ずとも觀すべきである。又他の一面より參究すれば我心は佛又是汝とも見るべく佛是我心又是汝とも汝は佛又我心とも參すべきである、此れが即ち無生法忍である聽許付正法である、故に來往從來此中に在り、往くも還るも寢るも起るも生死も苦樂も皆此の無生法中に在ての活潑自在でなければならぬ。斯くありてこそ始て以て此因縁に參ずるの分ありと謂ふべきである。

### 第十二章

第十二祖馬鳴尊者。問夜奢尊者曰。我欲識佛。何者即是。尊者曰。汝欲識

佛。不識者是。師曰。佛既不識。焉知是乎。尊者曰。既不識佛。焉知不是。

師曰。此是鋸義。尊者曰。彼是木義。復問鋸義者何。師曰。與師平出。又問木義者

何。尊者曰。汝被我解。師豁然省悟。

右本章の本則、此れ亦大意を略説して置く方が便利であらう、第十二祖の馬鳴尊者が第十一祖の富那夜奢尊者に向つて我は佛を識らんと欲す、知らず何者が是れ佛でありますかと問ふた。夜奢答へて汝は佛を識らんと欲するか、其の佛を識らずといふ者即ち是れ佛であると言はれる、馬鳴は更に佛を既に識らぬほどの者が焉くんぞ自ら是れが佛であることが出来ませうや。夜奢尊者曰く汝は既に佛を識らぬのであるに其れが焉くんぞ是れ佛でないといふことが知れやうぞ。馬鳴曰く其れでは是れ鋸の義で俗に謂ふ鸚鵡返しと言葉咎めといふやうなことになるます。尊者曰くいや鋸の義ではない彼



は是れ其の鋸で切られる木の義である然かし汝が鋸の義といふは一體何の意であるぞ、馬鳴曰く鋸の義といふは師と平出す、師と私と頭を並べ脚を揃へて、賣り言葉に買ひ言葉といふやうなわけであり、然るに師は之を木の義と言はれるは何の意でありますかと反問した。夜奢尊者これに答へて汝は我に解せらる、其れ見よ果して切り放されてしまふたであらうかと言はれるのを聞いて、馬鳴は豁然として省悟せられたといふのである、然し以上は單に字面の上から見た解釋である。太祖の御親訓に依れば更に甚深の意義あることが翫味せられる、馬鳴が鋸の義といひしは兩人同得見の意である、識る者識らざる者總に是れ佛、能所賓主一として佛ならざるは無い、彼も亦佛、我も亦佛、草木國土も悉皆成佛であることを馬鳴は見得した。尊者は猶ほ是を肯がはず、彼は木の義なりと仰せられた、即ち木を挽き割る鋸には非ずして鋸に挽き割られた木に問て參得せよ、只箇の木頭何の心行がある、佛とも知らず凡夫とも知らず況や迷悟得失の分別あらんや、身心脱落の正當時師資の相混じ生佛の法融ず斯くなければ密傳密付は現成せぬ。故に馬鳴は、鋸の義を釋して師と平出すといふた。乃ち師資共に同一佛性、同道唱利であると見破し去りしも、尊者は更に一段の高處より木の義を解して、汝我に解せられ汝は既に我れに挽き割られて、最早汝の面目は無い、唯だ是れ一柱の木頭のみと言はれた、趙州の庭前栢樹子、洞山の麻三斤と同工異曲である。

師は波羅奈國の人なり。亦た功勝と名く。有作無作諸の功德を以て最も殊勝と爲すが故に名く。即ち夜奢尊者の處に參じて、最初に問て曰く、我佛を識らんと欲す。何者か即ち是なる。尊者曰く汝佛を識らんと欲す、識らざる者はなりと。實に參學の最初必ず尋ぬべきは是れ佛なり。三世の諸佛數代の祖師盡く是れ學佛の漢といふ。若し佛を學せざれば悉く是れ外道と名く。故に音聲を以て求むべきに非ず、色相を以て求め識るべきに非ず。故に三十二相八十種好を以て佛とするに足らず。因て我佛を識らんと欲す。何者か即ち是なると問ひ來る。

第十二祖馬鳴尊者は梵名を阿那菩提と曰ふ、中天竺波羅奈國（西域記には婆羅痾斯とある）の人なり、亦功勝と名く、有作無作諸の功德を以て最も殊勝と爲すが故に名く、有作といふは凡夫の心を以て功果を求むるの作業を謂ひ、無作といふは聖者の心で功果を求めず、任運自然に慈悲智慧の顯はれる作業を謂ふのである、設ひ有作有爲の業と雖も之を作すは皆功德廣大なるは論なし、但之を無作無爲の



作業に比ぶれば其程度に於て徑庭の差があるのである。馬鳴は世間出世間の功德を修するに於て群を抜くの道力あるを以て功勝と稱したのである。佛祖統記等に依ると馬鳴は有名なる議論家で常に刀を杖頭に掛け之に銘して曰く、天下の智者能く我れに勝れる者あらば首を截て以て謝せんと。諸國の人敢て抗する者なし。時に夜奢尊者閑林の中に坐す、馬鳴は大慢昂高實に我ありと計す、尊者の無我無人と説くを聞き往て之に謂て曰く、一切世間の言論我れ能く破壊す此言若し虚ならば首を斬て以て謝せんと。尊者曰く、佛法の非凡そ二諦あり若し世諦に就かば假りに名けて我と爲す第一義諦は皆な悉く空寂、是の如く推求せば我何ぞ得べけんや、馬鳴義勝たざるを知り便ち首を斬らんとす。尊者曰く我が法仁慈汝が首を斬らず、如來既に記莚す汝當に出家すべし、といふて出家せしめられたとある。馬鳴は即ち夜奢尊者の處に參じて最初に問て曰く我佛を識らんと欲す、何者か即ち是なる、尊者曰く汝佛を識らんと欲す、識らざる者は是なりと、實に誰にもせよ參學の最初必ず尋ねべきは是れ佛なり、何故にかといふに三世の諸佛も數代の祖師も盡く是れ學佛の漢といふのである。若し佛を學せざれば其れは悉く是れ外道と名くべきものである。然るに其佛といふは如何なるものかといふに、色相すなはち姿や形を以て求むべきものではない、乃ち其姿や形は設ひ三十二相や八十種好を具足して居ても、其様な相好などは轉輪聖王にも具足して居るといふことで、佛に限つたことではない。故に三十二相

八十種好を以て佛とするに足らず、三十二相八十種好のことは煩はしいに依て今は略して置く、委しく知りたいたものは「三藏法數」などを披いて見るが宜しい。因て今馬鳴は我れ佛を識らんと欲す何者か即ち是なると問ひ來る、眼に見るところの相好以外に於て佛の眞法身を識り得たいと願ふのである。

即ち示て曰く、汝佛を識らんと欲す。識らざる者は是なりと。謂ゆる識らざる者といふは正に是れ馬鳴尊者なり。豈他ならんや。未だ識らざる時も識れる時も、別の保任なし他の様子なし。故に昔より今に及で只是の如し。有時は三十二相を帶し、八十種好を具し、三頭八臂を帶し。五衰八苦に沈み、有時は被毛戴角し、有時は鐵擔枷鎖す。常に三界中に居して自己の行履を保任し、自心の中に頭出頭没して、異面を帶し來る。

第十一祖夜奢尊者は馬鳴の佛を問ふに對して即ち示て曰く汝佛を識らんと欲す、其の識らざる者即是なりと、謂ゆる識らざる者といふは正に是れ此問を發したる馬鳴尊者なり、豈他ならんや、之を二千年前の馬鳴尊者にのみ專有せしむべきではない、人々各自に我れ何人ぞと反省せねばならぬ。昔し



僧あり古徳に問ふ如何なるか是れ佛、古徳曰く汝は是れ何者ぞと、今の因縁も殆ど之に類す、さて其の佛の眞法身は未だ識らざる時も又之を識れる後も、別の保任なく他の様子なし別に不可思議なる保護法や傳授の術があるのでは無い。譬へば火は之を火と知る人も焼けば之を火と知らざる人も焼く、知ると知らざるに於て火に増減なく焼くに勝劣はない。故に昔より今に及で只是の如し、そもそも此の佛の體たらく有時は三十二相を帶し八十種好を具し、百福莊嚴の姿に顯はれ來ることもあれば、又三頭八臂を帶して天龍八部の如き形に顯はれる時もあり。又或ひは五衰の苦みを免かれぬ天上界の身となることもあれば八苦に沈む人間の姿のこともある。天上界の五衰といふは頭上花萎、腋下汗出、衣裳垢染、身體臭穢、不樂本座の苦みである。八苦は謂ゆる生老病死の四苦に求不得苦、愛別離苦、怨憎會苦。五蘊盛苦の四を加へたのである。又有時は被毛戴角の姿で牛や馬の如き畜生界の身を現ずることもあれば、有時は鐵擔枷鎖で鐵柱を擔ひ鐵の頸枷をはめられ鎖もて手足を縛ばらる、様な地獄の苦惱に沈むこともある。是の如くに姿や形は千變萬化しても、佛の眞法身は常に三界中に居して自己の行履を保任し自心の中に頭出頭没して異面を帶し來る。譬へば彼の水が凝ては堅氷となり解けては熱湯ともなり、或は清冽又は汚濁とその姿は千變萬化しても其の物を濕ほすの本性を保任して、毫も之を失ふことなく、隨處隨時に或は沈滞し或は流注するやうなものである。

故に生じ來るも是れ何者なりと知らず。死し去るも是れ何者なりと知らず。形を着けんとすれども是れ造作すべき法に非ず。名を安せんとすれども亦是れ建立すべきことに非ず。故に劫より劫に至るまで曾て知る所なく、我に從ひ我に伴ふとも都て辨ずることなし。

此の如く千變萬化頭出頭没するのであるから、生じ來るも是れ何者なりと知らず、死し去るも是れ何者なりと知らず、形を着けて何とか形容して見やうと思ふても是れ造作すべき法でないに依て何とも形容の道もない、又何とか名を安じて稱號を附けやうと思ふても亦是れ建立すべきことに非ざれば何とも名相の立てやうもない。或ひは強て形容して常住不變であるとか莊嚴微妙であるとか云ふても到底其萬が一を彷彿することも出來ず、又強て名けて法性とか法身とか眞如とか妙心とか云ふても結局其の邊際にも及ぶことが出來ぬ。故に劫より劫に至るまで謂ゆる無始劫このかた未來永劫、曾て知る所なく、死でも生れても常に我に從ひ我に伴つて居るけれども、都て辨ずることの出來ないのが即ち此の佛の眞法身である。故に識らざる者が即ち是れであるとも云ふのである。



適來の因縁を聽て多く解して曰く、如何にも知ることあるは即是れ佛に違は  
 ん。知ることなく分つことなからん。正に是れ佛なるべしと云ふ。今の不識  
 恁麼に會せば、何ぞ煩はしく夜奢尊者恁麼に示さん。冥より冥に入るに只是  
 の如く、都て恁麼ならざる故に、直に示して曰く識らざる者は是なりと。馬鳴  
 尚ほ明らめず。只是れ從來の識らずといふを以て、今の示す所を解す。故に  
 佛既に識らずんば焉ぞ是なることを識らんや。尊者重て示して曰く、既に佛  
 を識らず、焉ぞ是れ佛ならざることを識らんと。其外に求むべきに非ず、不  
 識者即是れ佛なり。豈不是と云ふべけんや。師云く此は是れ鋸の義なり。尊  
 者曰く彼は是れ木の義なり。夜奢復問ふ鋸の義とは何ぞや。師曰く師と平出  
 す。馬鳴又問ふ木の義とは何ぞや。尊者曰く汝我に解せらる。師豁然として  
 省悟す。

此の一節は世の邪解を排す。此の第十一祖と第十二祖の問答即ち適來の因縁を聽て、世人は多く解し

て曰く如何にも知ることの出来るやうなものでは即是れ佛に違はん、本統の佛といふものは到底知る  
 ことなく分つことなく何とも形容も出来ず名稱も附けられないのが正に是れ佛なるべしと云ふ、輒も  
 すれば此のやうに語路に着きまよふて、自分の思慮分別に任せたるのが凡夫の常情である。若し今  
 の不識すなはち識らざる者といふ語を恁麼に其やうな會しかたをして濟むべきであるならば、何ぞ煩  
 はしく夜奢尊者恁麼に示さんや、然るに世人や、もすれば冥より冥に入るに只是の如く、凡夫の迷情か  
 ら凡夫の迷情に惑ひさまよふ。皆是の如き凡夫の情量妄想に任せるからのことである。都て恁麼な  
 らざる故に決して其やうなものではないに依て、今第十一祖は直に示して曰く識らざる者は是也と、若し  
 是れ已に凡情を解脱した人であつたならば、其言下に脱然たるべきであるけれども、是の時には馬  
 鳴尙未だ明らめず、只是れ從來世間尋常の識らずといふ意を以て今の示す所を解した。故に佛既に識  
 らずんば焉ぞ是れ佛なることを知らんやなど、抗辯せられた。そこで夜奢尊者重て示して曰く汝は既に  
 佛を識らずと云ふではないか。既に佛を識らぬものが如何にして是れ佛ならざることを知らんと是れ  
 が佛であるやら無いやら、元來佛を識らぬといふ者にどうして其れが分るぞ。佛の眞法身は決して  
 其外即ち自己の外に求むべきに非ず、其の佛を識らずといふ者を返照して看よそれが直に即是れ佛で  
 ある豈不是即ち佛ならずと云ふべけんやと重ねて示された。然るに馬鳴は尙ほ未だ向上宗乘の



事に徹せず此れは是れ鋸の義なりと云ふ、識らざる者其れが佛であると云へば、識らぬ者が何で佛と云はれるかと云ふ。其れでは謂ゆる鸚鵡返しと言葉答めに過ぎぬ。鋸を以て木を挽き切るに手前から向ふへ推せば更に向ふから手前へ引く、同じことを逆にくりかへすまでのことであると云ふ。そこで夜奢尊者はいや鋸の義ではない木の義であるぞと云はれ、且つ一鉢に汝が鋸の義といふは何ぞや、どういふ意味かと問ひ返された。馬鳴之に答へて師と平出といふ、平出といふは頭を並べ肩を揃へて居ることである。馬鳴は更に木の義と云はれるのは何の意味でありますかと問ひ返した、其時に夜奢尊者は其の間に對しては答へられず只汝は我に解せらる、其方は到頭吾に腹の底まで見ぬかれてしまふたでは無いか。斯う言はれた其一言の下に、馬鳴は年來胸中に鬱結して居た都ての疑團が一時にがらりと瓦解して、豁然として省悟すとのある、是に於て馬鳴尊者は始めて第十一祖の衣鉢を承けて第十二祖となるの資格が完全したのである。以上は普通文字上の解釋であるが、馬鳴といひ尊者といひ共に是れ卓越の大智者である、豈に向上一段の見知なからんや。故に太祖は更に正法眼を以て兩祖の肺腑を見破して次の御提唱に及ばれた。

實に汝も是の如く我も是の如し。八字に打開し兩手に分付す。汝も我も一點

を受けず。吾も汝も少分を假らず。之に依て平出せること恰かも鋸の如し。故に謂ふ鋸の義と。尊者曰く彼は是れ木の義と。所以者何となれば黒漫々として總て知る所なし。更に一點をも着けず。一知をも假らず。恰も木頭の如く又露柱の如し。無心にして恁麼なり。終に辨別する處なし。恁麼に會する故に道ふ彼は是れ木の義と。

元來此の佛の眞法身といふものは實に汝も是の如く我も是の如し、互ひに胸襟を開いて其間に毫末も礙ゆるもの、無いさまは、門扉を八字に打開するが如く、兩手を放ちて物を分付するが如く、汝も我も一點を受けず、吾も汝も少分を假らず、元來人々に是足し箇々に圓成して居るものであるから、謂ゆる平出せること恰かも鋸の如しである故に謂ふ鋸の義と、此の如く會し來れば此の鋸の義といへること、實に甚深微妙の眞意義を有することである。さて又夜奢尊者の彼は是れ木の義と言はれた其所以何者となれば佛の眞法身は黒漫々として總て知る處なし、黒漫々とは謂ゆる正位空中無物といふ姿で、未だ萬象の形を顯はさざる眞空平等一相無相のところ、何と形容すべきもなければ何と名稱すべきもないのであるから、更に一點をも着けず一知をも假らず、恰かも木頭の如く露柱の如し、要するところ



ろ無心にして恁麼なり、終に辨別する處なし、恁麼に會する故に彼は木の義といふたのである。

然れども恁麼の所解、餘習尙ほ残て師の義を知らず。此に尊者慈悲落草の故に復問ふ鋸の義とは何ぞや。師曰く師と平出すと。此に至りて重ねて自ら道取して、又問ふ木の義とは何ぞや。夜奢復た手を授て分付して曰く汝我に解せらると。爰に師資の道通じ古今の情破れて、夢中に路をなし來り、空裏を運歩してもてゆく。故に曰く汝我に解せらると。此に至て無心凝結速かに解け、明白の窠窟脱け來て豁然と開悟し、遂に第十二祖に列す。

實際かやうなわけであるけれども、時に馬鳴は餘習尙ほ残て師の義を知らず、夜奢尊者の示さるゝ所の眞意義を徹底して知ることが出来ない様子であるに依て、此に夜奢尊者慈悲落草の故に復問ふ、鋸の義とは何ぞやと、馬鳴之に答へて師と平出すと此に至りて重ねて自ら道取して、更に又問ふ木の義とは何ぞやと是に於て夜奢尊者は更に復た手を授て分付して曰く汝我に解せらると、是の時始て師資の道通じ古今の情破れて、夢中に路をなし來るが如く、空裏を運歩してもてゆくが如く始めて自在無礙の境界に到り得られたのである。故に曰く汝我に解せらると、さて此に到ては謂ゆる百尺竿頭さらには一步を進め、一旦無心無相の境に徹底し洞然明白の處に到達したるものが、更に其の無心の凝結速かに解け明白の窠窟脱け來て豁然として開悟し遂に第十二祖に列することを得られた、明白とは悟入の境致である。馬鳴の開悟は迷悟を超越したる妙悟である。實に此の一旦到達したる無心明白の境を通じて、更に隨處に主となることを得るに到るの一段、修行事の最も肝要とするところ、古人も已に無心猶隔一重關といへり此關を透得せされば、未だ以て祖位に列することが出来ぬのである。

尊者衆に謂て曰く。此大士は昔し毘舍離國王たり。其國に人類の人あり。馬の如く裸露なり。王、神力を運び身を分て蠶と爲る。彼れ乃ち衣を得たり。彼王後に中印度に生る、馬人感戀して悲鳴す。因て馬鳴と號す。如來記して云く我滅度の後六百年當に賢者馬鳴と云ふ者あり。波羅奈國に於て異道を推伏して廣く人天を度し、度人無量、吾に繼て化を傳へんと。今正く是れ時なりと云て、夜奢即ち如來の正法眼藏を付屬す。



さて又富那夜奢尊者は座下の大衆に向つて馬鳴大士の馬鳴と名けられたる因縁を示された。曰く此大士は昔し毘舍離國王たり、毘舍離といふは彼の維摩居士などの郷里であるといふことである。過去の世の事であるが、其國に人類の一種があつて馬の如く裸露のまゝで衣服を着ることを知らぬ。國王これを恐れみて神力を運び身を分て鬘と爲り絲を造りて、彼の馬の如き人種に衣服を着せることになつた。其の王が後に中印度の波羅奈國に生れたのであるが、彼の馬の如くであつた人種が之を感戀して悲鳴した、因て其人を馬鳴と號すといふのである。然るに此の馬鳴菩薩の事に就ては昔から色々の異説があつて、十二馬鳴と云ひ、同人の異名であるとも云へは別々の人であるとも云ふ。今夜奢尊者の説かれたのが其中の正しく第十二祖となられた馬鳴の因縁であるといふべきである。さて又釋迦如來かつて記して云く、記すといふは當今の人の豫言といふも同じことで委しく云へば記荊ともいふのである。其の如來の記に吾滅度の後六百年當に賢者馬鳴と云ふ者あり波羅奈國に於て佛法以外の異道の徒を摧伏して廣く人天を度し其の度人無量にして吾に繼て化を傳へんと豫言せられてある。今正に是れ如來滅後六百年に當り其の記荊に應ずるの時なりと云て、夜奢即ち如來の正法眼藏を付屬せられたといふのである。

此一段始終の處、猥りに不識不受の處として、處々不識なる所とすること勿れ。即ち不識なりとも未胞胎の處にして子細に見得し、子細に思量して、佛面祖面を模索すれども得ず。人面鬼畜を求覓すれども得ず。是れ不變なるにも非ず。是れ動着するにも非ず。會て空なるにも非ず。内外の論なく正偏の隔てなし。正に是れ自己本來の面目なることを覺知して、設ひ凡聖含靈と顯はれ來り、依正二報と分れ來れども、全く此中に去來し、此中に起滅す、恰かも海水の波を起すが如く、起り起れども會て一水も増さず。又波の滅するが如し。滅じ滅すれども一滴も失はず。

さて又我が太祖は更に我等兒孫に示さるゝ、此一段始終の處即ち第十一祖と第十二祖との機縁を見て、猥りに不識不受の處とし、其不識の當處が是の如くであるとか不受の間に正法付屬があるとかいふやうなことを摸索して、我等も亦た處々不識なる所すなはち其の當處であるなどと妄想計度しては成らぬぞと誡められた。設ひ即ち隨處其儘に不識なりとも、汝等が此世に生れ出でざる未胞胎の處にして



子細に其の不識の體を見得し子細に工夫思量して見るが好い。胞ははら未胞胎は未だ母胎に宿らざる前といふことで已に生れ出でた後の眼見耳聞に着き廻る思量見得では何の詮もないぞ。乃ち父母未生以前に向て佛面祖面を摸索して佛を識らんと欲す何者か即ち是なると功夫して見よ、果して佛面祖面を見る事が出来るや否や、決して出来まい。又人面鬼畜は如何なる者ぞと求覓すれども得ず此れが果して人面鬼畜であるといふものを捉へ得ることは出来ぬ、畢竟不可得であらう。一體此物は不變なるにも非ず是れ動着するにも非ず、曾て空なるにも非ず又有なるにも非ず、内外の論なく正偏の隔てなし、正といふは萬物の形未だ顯はれざる一相平等の姿、偏といふは萬物の因縁果報分明歴然たる状態、委しくは洞山大師の五位に參じて見るが好い。佛の眞法身は絶對圓融である。既に是れ絶對なるが故に不變と變易、眞空と妙有、内外と正偏、此等相對の法を以て擬量することは出来ぬ、是の如く一切の形容を絶し都べての説明を離れたるもの其れが正に是れ自己本來の面目なることを覺知すべきである。偕此の自己本來の面目が設ひ凡聖含靈と顯はれ來り、佛菩薩となつて尊ばれたり餓鬼畜生となつて賤まれたり、種々なる依正二報と分れ來れども全く此中に去來し此中に起滅するのみの事である。依正二報といふ中に正報といふは一切の人間畜生等の身に生れ出たる果報のこと、依報といふは其正報たる人間畜生等の身が、依憑して生息するところの國土を始め衣食の資料等に到るまで皆其分限に

定まりあるのが依報である。是の如く種々さま／＼に隱顯出沒出入昇沈するからといふても、譬へば恰かも海水の波起をすが如く、起り起れども曾て一水も増さず、又波の滅するが如し、滅し滅すれども一滴も失はず、海水は常住不變にして毫も變動はない、其變動なき其まゝに波瀾起滅少しも停まる時はない。變動其儘に不變にして不變其まゝの變動、遂に言語道斷心行處滅なる所以である。

曾て人間天上の中に暫く諸佛と呼ばれ來り、鬼畜と呼ばれ來る。恰かも一面上に假りに衆面を現するが如し。是れ佛面とせんも不是、鬼面とせんも不是、然も建化門頭の事、敲唱し來り、正に如幻三昧を修習し、夢中の佛事を作し來る。之れに依て西天の化道幻術今に不斷。三國流轉して轉凡入聖し來るなり。能く恁麼に轉變修習して方に自己の罪過をも疎くせず。自己の生死にも惑はされず。是れ眞箇本色の衲僧なるべし。

曾て人間天上の中に暫く諸佛と呼ばれ來りて禮拜せられ、又は鬼畜と呼ばれ來りて輕賤せらるゝとも、恰かも一面の鏡上に假りに衆多の面像を現するが如し、然るに若し其影像に執着して是れ佛面とせん



も不是なり、鬼面とせんも不是なり、然も奪ふて言へば斯うであるが、又與へて言へば之を佛面といふも是なり、鬼面といふも是なり、畢竟建化門頭の事、敲唱し來れば一切諸の事皆手に任せ拈じ來りて不是あることなしである。建化といふは教化の方便を建立するといふこと、敲唱といふは、弟子が問ふて敲けば師匠が唱へて之を教へるといふこと、是の如き方法手段の間に於て正に如幻三昧を修習し夢中の佛事を作し來る、幻といひ夢といふ皆其實なきを且らく假りに有るが如くするをいふ。今此の三昧といひ佛事といふも、元來本然自性の佛身たる吾人が三昧を修習し佛事を作して而して後に始めて佛と成るのではない。けれども今は且らく一時の方便として修習するのであるから如幻三昧である、夢中の佛事である。之に依て西天の化道法であつた幻術の如き方便が、今は姿が變つて古則を拈提するとか公案に就て功夫するとか、支那から日本へ三國流轉して轉凡入聖の方便となつてきて居る。故に當今も亦能く恁麼に修習轉變して、方に自己の身心に過去生々の間に累積し來れる罪過も業報も其れを敢て疎くせず、謂ゆる煩惱を除かず生死をも厭はず、さればとて自己の生死にも惑はされず、菩提涅槃をも慕過して自適悠悠たるに至らば、始て以て眞箇本色の衲僧と謂ふべきである。

今日適來の因縁を擧揚するに、例に依て卑語あり、聞かんと要すや。

野村紅不桃華識

更教靈雲到不疑

野村の紅は桃華の識るにあらず、更に靈雲をして不疑に到らしむ、年々歳々春季になれば到る處の野も山も村も里も百花爛漫として、天地みな紅なるの觀がある、何れの花も美しくしからぬは無いけれども、桃李の春色などと云ふて桃の花を第一とする。然るに其の百花の物代たる桃の花は紅色であるや、黄色であるやら、桃花自身には少しも御存知がない、自身には紅とも紫とも識らぬ其儘に満目の山も野も村も里も皆紅に満たされて居る、唯之を見る眼のある人は之を一見して忽ち大悟徹底せるに到るもある。乃ち昔し福州の靈雲志勤禪師は三十餘年の長い間、一大事因縁のために専心修行せられた結果、或時たま〜桃華の爛漫として咲き亂れたるを一見した機會に、豁然として大悟徹底の境に入り、偈を作つて瀉山禪師に呈せられた。其偈は、三十年來尋劍客、幾回葉變又抽技、自從一見二桃華、後、直至如今更不疑といふのである、瀉山が之を見て縁より入る者は永く退出せず汝護持せよと言ふて證明せられたといふことである。今唯此の七言二句適來縷々提唱せられたる本則の因縁を誠に能く頌じ得て餘蘊なしと謂ふべきである。



### 第十三章

第十三祖迦毘摩羅尊者。因馬鳴尊者。說佛性海。曰。山河大地皆依建立。三  
六通。由茲發現。師聞信悟。

右本章の本則、第十二祖馬鳴尊者が佛性海の道理を説かれて、山河大地も皆此の佛性に依て建立され、三明も六通も悉く茲に由て發現するのであると言はれるのを、第十三祖が聞て信悟せられたといふのであるが、此れに何かなる宗乘向上の事があるかは、次下の太祖の御提唱に參じて見るが好い。

師は華氏國の人なり。初め外道たりしとき、徒三千あり。諸の異論に通ぜり。馬鳴尊者、華氏國に於て妙法輪を轉ず。忽ち獨りの老人あり座の前にして地に仆る。尊者衆に謂て曰く此れ庸流に非ず。當に異相あるべしと、言ひ訖て則ち見へず。又俄に地より一りの金色の人を涌出す。復化して女子と爲る。

右手に尊者を指して偈を説て曰く、稽首長老尊。當受如來記。今於此地上。宣通第一義。と偈を説き訖て見へず。尊者曰く將に魔ありて來り我と力を校へんとす。暫くありて風雨暴かに至り天地晦冥す。尊者曰く魔の來る證なり。吾當に之を除くべしと。即ち空中を指すに一つの大きな金龍を現じて威神を奮發し山嶽を震動す。尊者座に嚴然たり。魔事隨て滅す。

第十三祖迦毘摩羅尊者は中印度華氏國の人である、最初外道の婆羅門であつたところに徒弟が三千人もあつて、諸の異論いはゆる九十餘種の外道の學術宗教に廣く通達して居られた。或時第十二祖馬鳴尊者が華氏國に於て妙法輪を轉じ盛んに化導せられた時に、忽ち獨りの老人が尊者の說法して居られる講座の前へ來て突然にその地上に仆れてしまふた。其時馬鳴は座下の大衆に向つて此は凡庸の流類ではない、何か必ず異つた相狀があるであらう、と言ひをけるころには早や其老人は消えて見えなくなつてしまふた。然るに今度は又俄に地より一りの金色の人が涌き出した、と見るうちに其人が復た化して女子と爲り右の手に馬鳴尊者を指して偈を説て曰く、稽首長老尊、當に如來の記を受くべし、今此の地上に於て、第一義を宣通したまへ、稽首とは稽は至ると註す、首は頭なり、頭地に至る



は敬禮の極である、今我れ此長老尊を禮し奉る、當に如來の記を受けて出世せらるべし。乃ち今此地上に於て佛祖正傳せる第一義の妙法を宣傳弘通し玉へ、と偈を説き説るかと思ふうちに亦た形を隠して見えなくなつた。そこで馬鳴尊者が仰せられたには、將に魔あり來て吾と力を校べんとするのであらう、といふうちに暫くすると風雨暴かに至り天地晦冥となつてきた。尊者曰く此れが魔が來る證據である、吾將に之を除くべしと、即ち空中を指して大衆に注意せらるゝうちに、果して一つの大きな金龍を現して威神力を奮發し山嶽を震動せしめて尊者を脅かした。けれども尊者は講座の上に嚴然として坐定して居られたのみであつたが、遂に其魔事は自然に滅してしまふた、乃ち如何なる外道の魔術も決して正法の定力に勝つことは出來ぬものである。

七日を経て一つの小蠱あり大さ蠅の若し。形を座下に潜む。尊者手を以て之を取て衆に示して曰く、斯れ乃ち魔の變ずる所なり。吾法を盜聽するのみ。乃ち之を放て去らしむるに、魔動すること能はず。尊者之に告て曰く汝但三寶に歸依せば、即ち神通を得ん。魔迷に本形に復して禮を作して懺悔す。尊者

者問て曰く。汝を誰とか名るや。眷屬多少ぞ。答て曰く我を迦毘摩羅と名く三千の眷屬あり。汝神力を盡して變化せんこと若何。曰く我巨海を化すること極て小事と爲す。尊者曰く汝性海を化し得んや否や。曰く何をか性海と謂ふ。我未だ嘗て知らず。尊者即ち爲に性海を説て曰く。山河大地皆依て建立す。三明六通茲に由て發現す。師聞て信悟す。

其後七日を経て一ツの小蠱の大きき蠅のごときものが形を馬鳴尊者の座下に潜めて居た、蠅といふ蟲は蚊の睫毛に集つて棲宿往來して居るに蚊が其れを知らずに居るといふほどの細かい蟲であるとも云ふ、然るに今は尊者が手を以て之を取て衆に示されたところから、其れほどに細かいものと思はれない、とにかく尊者が之を大衆に示されて、此れが先日老人になつたり女子になつたり風雷を起したりした外道が魔術を以て形を變じたのである。かやうな姿をして我が座下に潜み隠れて我が正法を盗で聽かうとするのであると言ひつゝ、乃ち其蟲を放ち去らしめられたけれども、其蟲は少しも動くことが出來ない。そこで馬鳴尊者は之に告て曰く汝但三寶に歸依せば即ち神通を得んと、此魔は元來神通を以て斯やうな蟲にもなつたのであるけれども、佛弟子の正しき神通には到底敵對することが



出來ぬ。魔遂に本形に復して禮を作して懺悔しひたすらに慙れみを請ふた、乃ち尊者之に問て曰く汝を誰とか名るや、又眷屬は多少ぞ、魔答て曰く我を迦毘摩羅と名け、三千の眷屬ありと、尊者更に問ふ汝神力を盡して變化せんこと若何、どれほどの通力があるぞ、曰く巨海を化すること極て小事と爲す、如何なる野でも山でも直に渺茫たる大海にして見せることなどは何でも御座らぬといふ。そこで馬鳴尊者の問が肝要である、汝は巨海を化すること容易であるといふが、然らば性海を化し得んや否や、佛性法性の大海を化し得るかとの問ひである此には迦毘摩羅一言の答も出來ぬ。但し正直に何をか性海と謂ふ我未だ嘗て性海といふものを知らずと白状した。其時に馬鳴尊者が即ち爲めに性海を説て山河大地皆依て建立す、三明六通茲に由て發現すと即す本章の本則に及ばれた。迦毘摩羅は已に廻心懺悔して正直なる心になつて居たのであるから、此の一言下に聞て信悟すと信解悟入の妙境に達することが出來たのである。三明といふは宿住明と生死明と漏盡明との三つ、之を六通の方では宿住通、天眼通、漏盡通といふ、更に天耳通と他心通と神境通との三つを加ふれば六通となる、此中に於て今外道の魔術などに應用されるのは多くは神境通の一つである。然るに設ひ其他の天眼天耳他心宿住などの通力があつたとしても、佛法の尤も肝要とする所の漏盡通が缺けて居ては謂ゆる性海の道理などが分るものではない、漏盡とは一切の煩惱妄想の種因を悉く断除し盡したのである。此の如き精

神上の最も大切なことも全たく性海の上の一波瀾に過ぎぬ、況んや山河大地草木禽獸等の都へての物質みな悉く性海の頭出頭没である。

老人仆地より蟪蛄蟲と作るに到るまで、神力を現すること實に無數なり。謂ゆる巨海を化すること極て小事と爲すと。夫れ海を變じて山と作し、山を化して海と作し、神力を現すること極まりなしと雖も性海は未だ名をだにも知らず。何に況や化することあらんや。然も山河大地何物の變と覺すること無きに、馬鳴即ち説く是れ性海の變なりと。然のみならず三明六通これより變ず。

以下まさしく太祖の御提唱である、最初一老人が第十二祖の講座の前に來り地に仆れたといふ所から、遂に蟪蛄蟲と作るに到るまで、外道時代の迦毘摩羅が種々なる神通力を現すること實に無數なり、謂ゆる巨海を化すること極て小事と爲すといふほどの通力を得て居る迦毘摩羅であるから、海を變じて山と作し山を化して海と作し神力を現すること極りなしと雖も、性海といふことに至りては未だ名を



だにも知らずといふのである、何に況や其性海を化することあらんや、實に愍然なる次第のものである。然かし此れは迦毘摩羅に限つたことではない、山河大地等の宇宙萬物あらゆる一切諸法は何物の變ずるところであるかといふことを眞實に覺知するものなきは世間の常態である。然るに今馬鳴尊者は山河大地ことごとく是れ性海の變じたものであると説かるゝのみならず、三明六通も性海より變じたものであると言はれたのである。

謂ゆる三昧は首楞嚴等の無量三昧天眼天耳六通是れ始めも際なく終りも際なく、前三々後三々即ち是れなり正に是れ山河大地を建立するとき、三昧地水火風と化し。山河艸木とも化す。謂ゆる皮肉骨髓とも變じ、五體身分とも化し來る。未だ一事一法として分外より來るに非ず。故に十二時中虚く捨る底の功夫なく、無量の生死徒らに現はるゝ底の相貌なし。故に眼に見ることとも窮りなく、耳に聞くことも窮りなし。恁麼の見聞恐らくは佛智も測るべきこととあらじ。豈に是れ性海の化作ならざらんや。

謂ゆる三昧は首楞嚴等の無量三昧天眼天耳六通とある、此の三昧といふことは前にあつたが漢譯すれば正定といふ一切の煩惱を解脱して一心萬境と冥合した姿である。即ち性海の妙徳を自己に獲得したのが三昧である、此の三昧に種々の名義もあるが、中に就て首楞嚴といふは此れも梵語で漢譯すれば健相といふ、健固不動にして一切の魔障も之を侵すことを得ず、一切事畢竟して堅固といふ意味であるといふ。此の如く一心決定したのが即ち首楞嚴三昧である、其他種々なる無量三昧、法華三昧もあれば念佛三昧もあり、別して我祖師門下の坐禪辨道は三昧中の王三昧とも稱するのである。乃ち天眼天耳等の六神通、皆是れ其始めもいつからといふ際限なく、又其終りもいつまでといふ邊際なく謂ゆる無始劫來未來永劫、其數も亦た限りなき前三々後三々即ち是れなり、前三々後三々といふは「拈評三百則」の中巻にも擧られてある。文殊と無着との問答に幾ばくといふ限りなきことを前三々後三々といふた文殊の語である。さて彼の山河大地の建立せらるゝ時には此三昧が地水火風の四大と化し山河草木とも化し來る、又謂ゆる吾等人類の皮肉骨髓といふも五體身分といふも皆此の三昧から化し來るのであつて、未だ一事一法として此三昧の分外より化し來るものとは無いのである。かやうなわけであるに依て十二時中寝るも起きるも皆虚しく捨る底の功夫なく、運作顛倒ことごとく此の三昧の變化ならざるはない。無量の生死無始劫來幾たびか生れたり死だりし來つたのも、決して徒らに現は



る、底の相貌なし、都て是れ佛性海中の一波一瀾である。されば日々夜々に眼に見ることも窮りなく花もあれば月もあり山色もあれば水光もある。又耳に聞くことも窮りなし、鐘鼓もあれば琴筑もあり鳥聲もあれば蟲語もある。眼見耳聞千差萬別であるけれども、恁麼の見聞恐らくは佛智も測るべきこととあらじ、豈に是れ性海の化作ならざらんや、乃ち我も知らず他も知らず識らず、性海の妙用千變萬化する様子、前章の野村の紅は桃華の識にあらずといへる祖語に參得すれば思ひ半ばに過るであらう。

故に法々塵々都て是れ涯畔なき法なり。全く是れ數量に墮せず。是れ即ち性海なり。故に是の如し。然も今身を見るは即ち是れ心を見るなり。心を知るは是れ身を證するなり。全く身心二つなし。性相何ぞ分たん。設ひ今異道の中に在て神變を現するも、又是れ分外に非されども、自ら知らず是れ性海なりといふことを。之に依て自をも疑惑し他をも疑ひ來る。然も其諸有を知らざれば總に未だ根本に達する者あらず。力を校ぶるに堪えず。故に魔力終に盡て神變し難し。遂に己を棄て他に歸し、争を止めて正を顯はす。

かやうなわけであるに依て、法々塵々世の中に有らゆる事物は都て是れ涯畔なき性海の波瀾であるから其事物も亦皆涯畔がない、全く是れ數量に墮せず多いの少ないのといふて數へ立らるべきものではない。一切其儘に是れ即ち性海であるが故に是の如しである、されば之を自分の身の上へ考へて見れば、身を見るは即ち是れ心を見るなり、心を知るは是れ身を證するなり、全く身心二つなし、性相何ぞ分たん、畢竟身といふも心といふも乃至自といふも他といふも花といふも月といふも、佛といふも衆生といふも皆悉く性海中の左支右支であるからである。故に迦毘摩羅の如き設ひ今異道の中に在て老人となりて地に仆れたり細蟲となりて座下に潜んだりするやうな神變を現するも又是れ分外に非ず、其儘に性海の妙用の顯はれ來つたに外ならぬのである。けれども迦毘摩羅は未だ自ら是れ性海なりといふことを知らず、之に依て自らも疑惑して自己の何物たるかを解せず、他をも疑ひ來て他の一切衆生果して是れ何物ぞとも會し得ぬのである。永平高祖が會て此法は人々分上ゆたかに具れりと雖も修せざるには顯はれず證せざるには得ることなしと示されてあるのは、實にこゝである。然も其諸有を知らざれば總に未だ根本に達する處あらず今迦毘摩羅の如き一分の神力を以て種々の變化を作す



ことは出来ても、諸有を知らず一切萬法の平等一相なることの信解せられぬうちは、未だ性海の根本に達する者でないから、其不完全なる力を以てしては、到底第十二祖と力を校ぶるに堪えず、魔力終に盡て神變し難きに至り、遂に己を棄て我慢幢を倒して、誠實に懺悔して他の第十二祖尊者の座下に歸依したてまつり、争を止めて虚氣平心に尊者のお説を聞取したに依て、忽ち信悟して正を顯はすに及ばれたのである。

然れば設ひ山河大地を會すとも徒らに聲色の中に繫縛すること勿れ。設ひ自己本性を明らむとも又覺知に住まること勿れ。又覺知も一兩の佛面祖面なり。謂ゆる牆壁瓦礫是なり。本性は見聞覺知に拘はらず。動靜に依らず。然れども性海を建立すれば必ず動靜去來遂に斷ることなし。皮肉骨髓時と共に顯はれ來る。若し根本を論ぜんが如きんば、見聞と顯はれ聲色と顯はるとも他の爲にすべきなし。然れば空を扣て響をなす。故に衆聲を現す。空を化して諸物を顯はす故に形貌區々なり。故に空は是れ形なしと思ふべからず。空は是

れ聲なしと思ふべからず。更に此處に到て子細に參到する時は是れ空とすべきに非ず。是れ有とすべきに非ず。故に隱顯の法とすべきに非ず。自他の法とすべきに非ず。何を呼で他とし何を喚で我とせん。恰も空裏に一物なきが如く、大海に諸水現するに似たり。古今會て變易せず。去來豈に別路あらんや。そうして見れば設ひ山河大地だけのことは會し得たりとするも、徒らに聲色の中に繫縛せられて眼に見るとか耳に聞くとかいふことにのみ支配されないうやにせんければならぬ。此の性海のこととは元來眼見耳聞の間に會することの出來るものではない。又設ひ自己本性を明らむとも、其の明らむといふことが覺知に住まること勿れ、元來此事は感覺知慮の間に會することの出來るものではない。斯う云へば又性海の妙用は見聞覺知を絶對に離れたものと思ふて、空見に落る者もあるかは知らぬが、覺知も亦一個兩個の佛面祖面である謂ゆる牆壁瓦礫是なりで、一切諸法一點も遺すところはない。但し本性は又見聞覺知に拘はらず動靜にも依らぬものであるけれども、然れども一たび性海を建立する時は、必ず動靜去來遂に斷ることなし、管に動靜去來のみならず起滅増減大小方圓種々様々なる諸法が絶えず皮肉骨髓と共に顯はれ來る、さればとて若し又更に其性海の根本を論ぜんが如きんば、設ひ見



聞と顯はれ聲色と顯はるとも、決して其れは他の爲にすべきにも非ず、亦自の爲にするのでもない、唯性海の自然本來なる活運動といふだけのことである。かやうなわけであるに依て今こゝで空を叩けば直に響をなす即ち種々様々なる聲が現はれる、又空を化して諸物を顯はす、空中に於ける種々なる變化に依て様々なる物が出来る。其形貌區々で一定の常相はない、因縁次第に種々様々なる果報が顯はれる。其うして見れば空は是れ形なしと思ふべからず空は是れ聲なしと思ふべからず、空なればこそ種々なる形を現じ、様々なる聲も起るのである。更に此處に到りて子細に參到する時、是れ空とすべきに非ず是れ有とすべきに非ず、已に空有を超絶して居るのであるから、一切諸法が如何やうに見えもし聞えもしたからとて、之を隱顯の法とすべきに非ず、自他の法とすべきに非ず、こゝに至りては何を呼でか他となし何を喚でか我とせん、かやうに詮じつめて見れば謂ゆる言語道斷心行處滅で何と言て見やうもないが、且らく譬喩を取て之を見れば其空たるや恰かも空裏に一物なきが如く其一物なき空中が直に諸物の起滅消息するところである。又其有たるや大海に諸水現するに似たり、百川の朝宗、清流も濁水も皆悉く流入するけれども、唯是れ無涯際的大海である、諸水を區別することの出来るものではない。已に是れ此の如くであるに依て古今曾て變易せず常住不變であるに依て、其間に一切諸法如何に往還去來すといふとも豈に別路あらんや謂ゆる一路涅槃門の出入に過ぎぬのである。

故に顯はるゝ時も一點をも添へず。隱るゝ時も一毫をも失はず。衆法を合成して此身となす。萬法を泯絶して更に一心と説く。故に道を明らめ心を證すること、都て分外に向て求覓すること勿れ。只自己本地の風光現成し來れば、他之を呼で人面鬼畜とす。雪峰曰く此事を會せんと要せば、我這裏一面の古鏡の如く相似たり。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す全く是れ如幻三昧、故に始めも窮りなく終りも窮りなし。故に山河大地を建立する時も皆な是に依り、三明六通を顯發する時も是に依る。是故に自心の外に大地寸土を見ること勿れ。性海の外に河水一滴も着ること勿れ。

元來同一性海の波瀾であるに依て、千差萬別の形に顯はるゝ時も一點をも添へ加ふるにも非ず、又其形が隱るゝ時も一毫をも失はず、彼の大海に波の立ち動く時も又波の靜かに收まれる時も海水には一滴も増減のないやうなものである。畢竟因縁相依り衆法を合成して且らく此身を生ず、又見るにつけ聞くにつけ諸法に心の散亂するを妄識と名け、又萬法を泯絶して精神の統一せられたるを更に一心



と説くのである、故に道を明らめ心を證するといふことも、性海の分外に向て求覓すること勿れ、只自己本地の風光現成し來りさへすれば、他の之を呼んで人面とし又は鬼畜とす、本より我の關せざるところである。昔は徳山の法嗣雪峰義存禪師が此事を會し謂ゆる自己本地風光の現成する様子を知らうと思ふならば、譬へばこゝに一面の古鏡があるやうなものである。此鏡の面へ胡人が來れば胡人の影が現じ、漢人が來れば漢人の影が現ず、乃至花が來れば花が現じ紅葉が來れば紅葉が現ず、全く是れ如幻三昧すなはち幻術を以て種々なる形を幻出するやうなものである。此の一面の古鏡は人々各自に皆悉く所有して居る。此の古鏡たる心の上に起滅する諸法は本より實體あることなくして且らく現する幻影であるにも拘はらず、其の一面の古鏡の體には始めも窮りなく終りも窮りなし、故に山河大地を建立し日月星辰艸木禽獸等を幻出する時も皆な是の性海に依り、發心修行の功に依て三明六通を顯發する時も是に由るのである。而して我が此の自己の心性が即ち性海であるに依て、自心の外に大地寸土をも見ること勿れ、又性海の外に河水一滴をも着ること勿れ、要する所は自己心性の外に天地の萬物もなければ、宇宙の諸法も皆唯自己心性の顯現であるといふことに結歸するのである。

今朝又此の因縁に依て卑語を著けんと欲す。開かんと要すや。

浩渺波濤縱滔天。清淨海水何曾變。

浩渺は水天遠大の貌、滔は大水の貌、浩渺と限りなき廣き大海に千波萬濤種々様々なる波瀾を起し、其の尤も巨浪怒濤ともいふべきものは、高大なる山の崩るゝが如く其勢ひの猛烈なる、縱ひ天にも滔るほどであつても、其の大海の水の本體は元來清淨にして一點の汚濁もなければ、一毫の動搖もない、其本性常寂にして何ぞ曾て變ぜん、少しも變遷するといふことはない、と性海の妙徳を頌せられ、吾等の心性と宇宙萬象との關係を示されたのである。謂ふに山河大地草木叢林刻々に靈動し時々變遷して曾て休すること無し、皆な是れ佛性の妙用である釋尊の出世、祖師の西來、何れか佛性の靈機に非ざる、吾人の擧手投足も亦是れ佛性海中の波瀾重疊である。然れども色即ち是れ空、生滅即ち是れ真如、性海湛然として變易なし、故に能く此事を徹證せば六根六塵も皆な六波羅蜜となり、三毒三業も總に三徳法身なることを知るべし。



### 第十四章

第十四祖龍樹尊者。因十三祖赴龍王請。受如意珠。師問曰此珠世中至寶也。是有相耶。無相耶。祖曰汝只知有相無相。不知此珠非有相非無相。又未知此珠非珠。師聞深悟。

右本章の本則、次下太祖の御提唱を待て、今は贅辨せん。

師は西天竺國の人なり。龍猛又は龍勝と名く。十三祖當時受度傳法して西印度に到る。彼に太子あり雲自在と名く。尊者の名を仰て宮中に請して供養す。尊者曰く如來に教あり、沙門は國王大臣權勢の家に親近することを得ざれと。太子曰く今我が國城の北に大山あり。山中に一つの石窟あり。師此に禪寂す。

へきや否や。尊者曰く諾。即ち彼の山に入て行くこと數里。一の大蟒に逢へり。尊者直に前みて顧みず、蟒來て遂に尊者の身を盤繞す。尊者因て與に三歸依を授く、蟒聽き訖て去る。尊者將に石窟に至らんとす、復一りの老人あり素服にして出でて合掌問訊す。尊者曰く汝何れの處にか止る。老人答て曰く我れ昔し嘗て比丘たりき、多く寂靜を樂て山林に隱居す。初學の比丘あり數々來て益を請ふ、而も我れ應答を煩はしとし瞋恨の想を起す。命終て墮して蟒身と爲り是の窟中に住して今已に千載なり。適々尊者に遇て戒法を聞くを獲たり。故に來て謝するのみ。

以下先づ第十三祖が西印度化導に依て第十四祖を接せられたる因縁を叙べられた。第十四祖は西天竺國の人である、梵名は那伽阿黎樹那、漢譯して龍樹といふ、又龍猛とも龍勝ともいふ、眞言宗に於ては龍猛とばかり稱して居る。最初第十三祖迦毘摩羅尊者が已に第十二祖の門下に於て受度傳法せられて後に西印度すなはち龍樹の生國に起むかれた。然るに其國の國王の太子に雲自在といふ人があり、十三祖の道名を聞て渴仰のあまり、宮中に請して供養せられた、時に十三祖は我が釋迦如來の教に於



ては凡そ沙門たる者の法として國王大臣等の權勢の家に親近することを得ざれと誡められてあると云て辭せられた。太子は更に然らば我國城の北に大山あり、其山中に一つの石窟がある、其石窟へ往て禪寂の修行をなされては如何であるぞといふ。尊者は其れを快諾なされて即ち彼の山に入て行くこと數里、途中に於て一の大蟒に逢へり、尊者は其大蛇を顧みもせず直に前に行かれた、大蛇は遂に尊者の身を盤繞すと十三祖にぐる／＼と巻きついた尊者因てために三歸依を授くと大蛇に三歸戒を授けて佛弟子の仲間に入れてしまはれた、大蛇は三歸戒を聽き訖りて去る遂に身を隠してしまふた。尊者は更に進で將に石窟に至らんとす途中、復一人の老人の素服を着したのが尊者に對し合掌問訊し來つた、尊者は汝は何れの處に止住するやと問はれた、私は過去の昔しに於て比丘でありましたが常に寂靜を樂みて山林に隱居し獨り坐禪ばかり致して居る處へ、初學の比丘等がしば／＼尋ねてきて益を請ふに應答するを煩はしく思ふて遂に瞋恨の思を起した、其業報に因て命終の後に蟒身を受けて今已に千載に及びました。然るに今日たま／＼尊者に遇て戒法を聞くことを獲たるを誠に有り難く存じて御禮のためにこゝに參りましたと老人が言ふた、實に坐禪寂靜は此上もなき最勝の法であるけれども、毫も利他の念なくして獨り山林に隱居するが如きは、決して如來の正法ではない、況んや初學の者に對して法益を與へざるのみならず、却て瞋恨の念を起すが如きは畜生中にも尤も醜陋なる大蟒の身を

受ること當然の業報といふべきである。

尊者問て曰く此山に更に何人ありて居止するや。曰く此より北に去ること十里にして大樹あり、五百の大龍を蔭覆す、其大樹王を龍樹と名く、常に龍衆の爲に說法す、我も亦聽受するのみ。尊者遂に徒衆と與に彼に詣る。龍樹出て尊者を迎て曰く深山孤寂にして龍蟒の居する所なり、大聖至尊何ぞ神足を枉るや。尊者曰く吾は至尊に非ず、來て賢者を訪ふ。龍樹默念して曰く此師決定性を得て道眼を明むるや否や、是れ大聖にして眞乘を繼や否や、尊者曰く汝心に語ると雖も、吾已に意に知る、但出家を辨ぜよ、何ぞ吾聖不聖を慮るや。龍樹聞き已て悔謝出家す。尊者即ち與めに度脱せしむ、及び五百の龍衆俱に具足戒を受く。

さて前十三祖は其老人に對し此山には更に如何なる人が居るやと尋ねられた。老人曰く此より北に去ること十里にして大樹あり五百の大龍を蔭覆す、其大樹王を龍樹と名くといふ、此れが第十四祖の名



の起りである、大樹といひ大龍といふ皆其寓言であることが分る。偕其龍樹といふ大樹王が常に龍衆の爲に說法す我も亦聽受すとあるから、彼の大蛇も其弟子の一員であると思える。そこで十三祖は自ら隨ひたる徒衆と與に彼に詣る、龍樹は出でて尊者を迎へて曰く深山孤寂にして龍鱗の居する所なり大聖至尊何ぞ神足を枉げて此へお出で下されたかと問訊の語をのべた。十三祖は之に答へて吾は至尊に非ず、却て汝の如き賢者を訪ふ爲めに來たのであると言はれた。此の時に龍樹は心の中に竊かに默念して考へた、此人は自から至尊と謂はれるやうな者ではないと言はれるけれども、一體に如何ほどの人であらうぞ、決定性を得て道眼を明らめたる聖者であらうか又は其うではなからうか己に大聖人であつて如來の眞乘を繼いだ祖師であらうか無からうかと思ふて居るのを、十三祖はとくに知て居られて、汝は心に語る未だ口には出さないけれども吾己に意中に其れを能く知て居るぞ、人のことを考へて居るよりも自分が早く出家を辨じ如來の弟子になるが宜しい、何ぞ吾が聖と不聖とを默念するが如き餘計な思慮を廻らすやと叱られた。龍樹は之を聞き已りて悔謝出家す、乃ち十三祖は之が爲めに度脱せしめ及び其眷屬たりし五百の龍衆も皆ともに具足戒を受けしめられた。

然しより尊者に隨ひて四年を経るに、十三祖龍王の請に赴きしに如意寶珠を

奉つる。師問て曰く此珠世中の至寶なりや、乃至師聞て深悟す。終に第十四祖に列す。

さて大樹王たりし龍樹は十三祖の弟子になつてから尊者に隨ひて四年を経た後のことであつた。十三祖龍王の請に赴きしに、龍王が祖に如意寶珠を奉つる龍樹は祖に向て此珠が世の中の寶の中の最大至極の寶であらうかと問ふた、乃至此珠は有相であらうか又は無相であらうかと問ふた。十三祖は之に答へて汝は只有相とか無相とかいふことばかりを知て居て、此珠は有相でもなければ無相でもないといふことを知らぬ、況んや此珠は珠でないといふことを全たく知らぬぞと叱られた。龍樹は聞きつゝある言下に豁然として深く悟道に入て十三祖の印證付屬を蒙り、終に第十四祖の祖位に列するに到られたのである。

夫れ龍樹は異道を學し神通を具す。常に龍宮に行て七佛の經書を見る。其題目を見て乃ち經の心を知り、尋常に五百の龍を化す。謂ゆる難陀龍王、跋難陀龍王等は皆是れ等覺の菩薩なり、悉く前佛の付囑を受け諸經を安置したて



まつる。今大師釋尊の經教人天已に化緣盡きん時も悉く龍宮に藏まるべし。是の如きの大威神ありて尋常大龍王と問答往來すと雖も是れ眞實の道人に非ず。只是れ外道を學するのみなり。

以下まさしく太祖の御提唱である。龍樹は異道を學し神通を具す「佛祖統記」には龍樹は南天竺の梵志の裔で佛滅後七百年に世に出で、始て生るゝの日に樹下に在り、龍宮に入て成道したるに依て龍樹と名く。弱冠にして名を馳せ諸國に獨歩し、天文地理星維圖識および餘の諸道術、綜練せざることをなしとある。常に龍宮に行て七佛の經書を見る、其題目を見て乃ち經の心を知る、此事も亦た「佛祖統記」に據れば大龍菩薩の神力に接せられて大海の宮殿に入り、七寶の函を開いて諸の方等經典を與ふ、九十日中に通解すること甚だ多し、龍曰く汝今經を閱すること徧しとなすや。龍樹曰く我今讀むところ閻浮に過ぐることに十倍なり、龍曰く協利天上の諸經は復此に過ぐることに百千萬倍と是より龍宮に於て修行し豁然として通達し、善く一相を解し深く無生法忍に入るとある。謂ゆる難陀龍王跋難陀龍王等の八大龍王は皆是れ等覺の菩薩であつて觀音文殊普賢彌勒等と同じく前佛の付囑を受け諸經を安全の地に置きたてまつるのである。今も大師釋尊の經教人天の化緣已に盡きん時も悉く龍宮に藏ま

るべし、故に龍樹は其龍宮に入て諸經を閱讀し尋常大龍王と問答往來すと雖ども、是れ未だ眞實の道人に非ず、只是れ外道を學するのみなり故に龍王の十三祖に獻じたる如意珠を見て有相か無相かといふが如き疑問を起して十三祖の提携を辱ふするに到つたのである。

一度十三祖に歸せしよりこのかた方には是れ大明眼なり。然るを人々皆思はく龍樹は只是れ祖門の十四祖なるのみに非ず、亦是れ諸家の祖師たる故に、眞言も是れを以て本祖とす、天台も是を以て根本とす、陰陽蠶養等も是を以て根本とすと。是れ昔し皆諸藝を習ひしかども、祖位に列して後は捨られし諸藝の弟子尙ほ龍樹は即ち本祖なりといへり、是れ即ち正邪を混亂して玉石を辨ぜざる魔黨畜類なり。唯龍樹の佛法迦那提婆のみ即ち正傳なり。餘は皆捨られし諸宗なり。今の因縁を以て知るべし。從前は唯外道の學者といふだけであつたが、今此の本則の因縁に依て一度十三祖に歸せしよりこのかた方には是れ大明眼の宗師となつたのである。然るに世の尋常の人々皆思はく龍樹は只是れ祖門すなは



ち禪宗の十四祖なるのみに非ず亦是諸家の祖師であるといふて居る。即ち眞言も是を以て本祖とす、此れは龍樹(眞言宗では龍猛)が南天の鐵塔を開て「大日經」等を出したのが本據となり、又龍樹の述べられた釋摩訶衍論も亦た眞言宗の基礎の隨一となつたのである。天台も是を以て根本とす此れは龍樹の述べられた「十二門論」が本になつて空假中の三諦といふことが天台宗の教義の根源となつたからである。其他に陰陽道だの蠶養術だのといふことも龍樹を根本とするといふ説もあるが、是れ皆な昔し外道であつた頃に諸藝を習ひしかども一たび祖位に列して後は皆捨て、しまはれたのである。然るに其捨られし諸藝の弟子尙ほ龍樹は即ち其の道の本祖なりといへり、其徳を戀ふことは左もあらばあれ、其爲めに正邪を混亂し玉石を辨ぜざるに至りては魔黨畜類の誘りを免がれぬことになる。畢竟唯龍樹の佛法は次章に擧げらるゝ所の第十五祖迦那提婆のみ即ち正傳なり、餘は皆捨られし諸宗なりといふことは、今此の本則の因縁を以て知るべきである。

五百の龍衆を接化すと雖も猶ほ迦毘摩羅尊者至るとき、出て迎て禮拜し試みんとす。尊者且らく隱密して正宗を顯はさず。龍樹默念して曰く是れ眞乘を繼げる大聖なりやと心中に測り見んとす。祖曰く但出家を辨ぜよ、何ぞ吾が

聖と不聖とを慮るやと言ひしかば、龍樹慚愧して十三祖に嗣ぎ來る。今の因縁を以て明むべし。

龍樹は未だ十三祖に見えざる以前に於て已に五百の龍衆を接化して大龍王と推尊せられて居たのであるけれども、猶ほ迦毘摩羅尊者が其石窟に至られし時には、出で迎て禮拜し試みんとす、其時に迦毘摩羅尊者は且らく隱密して未だ正宗を顯さず、故に龍樹は其徳如何を測り知ること能はず。乃ち默念して此の尊者は是れ眞乘を繼げる大聖なりやと心中に測り見んとす。然るに十三祖は其心念を洞觀して汝は速かに但出家を辨ぜよ佛弟子に成れ、何ぞ吾が聖と不聖とを慮る必要あらんやと言はれたので、龍樹は慚愧して十三祖に法を嗣ぐことになつたといふことは今此の本則の因縁を以て明らむべきである。

曰く此珠世中の至寶なり、此珠有相なりや無相なりや。實に龍樹さきより知れり。是れ有相なりとやせん、無相なりとやせん、頗る有無の所見を動執するなり。之に依て祖示して云々。實に設ひ世間の珠なりと雖も、眞實を論ぜん



時是れ有相無相に非ず、只是れ珠なり。況や力士の額に繋る珠、輪王の髻に包みし珠、龍王の珠、醉人衣裏の珠、悉く他の所見に涉らず、有相無相とも辨じ難し。然れども適來の珠は悉く世間の珠なり、全く是れ道中の至寶に非ず、何に況や此珠又珠に非ざることを知ることを能はず。實に精細にすべし。

龍王が十三祖に献じたる珠は世中の至室なり但此珠有相なりや無相なりやが疑問である、乃ち此珠が世間に有らゆる珠の中の至寶であるといふことは實に龍樹さきより知れり、但是れ有相なりとやせん無相なりとやせんといふ有無の所見を動執して自ら決することが出来なかつたのである。動執とは心念を動じて固執すること之に依て十三祖が有相にも非ず無相にも非ず乃至此珠は珠に非ずとまで開示せられたのである。實に此珠は龍樹もさきより知れるが如く設ひ世間の珠なりと雖も、眞實を論ぜん時、是れ有相にも非ず無相にも非ず、只是れ珠なり、況や力士の額に繋る珠、此れは「祖庭事苑」に涅槃經の譬喩を引てある。或る王家に居る大力士は生れつき眉間に金剛樹があつた、或時他の力士と相撲を取て頭を打ちつけたはづみに額の珠が亡くなつて額に瘡がついた、醫者其瘡を療治しやうと思ふたが、珠が皮膚の下に入居たのである、然るに力士は珠を失ふたと思ふて頻りに悲み、醫者が

皮下に在るといふても、其れを疑がつて承知しなかつたといふ譬である。額の珠は人々具足の佛性である、瞋恚の毒のために人と闘つて佛性の珠の所在が分らなくなつた、良醫たる明眼の正師に指導せられて、自己額上の皮肉の下から其珠を顯はすが如く、煩惱妄想の中から眞如實相の顯現を見るのである。又輪王の髻に包みし珠、此れは「法華經」の安樂行品に轉輪王の髻中に包める珠は兵衆の尤も大功ある者に賜與したが如く如來も亦復是の如く賢聖の軍の衆魔と戦ふて大功勳ある者に此法華經を與ふとあるの譬喩。龍王の珠、此れは「莊子」九重の淵に在る驪龍領下の珠を得るの譬喩、いつも得道の容易ならざるに比況せらる。雪寶禪師が二十年來會て苦辛す、君が爲めに幾度が蒼龍窟に下るといふたやうな場合。又醉人衣裏の珠、此れは「法華經」の五百弟子授記品に譬へば人あり親友の家に至り酒に酔て臥せり、是時に親友無價の寶樹を以て其衣裏に繋けて之を與ふ、其人醉臥して都て覺知せず、遊行して他國に到り衣食のための故に動力求索して甚だ艱難す、後に親友たまく遇て是言を作す、咄哉丈夫何ぞ衣食の爲めに是の如きに至る、我れ昔し汝をして安樂を得せしめんと欲して、無價の寶樹を汝が衣裏に繋けたり、今なほ現に在り而るを汝知らずして勤苦憂惱す甚だ痴と爲す、汝今此寶を以て所須を貿易すべしとある、具足の佛性を自ら覺知せざるの凡夫を警醒するの譬喩である。乃ち人々は等の種々の珠の譬喩は、悉く他の所見に涉らず有相無相とも辨じ難し、皆冷煖自知するの



外はないのである。然れども適來列舉したるが如き珠は尙ほ悉く世間の珠なり全く是れ祖師門下に傳承する所の道中の至寶に非ず、何となれば隱顯出沒を論ずるは方便隨機の所談である、何に況や此珠又珠に非ざることを知ること能はず、實に精細にすべしと警誡せられた。

玄沙曰く全體是れ珠、誰をしてか知らしめん。又曰く盡十方世界是れ一顆の明珠と。實に是れ人天の所見を以て辨ずべきに非ず。然れども設ひ世間の珠なるも全く外より來るに非ず、悉く人の自心より發現し來る。故に天帝釋は是を如意寶珠とも摩尼寶珠とも受用し來る。病ある時も此珠を置けば病即ち癒ゆ。憂ある時も此珠を戴けば憂自ら除く。神通變幻を現ずることも此珠に依る。輪王七寶中に摩尼寶珠あり一切の珍寶悉く此より出生す。受用するに無量なり。是の如く人天の果報に隨ひて勝劣あり差別あり。然らば謂ゆる道中の至寶は如何といふに、玄沙の師備和尚は全體是れ珠誰をしてか知らしめんと曰ひ、又盡十方世界是れ一顆の明珠とも曰はれた、十方世界のあらゆる物の全體が其儘に一つの珠である、

珠の外には何物もない。然るに誰をしてか之を知らしめん知るものだの知られるものだのと二つ並んで居るのではない、是に於て此珠は珠に非ず、もはや世間並みに珠と名くべきものではない、況んや有相だの無相だのといふ沙汰の限りでないは言ふまでもない、實に人天の所見を以て辨ずべきに非ずである。去りながら設ひ世間の珠にして見ても、全く外より來るに非ず悉く人の自心より發現し來る物である、故に天帝釋は是を如意寶珠とも摩尼寶珠とも受用し來る、摩尼といふは梵語、漢譯して無垢光とも離垢光とも曰ひ又義譯して如意とも曰ふ「祖庭事苑」に增長論を引て摩尼珠は多く龍腦中に在り、有福の衆生は自然に之を得る。亦は如意珠と名く、常に一切の寶物衣服飲食を出す、毒も害すること能はず、火も焼くこと能はず云々と云ふてある。乃ち病ある時も此珠を置けば病即ち癒ゆ、憂ある時も此珠を戴けば憂自ら除く、神通變幻を現ずることも此珠に依る、如意珠と名けられる所以實に此に在り。さて又人間界に於ても輪王の七寶中に摩尼珠あり、輪王は即ち轉輪聖王と稱せらるゝほどの國王中の尤も果報の勝れたる者にて、金輪寶と象寶と紺馬寶と神珠寶と主藏臣寶と玉女寶と主兵臣寶との七寶を得て轉輪王となるといふことがある。一切の珍寶悉く此より出生す受用するに無量なり、是の如く人天の果報に隨ひて勝劣あり差別あり、勝劣差別はあるけれども何れも皆廣大なる功德を具足して居る、況んや我が道中の至寶に於てをや。



人間の如意珠とは米粒をも名けたり、之を寶珠とす。是れ天上の珠に比するに造作建立とす。然も是を呼で珠とす又如来の舍利佛法滅する時如意寶珠となり一切を雨ふらし米粒ともなりて衆生を助くべし。設ひ佛身と現じ米粒と現じ萬法と顯はれ一顆と顯はるゝとも、自心顯はれて五尺の身となり三頭の形となり、被毛戴角の形となり、森羅萬像品々となる。然も即ち須く彼の心珠を辨ずべし。

さて又其輪王よりも果報の劣れる尋常の人間の如意珠とは米粒をも名けたり是を寶珠とす、實に人間の生命は此米粒に依て相續す、故に一粒米の重きこと須彌山の如し七十二功豈等閑ならんやとも云ふてある、永平高祖の示庫院文など能く一拜讀すべきである。此の米粒を天上の自然に得るところの珠に比するに米粒は人の手に依て造作建立されたもので劣れるやうに見えるけれども然も是を呼で珠とす、又如来の舍利佛法滅する時如意寶珠となり一切を雨ふらし米粒ともなりて衆生を助くべしとも云ふてある。塔を建て像を造る時には必らず佛舍利を其中に安置すべきであるが、若し佛舍利を得難き時には米粒を以て佛舍利の代りにするといふ故實もある。大和室生寺に在る弘法大師造立の百萬塔

の中から多くの米粒が出る、俗に之を糝塔といふのも全く其れである。設ひ佛身と現じ米粒と現じ萬法と顯はれ一顆(明珠)と顯はるゝとも、畢竟皆悉く自心顯はれて人間としては五尺の身となり天部としては三頭八臂などの形となり、畜生道に在ては被毛戴角の形となり、其他森羅萬像品々となる、然もいづれにしても即ち須く彼の心珠を辨ずべきが何より肝要である。

昔の比丘の如く寂靜を願ひ山林に隱居すること勿れ。實に是れ前來も是の如き未得道なる錯りあり、近來も是の如く未得道の錯りあり。猶ほ諸人と肩を交へ參來參去すること閑靜ならざる故に、獨り山林に居して靜かに坐禪行道せんと。是の如く言ひて多く山谷に隱居し妄りに修鍊する類、多くは以て邪路に趣き來る。所以者何となれば其眞實を知らず徒らに自己を先とする故なり。

謂ゆる心珠を辨するの正修行に就ての用心を示される。昔の比丘の如くとは本章の初めに見えた彼の山中の石窟に千年も住んで居た大蛇の前身が、寂靜を願ひ山林に隱居して初心の者に教ふことも厭ふ



たやうな者にならぬやうにせよ。實に是れ前來も是の如く何程坐禪しても未得道なる錯りあり、昔ばかりではない近來も是の如く未得道なる錯りは甚だ多い。猶ほ諸人と肩を交てかやうに參來參去すること閑靜ならざる故に、獨り山林に居して靜かに坐禪行道せんとは是の如く言ひて多く山谷に隱居し妄りに修鍊する類多くは邪路に趣き來ることをまぬがれない。其わけはといへば其眞實の佛道を知らず、徒らに自己を先とするからである、眞實の佛道といふものは衆生無邊誓願度の大願を發して自己の利益を先とせず度他利生を主とせんければならぬのであるから、獨り山林に居り閑寂を樂で居らるべきわけのものではない。

又曰く大梅常禪師も鐵塔を戴き松烟の中に坐す。瀉山大圓禪師も虎狼を友として雲霧の底に修す。我等も是の如く修習すべしと。實に笑ひぬへし。古人悉く得道して正師に印記を受け、暫く道業を純熟せしめん爲めに、機縁を待つ間是の如く修せしなりと知るべし。大梅は馬祖の正印を受け、瀉山は百丈の傳付を得し後なり。愚見の及ぶ所に非ず。隱山羅山等の古人いづれも未得

道の先に獨住せしことなし。徳行を一時に揮ひ名を末代に留る、明眼の大聖得道の眞人なり。徒らに參すべきを參せず至るべきに至らず、山谷に居して獼猴の如くならん。尤も是れ無道心の甚きなり。

又彼の山居を好む人だちは馬祖の法嗣大梅常禪師も鐵塔を戴き松烟の中に坐す、百丈の法嗣瀉山大圓禪師も虎狼を友として雲霧の底に修す、我等も是の如く修習すべしと云ふのであらうが、其れは實に笑ふべきことである。古人に其の様な行業のあつたのは皆悉く得道して正師に印記を受けた後に、暫く道業を純熟せしめん爲めに其道を傳ふべき確實なる嗣法の機縁を待つ間是の如く修せしなりと知るべし、大梅の法常禪師が鐵塔を頭上に載せて坐禪して居られたといふは、已に馬祖道一禪師の正印を受け第三十六世の祖位に列せられた後のことである。瀉山の大圓禪師が雲霧の底に修せられたといふも已に百丈懷海禪師の傳付を得て第三十七世の祖位に列した後のことである、是等の行業は到底凡愚の所見の及ぶべきではない、隱山といふは法眼禪師の法嗣で靈隱山に住せられた清聳和尚のことである。羅山といふは巖頭禪師の法嗣で羅山の道閑和尚といはれた人である。是等の古人イツレモ未得道の先に獨住せしことなし、皆其徳行を一時に揮ひ名を末代に留る明眼の大聖得道の眞人である、然



るに若し徒らに其跡のみを學びて參ずべきをも參ぜず至るべきにも至らず、山谷に居して獼猴の如くならば尤も是れ無道心の甚きなりと誡められた。永嘉の玄覺大師は或人の山居を誡めて、未だ道を見ずして山に入れば唯山のみを見て道を見じと誡められてある。委いことは永嘉集を見るが好い、實に是れは眞實參學の人の尤も用心すべき所である。

若し道眼清明ならず自調修鍊する者は聲聞緣覺となり。虚く敗種の者たらん。謂ゆる敗種といふは焼たる種なり佛種を斷ず。然るに諸仁者子細に叢林に修鍊し長時に智識に參尋して、大事悉く明め自己まさに明辨し畢り、其後暫く根を深くし蒂を固くせんことは、曩祖の付囑なりといふとも、殊に此一門の中、永平開山獨住を誡めらる。是れ人を邪路に趣かせじとなり。殊に先師二代の示しに曰く我弟子は獨住すべからず、設ひ得道せりとも叢林に修鍊すべし。況や亦參學の輩は一向獨住すべからず、若しも此制に背かん者は吾門葉に非ずと。

若し道眼未だ清明ならずして、唯自調獨善のために山居などして修鍊する者は、徒らに聲聞緣覺となりて決して菩薩には成れぬから虚く敗種の者たらん謂ゆる敗種といふは焼たる種なり都べて草木の種の如きものは百千年の長時間を経て雨露水土の縁さへあれば必ず芽の出るものであるけれども、一旦火に焙りて焼てしまふた種は、決して芽の出づべきものではないやうに、一旦聲聞緣覺自調獨善の小乘に陥つた者は決して成佛得道は出来ぬに依て佛種を斷ずることになる。然るに諸仁者子細に叢林に修鍊し多くの同參の人と共に長時に知識に參尋して佛法の大事悉く明め自己の面目まさに明辨し畢りたる其後に於て謂ゆる聖胎長養のために暫く根を深くし蒂を固くせんとして山林閑寂の處に幽居するといふことならば、其れは曩祖の付囑もあることではあるが、左もなく最初から山居幽棲するといふことは、殊に我が此一門の中永平開山承陽大師は深く獨住を誡められてある、是れ人を邪路に趣かせないやうにと思ひ召されるからのことである。別して永平寺の先師二代孤雲禪師の示しに曰く我弟子は獨住すべからず設ひ得道せりとも叢林に修鍊すべし況やなほ未だ參學中の輩は一向獨住すべからず若しも是制に背かん者は吾門葉に非ずとまで誡められてあるぞよと仰せられた。

又圓悟禪師曰く古人旨を得て後、深山茆茨石室に向て折脚鐺兒に飯を煮て喫



し、十年二十年大に人世を忘れ、永く塵寰を謝す。今時敢て望まず。又黃龍南曰く自ら道を守り山林に在て老かまらんより、何ぞ衆を叢林に引入するに如かんやと。近代諸大宗匠皆な獨住を好まず。況や人の根器悉く昔の人よりも劣なり。唯だ叢林に在て修鍊辨道すべし。古人も是の如く猶ほ用心疎なるに依て、猥りに寂靜を好みしかば、新學の比丘來て請益せんに、答ふべきを答へず、瞋恚を發しき。實に知りぬ其身心未だ調はず、知識に離れ閑居獨住せんこと、設ひ龍樹の如く說法すと雖も、唯だ是れ業報の類なるべし。更に古人の示しを引て山居獨棲の非を誡められる。圓悟禪師は彼の碧巖集を著はされた臨濟宗の大徳である、彼の人の言はれたには古人には既に大悟徹底して佛祖の玄旨を得て後に深山に入り茆茨石室に向て折脚錮兒といふて脚の折れた疎末な錮兒に飯を煮て喫するといふ山居幽棲を十年二十年の間つゞけて大に人世を忘れ永く塵寰を謝すといふ境界に住した人も往々あつたけれども、今時敢て望まず當節は其のやうなことを望むべきではないと言はれた。又黃龍の南禪師は謂ゆる黃龍派の祖師であるが、此人も自ら道を守り山林に在て老かまらんより何ぞ衆を叢林に引入するに如かんやと言はれて

ある。是の如く近代の諸大宗匠皆な獨住を好まず成るたけ衆と共に叢林に在て辨道することを喜ばれるのである。況や人の根器悉く昔の人よりも劣なり根器の勝れた人ならば獨住しても誤りは少ないかも知れぬが、根器の劣れる者は必らず善知識の提撕を得なければならぬ。仍で唯だ叢林に在て修鍊すべし、現に彼の大蛇の身となりて千載を経たりといふ。古人の如きも是の如く猶用心の疎なるに依て叢林に入て衆と共に辨道せず唯々猥りに寂靜を好み獨住を喜ぶの餘り新學の比丘が來て請益するにも答ふべきを答へず却て面倒に思ひ瞋恚を發したる業報に依て千載大蛇の身となつたのである。其うして見れば實に知らねばならぬ、其身心未だ調はず大悟徹底の境界にも到らぬ者が知識に離れ閑居獨住せんこと設ひ龍樹の如く己に五百の龍種を悉く弟子にするほどの說法をしたからといふても尙唯だ是れ業報の類なるべし、第十三祖に値遇して其の接化を受ける時になつては彼の大蛇の身の老人も龍樹も未得道の點に於ては何の差異もないのである。

諸人厚植善根なるに依て、正しく如來の正法を聞き得たり。謂ゆる國王大臣に親近せずと。獨住閑居を好樂せず、唯だ道業を精進し、専ら法源を透脱すべし。是れ正に如來の眞口訣なり。今日適來の因縁を舉揚するに即ち卑語あ



り聞かんと要すや。

孤光靈廓常無昧

如意摩尼分照來。

以下本章の結勸の示しである。今かく大乘會下に於て親しく太祖の御提撕を受けつゝある諸人の如きは實に皆厚植善根宿世の因縁勝れたる人々であるに依て、斯くも正しく如來の正法を聞き得るのである、謂ゆる國王大臣に親近せずといふことばかり僻見に誤解して山林に獨住閑居することのみを好樂せず、大衆と共に道業を精進し専ら法源を透脱することを願はねばならぬ。其れが即ち是れ正に釋迦如來の眞口訣である。偕今日も亦適來の因縁を擧揚するに即ち卑語あり聞かんと要すや、其語は例の如く七言二句で、本則の如意珠を願せられたのである。有相にも非ず無相にも非ざる人々本具の心光を今は孤光と名けられた、孤といふは絶對の義である此と並ぶべきものは他に絶えて無いから孤光である、此の孤光は十方法界に充滿滿溢して居るから靈廓である、其うして三世を通貫して居るから常に味ますこと無しと云はれた。之を或ひは摩尼寶珠とも名けるのであるが、摩尼は即ち如意の義で、一切時一切處に自由自在如何なる事にも應用無礙なる有様を分照即ち光照を分布し來ると願せられたのである。

第十五章

第十五祖迦那提婆尊者。謁龍樹大士。將及門。龍樹知是智人。先遣侍者。以滿鉢水。置於座前。尊者觀之。即以一針投而進之相見。忻然契會。此れが本章の本則、以下太祖の御提唱例の如くである。

師は南天竺國の人なり。姓は毘舍羅初め福業を求む。兼て辯論を樂む。龍樹尊者得法行化して南印度に到る。彼國の人多く福業を信ず。尊者の爲めに妙法を説くを聞て遞に相謂て曰く、人に福業あるは世間の第一なり。徒らに佛性を言ふ。誰か能く之を觀ん。龍樹曰く汝佛性を見んと欲すや。先づ須らく我慢を除くべし。彼人曰く佛性は大か小か、龍樹曰く佛性は大に非ず小に非



ず廣に非ず狹に非ず、福なく報なく、不死不生なり。彼れ理の勝れたるを聞て悉く初心を廻す。

第十五祖迦那提婆尊者は南天竺の毘舍羅姓の人である最初は福業を求むる人であつた、福業といふは世間の幸福利益のことで昔も今も現在目前の利益ばかり求めて、眞實の佛法などを求める人は多くないのである。殊に此の尊者は兼て辯論を樂むとあつて、餘程議論を好む人であつたと見える。或時第十四祖の龍樹尊者が已に第十三祖の法を傳へられてから南印度の方へ行化せられた。然るに彼の南印度の人だちは多く福業を信じて、高尚なる佛法などを聞く氣の人がないのであるから、龍樹尊者が其國の人だちの爲に妙法を説くを聞いて遽に相謂て曰く人に福業あるは世間の第一なり、現世の幸福さへ得られたならば其外に求むる所はないわけであるに、徒らに佛性などといふことを説いたからといふても、誰か能く之を觀んどうして其佛性を見ることが出来やうぞと誹謗した。そこで龍樹曰く汝佛性を見んと欲するや先づ我慢を除くべし、此の夢幻の如き人間の身に執着して其れを我と思ひ自己と信じて居るから、其の自己の目前の幸福ばかり求めて居るのである、就て先づ其の我と思ふ心を除かなければならぬ。斯の如く示されるのを聞いて更に彼人は佛性は大小かと問ふ、斯く問ふたのは已に幾

分か佛性開發の因縁に近いてきたのである。そこで龍樹は佛法は大に非ず小に非ず廣に非ず狹に非ず福も無く報も無く生にもあらず死にもあらずるものと十方三世一枚の佛性本體を全提して示された。彼の人々は兼て宿植善根の勝縁ありしと見えて龍樹の説かるゝ道理の勝れたるを聞て悉く初心を廻すと、今まで福業ばかり求めて居た卑劣な心を改めるやうになつた。

其中の大智慧迦那提婆、龍樹大士に謁す。乃至忻然として契會す。即ち半座を分て居せしむ、恰かも靈山の迦葉の如し。龍樹即ち爲めに說法す。座を起たずして月輪の相を現す。師、衆會に謂て曰く、此は是れ尊者佛性の體相を現じて以て我等に示す。何を以て之を知る、蓋し以れば無相三昧は形滿月の如し。佛性の義、廓然虛明なりと。言ひ訖て輪相即ち隱る。復本座に居して偈を説て言く、身現圓月相、以表諸佛體、說法無其形、用辨非聲色、是の如くなるが故に師資分ち難く命脈即ち通ず。彼の福業のみを求めて居た多くの人々の其中の大智慧者たる迦那提婆尊者が龍樹大士に謁した時に尊



者が將に門の處まで來たのを見て、大士は早く此は大智慧の人であると察せられて、侍者に水を一杯に盛つた一つの鉢を持たせて、何とも言はずに尊者の前へ出させた。尊者も亦何とも言はずに其鉢の水の中へ針を一本入れて大士の前へ差し出した、斯くお互ひに何とも言はずに相見の挨拶が濟で、忻然契會と默々の間に謂ゆる以心傳心して互ひに喜ばれた様子であつた。そこで大士は即ち尊者に半座を分て居らしむ、恰かも彼の昔靈山に於て迦葉尊者が釋迦如來の半座を分たれて如來と並んで一〇座に就た時の様であつた。龍樹大士は半座を提婆に分たれたまゝで一同の人々のために説法せられ、其座を起たずに月輪の相を現す、大士の身が其儘に満月の形になつてしまふた。そこで提婆尊者は一同の人々に向て此れは是れ尊者佛性の體相を現じて我等に示されたのであると宣告せられ、更に其わけを説き明されて無相三昧といふものは圓滿にして缺くる所なく又餘る所もないものであるから譬へて見れば其形滿月の如くである、何故にかといふに佛性の義といふものは廓然として十方法界に礙ゆるところなく、其うして靈明と其形なきまゝに照り輝やかぬところの無いものである、と言ひ訖て其の月輪の相は忽に隠れてしまふて龍樹尊者は復た本の座に居して更に偈を説かれた、其偈は身に圓月の相を現じて以て諸佛の體を表す其わけは諸佛が如何なる法を説かれても其法に形の見るべきものは無い恰かも月は天地を照すけれども其光を手にとりて見ることの出來ないやうなものである、其様子

を圓月の相を以て現はし示し、法は決して聲色の間に在るもので無いといふことを辨じ知らせるのである、聲色に非ずといふは耳で聞たり目で見たりすることの出來ぬものであるといふことである、是の如くなるが故に第十四祖の龍樹と第十五祖の迦那提婆とは師資分ち難く何れが師匠とも何れが弟子とも差別がつかぬ、即ち佛祖の命脈が證契即通して平等一相の境界に安住せられたのである。

適來の因縁是れ尋常に非ず、最初に道に合し來る。龍樹も一言の説なく提婆も一言の問なし。故に師資存し難く、賓主如何が分たん。是に依て殊に迦那提婆、宗風を擧説して遂に五天竺の間、提婆宗と謂はれしなり。謂ゆる銀盃に雪を盛り明月に鷺を藏すが如し。是の如き故に最初相見の時、即ち滿鉢の水を以て座前に置しむ、豈に表裏を存し内外を存せんや。已に是れ滿鉢終に虧闕なし。亦是れ湛水虛明なり。通徹して純清なり。彌滿して靈明なり。故に一針を投じて契會す。須らく徹底徹頂なるべし。正なく偏なし。此に到りて師資分ち難し。類すれども齊きことなく、混すれども跡なし。



更に師資分ち難き様子を説き明かされる、實に適來の因縁是れ尋常に非ず、師資相見の最初から道に合し來つたのである、師の龍樹も一言の説なく資たる提婆も一言の問なし、互ひに不言の間に默識神契したのであるから師資存し難く資主如何が分たん、かやうなわけであるに依て迦那提婆は殊に宗風を擧説して遂に五天竺の間に提婆宗と謂はれる程になつたのである。提婆宗といふことに就ては碧巖集の第十三則巴陵銀盃裡の處を見るが好い、圓悟の垂示にも雲大野に凝て偏界藏さず雪蘆花を覆ふて朕迹を分ち難しとあり、其本則が即ち如何なるか是れ提婆宗といふの間に答て巴陵の顛鑿禪師が銀盃裡に雪を盛ると言はれたのである。今此の太祖の御提唱も其れと同道唱和であつて謂ゆる銀盃に雪を盛り明月に驚を藏すが如しとある、元來此語は誰も知て居る通り、寶鏡三昧の中の語で、銀盃も明月も皆白いものである、雪も驚も亦白いものである、白いものと白いもの同一色であつて差別はない、差別は無いけれども雪は雪であり驚は驚である、決して混雜することは出來ぬ、此れが即ち色即是空空即是色の形であつて、即ち佛法全體の姿である。是の如き故に最初相見の時に龍樹は即ち滿鉢の水を以て座前に置しむ恰かも銀盃を持ち出したやうなものである、此の滿鉢の水に豈に表裏を存し内外を存せんや、此の滿鉢の水は終に虧闕なし亦是れ湛水虛明なり通徹して純清なり彌滿して靈明なり、湛々たる水には一點の波浪も無い、一塵をも存せずして虛なれども玲瓏として明白である、隅から隅

まで透明にして純粹清淨に瓶裡に彌滿して靈光を放つて居る、十方徧滿三世通暢の佛性を表明するに此に過ぎたるものはない。然るに銀盃のみでは法が死ぬ明月ばかりでは道が活用せぬ、故に迦那提婆は此の滿鉢の水に一針を投じて契會した、恰かも銀盃に雪を盛り明月に驚を藏したやうなものである、須らく徹底徹頂なるべし十方法界の一切諸法皆此の滿水一針の上に現成し盡してしまふて、此間に正なく偏なく佛もなければ衆生もない迷もなければ悟もない、此に到りて師資分ち難し孰れか主いづれか賓と分ちやうもない、分ちやうが無いけれども決して混雜はせぬ乃ち類すれども齊きことなく混すれども跡なし、こゝが我が宗乘の尤も大切なるところである。

揚眉瞬目を以て此事を現せしめ、見色聞聲を以て此事を表す。故に聲色の名くへきなく、見聞の捨つべきなし。圓明無相にして清水の虛廓なるが如し。靈理に通徹し神鋒を求むる時に似たり。處々鋒を露はし來り、明々として心を通じもて去る。水も流れ通じて山を穿ち天を浸し去り、針も囊を透し芥子を刺しもて來る。然も水遂に物の爲めに破れず、豈に跡を作すことあらんや。



針も他の爲めに堅きこと金剛にも過たり。

是の如き證契即通の場合になつては文字言句を以て表現せしむることが出来ぬに依り、昔は靈山會上に於て釋尊が拈華せられ迦葉が微笑せられたが如き即ち揚眉瞬目を以て此事を現せしめられたのである。揚眉瞬目といふは即ち拈華微笑の姿である、又古人は見色聞聲を以て此事を表したのもある、然し假ひ色を見たり聲を聞たりしたといふても、其の聲や色には用がない、聲色の名くべきなし聲色の名くべきは無いけれども亦見聞の捨つべきも無い。一體に佛性といふものは圓明無相にして清水の虛廓なるが如し實に一點の濁りもない清水は底の底まで洞徹透明して居るやうに、佛性は靈理に通徹し神鋒を求る時に似たりとある、此の神鋒といふことは何か故事のあることかと思はれるけれども、今は未だ考へ當らない、但意を得て考へて見れば水の中に大切なる寶劍を落したのを搜り求めるやうな貌と見える。十方法界に充滿瀾淪して居る佛性界の中に吾人の日夜行住坐臥する有様、處々鋒を露はし來り明々として心を通じもて去る、今彼の水と針とを見るに水も流れ通じて山を穿ち天を浸し去り針も囊を透し芥子を刺しもて來る、針が囊を透すといふことに就ては吳越軍談や戰國策に平原君と毛遂との故事がある、芥子の話は天上から針を下して地上の芥子に透したといふ謂ゆる針芥相投する

の故事がある。水は山をも穿ち天をも浸すけれども水遂に物の爲めに破れず豈に跡を作すことあらんや「水鳥の往くも還るも跡たえて然れども道は忘れざりけり」といふ祖歌も此意であらう。亦針も他の爲めに破られざることは其堅きこと金剛にも過ぎたり、水中の針は殊に其力が強いであらう、佛性海中にをける吾人の行住坐臥も亦た其通りに堅固でなければならぬ。

恁麼の針水豈に是れ他あらんや。即ち是れ汝等が身心なり。吞盡の時は唯是れ一針なり、吐却の時は又是れ清水なり。故に師資の道通達して全く是れ自他なし。故に命脈即通して正に廓明なる時、十方に藏むべきに非ず恰かも葫蘆藤種葫蘆を纏ふが如し。攀ち來り攀ち去る唯是れ自心あるのみなり。然も諸人清水を知り得たりとも、子細に覺觸して底に針あることを明らむべし。若し錯りて服することあらば果して咽喉を破り來らん。

かやうに針だの水だのといふも恁麼の針水豈に是れ他ならんや即ち是れ汝等が身心なりと仰せられる、但此の身心これを自己に吞盡の時は唯是れ一針の如きである、但此の身心これを法界に吐却の時は又



是れ清水なり、是の如きの道理であるに依て師資の道通達して全く是れ自他なし、豈に唯だ師資のみならんや命脈即通して正に廓明なる時、十方に藏むべきに非ず、眞に無邊無際絶對一相の境界が現成し來るのである。譬へば恰も葫蘆藤種葫蘆を纏ふが如し、此語は正法眼藏の無情説法の卷に天童淨祖の語を引かれてある。千なり瓢箪の蔓が蔓にまつはりて其先も其先もと段々互ひに纏ひついて本も末も分らなくなつた形をいふのである。吾人の心が心を起し、又其心が心を生ずる攀ち來り攀ち去る唯是れ自心なるのみなり、是に於て吾人は彼の清水の如き虛明廓朗の平等一相なる自性を知らなければならぬ、此れが一往の修行の順序である。けれども設ひ清水を知り得たりとも更に子細に覺觸して水底に針あることを明らかにねばならぬ、若し誤りて清水の如き平等一相の境界にばかり腰を掛けて其水を丸呑に服することあらば果して咽喉を破り來り空無の初見に墮在するであらうぞ、退步却來の工夫の尤も大切なる所以全く此に在る。

然も是の如くなりと雖も兩般の會を作すこと勿れ。只須らく吞盡吐盡して子細に思量して見よ。設ひ清白にして虛融なりと覺すとも、正に是れ廓徹堅固なることあらん。水火風の三災も侵すことなく成住壞空劫も移すことなげん。

故に這箇の因縁を説破せんとするに更に卑語あり。大衆聞かんと要すや。

一針釣盡滄溟水。 獐龍到處難藏身。

然も是の如くなりと雖も兩般の會を作すこと勿れ、都べて何事に就ても兩般に涉り二邊に落ちては悉く中道に背く、況んや佛法は十方三世一相絶對の眞理である、迷悟凡聖正偏空有等の兩般に涉れば早く已に眞相を失ふ。故に只須らく吞盡吐盡して子細に思量して見よ、吞吐の二字は出入とも來往とも昇沈とも都べて兩般二邊に當て、見るが好い、兩般二邊ともに度し盡すのが即ち吞盡吐盡である。是の如くに子細に點檢し來らば設ひ清白にして虛融なりと覺し一點の滯りもなき滿鉢の水の中正に是れ廓徹堅固なる針ありて、世界滅盡の大災と稱せられる水火風の三災も侵すことが出來ず、成住壞空の四劫すなはち世界が如何に變動するとも決して動かすことの出來ない所が無ければならぬ。故に這箇の因縁を説破せんとするに更に卑語あり大衆聞かんと要すやと例の如く七言二句を提示せられた。一針釣り盡す滄溟の水、獐龍到處難藏身、迦那提婆が滿鉢の水に投じたる一針を以て佛法の大海を吞吐し盡してしまふた、已に大海の水を枯渴し盡されたに依て、其大海の底に睡り穩かであつた獐龍も身を深淵に藏して夢を貪ぼつて居るわけには往かなくなつて始めて活潑々地に大運動するこ



とになつた。乃ち吾人一旦大悟徹底した曉には十方法界の山川國土草木人天皆悉く我が掌中に歸して手に任せ拈じ來るに不是あることなしといふことになるのである。獐龍と云はれたのは海中に有りと有らゆる萬物を代表させられたまでのことで、獐とか龍とか云ふことに附き廻らないやうにせんければならぬ。

### 第十六章

第十六祖羅喉羅多尊者。執持迦那提婆。聞宿因。感悟。

此れは本章の本則、以下太祖の御提唱例の如くである。

師は迦毘羅國の人なり。謂ゆる宿因といふは、迦那提婆尊者受度行化して迦毘羅國に到る。彼に長者あり梵摩淨徳と曰ふ。一日園樹に大耳を生ず、菌の如にして、味甚だ美なり。唯長者と第二の子羅喉羅多と、取て之を食す取れば隨て長ず。盡て復た生ず。自餘の親屬皆見ること能はず。時に迦那提婆尊者其宿因を知て遂に其家に至る。長者其故を問ふ。尊者曰く汝が家に昔し曾て一比丘を供養す。彼の比丘然も道眼未だ明かならず、虚く信施に霑ふ



を以ての故に報ゆるに木菌と爲れり。唯汝と子と精誠に供養せしかば以て之を享ることを得たり。餘は即ち否らず。

第十六祖は迦毘羅國の人即ち如來と同郷の人である。本則に宿因を聞いて感悟すとある其の謂ゆる宿因といふは第十五祖の迦那提婆尊者が已に第十四祖の化度を受け了りて、行化して迦毘羅國に到られた。其國に長者あり梵摩淨徳と曰ふ、其長者の宅の園樹に大耳を生ず、其大耳といふは菌の如くにして味甚だ美なり、松茸か椎茸のやうなものであつたと見える、其の菌を長者と第二の子の羅喉羅多だけが取て之を食す、取り已れば隨て長ず盡て復た生ずと幾ら取て食てもあとから復た幾らでも出る。更に不思議なことには長者と羅喉羅多の外には自餘の親屬誰れ一人も此の菌を見ること能はず、時に迦那提婆尊者が其宿因を知て居られたから其因縁をお示しなされるために長者の家へ往かれた、そこで長者其故を問ふ、尊者之にお答へなされて汝が家に昔し曾て過ぎ去た時代に一人の比丘を供養してやつた、其比丘は道眼未だ明ならず人の供養を受けるほどの徳もないのに、虚く信施に霑ふを以ての故に、其の業報に依て木菌と爲て汝等父子に宿債を償ふのであると仰せられた。當今の世には此様な木菌の種が幾らあるか知れぬほどであらう、虚受信施の罪は恐ろしいものである、お互ひに戒め慎まねばなら

ぬ次第である。さて又自餘の親屬は之を見ることが出来ぬといふものは、唯汝と子と精誠に供養せしかば以て享ることを得たり、餘は即ち否らず、同じ供養をするに就ても本心から深切を盡さなければ決して其の福報を享けることは出来ぬ。

又問ふ長者年多少ぞ。答て曰く七十有九。尊者乃ち偈を説て曰く、入道不通理。復身還信施。汝年八十一。此樹不生耳。長者偈を聞て彌々歎伏を加ふ。且つ曰く弟子衰老せり師に事ること能はず。願くは次子を捨て、師に隨ひ出家せしめんと。尊者曰く昔し如來此子を記したまふ。當に第二の五百年に大教主たるべしと。今相遇ふ蓋し宿因に符へり。即ち剃髮して第十六祖に列す。さて又第十五祖が長者に向て年多少ぞと問はれた、七十有九と聞て更に偈を説て示された、道に入て理に通ぜざれば身を復して信施を還へす、信施を受くべき徳がなくて人の供養にあづかれれば生れ代つて其の信施に報いなければならぬ。そこで彼の比丘は木菌に生れて報いたのであるけれども、都べて業報には限りがあるに依て、汝が年八十一になれば此樹また耳を生ぜず、此木菌が生えないやうにな



るぞと仰せられた。長者は之を承りて彌々歎伏を加ふ非常に有難く思ふたが自分の身を願れば衰老せり師に事ること能はず、願くは次子即ち羅喉羅多を捨て、師に隨ひ出家せしめんと言ふた。そこで尊者が又仰せられるには昔し如來此子を記したまふ、釋尊が豫言して置かれた、當に第二の五百年すなはち佛滅後五百年の間を第一の五百年と云ひ其次が第二の五百年であるから、恰かも當代に方りて羅喉羅多が大教主たるべしと定められてある、然るに今こゝで相遇ふ盡し宿因に符へりとあつて即ち剃髮して第十六祖に列すとある、誠に以て不思議の因縁と謂ふの外はない。

古今學道の人、無慚無愧にして徒に清流に交はり、無知無分にして空く信施を受るを諫るに多く此因縁を引き來る。實に之に依て慚づべし。比丘として家を捨て道に入りぬ。居處も是れ吾地に非ず、食法全く是れ我物に非ず、衣服も全く我業に非ず、一滴水一莖艸總て是れ受用すべき物に非ず。所以如何となれば汝諸人悉く皆な國土に孕まる。一天下國土上悉く是れ國王の水土に非ずといふことなし。然るに家に在れば親に仕へ國に侍れば君に事まつる。

是の如くなる時天地加護ありて自ら陰陽の惠を受く。然もなまじるに佛法を願はんと號して仕ふべき親にも仕へず。事つるべき君にも事つらず。何を以てか父母生成の恩を報じ何を以てか國王水土の恩を報ぜんや。道に入て道眼なからん。恰も國賊と謂つべし。

以下此の因縁に就て太祖の御訓誨である。古今學道の人無慚無愧にして徒に清淨大海衆の流輩に交はり無知無分にして佛法の何物たるを知らず善惡正邪を分別するの力量も無くして空く信施を受るを諫るに多く此因縁を引き來ることであるが、實に之に依て慚づべきである。苟くも比丘として家を捨て道に入りぬる上からには、寺院にせよ庵室にせよ其の居處も吾地に非ず、食法全く我物に非ず、衣服も全く我業に非ず、一滴水も一莖艸も總て是れ我が隨意に受用すべき物に非ず、所以如何となれば汝諸人悉く皆な國土に孕まる、一天下國土上悉く是れ國王の水土に非ずといふことなし、其れ故に若し汝諸人出家せず家に在れば親に仕へ、國に侍れば君に事まつるべき身である。是の如く親にも仕へ君にも事つればこそ天地の加護ありて自ら陰陽の惠をも受くべきである。然るに今汝諸人なまじるに佛法を願はんと號して仕ふべき親にも仕へず事つるべき君にも事つらず、其れで何を以てか父母生



成の恩を報じ何を以てか國王水土の恩を報ぜんや、苟くも己に出家して道に入り而して道眼を開かず道人の行持なくては、恰かも國賊と謂つべしと、實に親言親口より出たる御訓誨を互ひに肝に銘じ魂にちりばめなければならぬ次第である。

既に棄恩入無爲、三界を出づといふ。然も出家してより後父母をも禮せず。國王をも禮せず。己に形を佛子に假り身を清流に宿す。設ひ妻子の施す所を受くと云とも、全く是れ世俗に在て受けんには同うせず。悉く是れ信施に非ずといふことなし。然も古人曰く道眼未だ明めずんば一粒をも咬破し難し。道眼清明なる時は設ひ虚空を鉢にし須彌を飯として、日々夜々受來るとも是れ信施に負くることあらず。然るに道眼の具足と不具足とを顧みず、猥りに僧と爲ては人の供養を受け來らんと思ひ、供養少なければ徒に人倫に望む。思ふべし汝等家を捨て郷を離れし時、一粒の蓄へなく一絲をも懸けず、孤露にして遊行す。只道眼の爲に身を任せ法の爲に身を捨つべし。豈に最初發心

徒に名利の爲め衣食の爲めにせんや。然れば人々問ふに及ばず。但自己最初の發心を顧みて、自らは處を省み、又不是處を省みよ。故に謂ふ終を慎むこと始の如くすること難しと。實に初心の如くせんに、誰か道人と爲らざらん。

既に初めて出家剃髮する時に流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者と稱し都べての恩義も愛情も棄て去て棄恩入無爲三界を出るといふのであるから、出家してより後は父母をも禮せず國王をも禮せず、己に形を佛子に假り身を清流に宿すの境界となつては設ひ出家以前の親屬や妻子の施す所を受くるのであると云ふても、全く是れ昔の在家の身を以て世俗に在て受けんには同うせず其意味が全く違ひ悉く是れ信施に非ずといふことなし故に古人曰く道眼未だ明めずんば一粒をも咬破し難し、若し道眼清明なる時は設ひ虚空を鉢にし須彌を飯として日々夜々受來るとも是れ信施に負くることあらず。此古人とは如何なる人であるやら未だ考へがつかない、竹窓隨筆にも古人の偈といふて施主一粒米、大似須彌山、若迅不了道、被毛戴角還といふを引てある此れも誰の偈やら分らぬが今も同じ意味である、負とは孤負するの義である。然るに道眼の具足と不具足とを顧みず猥りに僧と爲ては人の供養を受け來らんと思ひ、其供養少なければ徒に人倫に望む、誠に心得違ひの甚しき者と言はねば



ならぬ、身にしみくと自ら省みて思ふて見るが好い。最初汝等家を捨て郷を離れし時、本より一粒の蓄へなく身に一絲を懸けず孤露にして遊行し來つたのではないか。孤露とは單身にして一物をも着けざること、只道眼の爲に身を任せ法の爲に命を捨てんと願ふの外はないはずである、誰一人として最初發心の時に當りて徒に名利の爲め衣食の爲めにといふて出家した者があらうぞ。然れば人々誰に問ふに及ばず但自己最初の發心を顧みて、自らは處を省み又不是處を省みよ、最初の心を忘れさへ致さぬければ一生を全たうすることが出来るはずである故に謂ふ終を慎むこと始の如くすること難しと實に今出家修行の身に在ても初心の如くにのみ心懸てをつたならば誰か道人と爲らざらん、必らず古人にも耻ぢざる衲僧となることが出来るのである。

是に依て皆僧となり比丘尼となると雖も、徒に國賊となるのみなり。何を以てか昔の比丘は道眼未だ明ならずと雖も修行退轉なきに依て是を報ず、故に木菌とも作れり。今の比丘の如きは一生已に終らん時閻老汝を許すこと能はず。今の粥飯は或は鐵湯となり或は鐵丸となりて、是を呑ん時身心紅爛しもて

行くことあらん。雲峰悅禪師曰く見ずや祖師道く道に入て理に通ぜざれば身を復して信施を還すと。此れは是れ決定底の事、終に虚ならず。諸上座光陰惜むべし。時は人を待たず。一朝眼光落地を待つこと莫れ。緇田一箕の功なくんば、鐵圍百刑の痛に陥る。言ふこと莫れ道はずと。諸仁者幸に辱く如來の正法輪に遭へり。市中に虎に遭はんよりも稀なり。優曇華の一現するよりも稀なるべし。子細に用心し子細に參學して須らく道眼清明なるべし。

然れば心懸の悪い者は皆僧となり比丘尼となるのが、直に是れ徒に國賊となるのみである、何故にかといふに、昔の比丘すなはち今此本則の宿因となりし僧の如きは道眼未だ明ならずと雖も其の後の修行退轉なきに依て三惡道には墮在せず、其の虛受信施の恩を報ずる故に木菌とも作れり、此れには有情と非情との議論もあることなるが、其れは後に御提撕がある。然るに當今の比丘の如きは一生已に終らん時其の虚く信施を費やしたる罪を決して閻老汝を許すこと能はず。今日現在に費す所の粥飯は或は地獄の鐵湯となり或は鐵丸となりて、汝等が是を呑ん時身心紅爛しもて行くことあらんと誠められた。閻老といふは具さには夜摩羅迦といふのを閻摩羅とも對譯する、其れを更に略して閻摩とも琰



摩とも書く、今は閻摩老人といふの意にて閻老と言はれるのである。雲峰文悅禪師は太愚守芝の法嗣で本傳は續傳燈錄に出て居る、乃ち雲峰が此の本則の第十五祖の偈を引て見ずや祖師道く、道に入て理に通ぜざれば身を復して信施を還すと此れは是れ決定底の事終に虚ならず決して誤りのない事である。其れに就ては諸上座光陰惜ひべし時は人を待たず、日々夜々に勇猛精進に辨道工夫して暫時も早く道眼の明らかならんことを願はねばならぬ。従らに一朝ひなしく眼光落地して死し去るを待つこと莫れ。緇田とは緇衣の田地、緇衣とは黒染の衣をいふことすなはち出家の比丘たる境界に於て、必ず一箕の功を立ることが無かつたならば、死後には必らず鐵圍に百刑の痛みに陥るであらうぞ。一箕の箕は籤のこと古語の九仞の功を一箕に虧くの意に同じ即ち功の小なるをいふ。鐵圍は山の名にて此中に地獄ありと説く、百刑は刑罰の多きを云ふ。其時になつてから、言ふこと莫れ道はずと、雲峰が能く教訓してくれなかつたからと恨んではならぬぞと誡められてある。實に諸仁者幸に辱く如來の正法輪に遭へり、此れは市中に虎に遭はんよりも稀なり、市虎のことは戰國策に出でたるも今は稀有なることに喩えたり。優曇華の一現するよりも稀なるへし、優曇華といふは具さには優曇婆羅と云ひ瑞應と譯す、三千年に一たび華が開くといふことである。是の如くに遭ひ難き如來の正法に遭ひ奉つたのであるから、子細に用心し子細に參學して須らく道眼清明なることを希はなくてはならぬ。

見ずや今日の因縁を、有情といひ無情といひ、依報と分ち正報と分つこと勿れ。正に前生の比丘今日木菌と作れり。木菌の時も我は是れ比丘と作れりと知らず。比丘の時も我は是れ萬法と顯はれたりと知らず。然れば今有情にして少く覺知あり。聊か痛痒を辨ずと雖も木菌と殊なることなし。所以如何となれば木菌の汝を知らざること、豈に是れ無明に非ざらんや。汝が木菌を知らざること全く以て同じ。是に正て有情無情の隔てあり。依報正報の品あり。若し自己を明めん時何をか有情といひ何をか無情といはん。古來今に非ず根境識に非ず。能斷なく所斷なく、自作なく他作なし。大に須らく子細に參徹して身心脱落して見るべし。

見ずや今日の本則の因縁を、前生は比丘であり今は木菌である此間に於て有情といひ無情といひ依報と分ち正報と分つこと勿れ、依報といふは前にも屢々あつた如く人類畜類等の依て以て身を保つ所の器世界及び衣食住の類を謂ひ、正報といふは其の人類畜類等の身體を謂ふのである。今本則の昔の比



丘は身を木菌と作して長者父子の依報の一となつた、前世には其れと反對に長者父子から依報たるべき衣食の供養を受けて己の正報を養ふたのであつた、前世には比丘の形の有情であつたのが、今は木菌の形の無情となつた、無情と有情との差別は果して那邊にか在る、現在木菌の時も我は是れ前世に比丘と作れりと知らず、其れと同様に前世は比丘の時も我は是れ萬法の隨一として顯はれたものであるとも知らなかつた。其うして見れば今日現在吾人が有情の身であつて少く覺知あり聊か痛痒を辨ずると雖も、彼の木菌と殊なることなし、大同小異五十歩百歩の間ではないか、所以如何となれば一體に木菌の汝を知らざることを豈に是れ無明に非ざらんや、汝が木菌を知らざること全く以て同じ、畢竟無明の雲霧に掩はれて真如の光が隠れて居るからである。是に依て一相平等の中に於て有情無情の隔てあり、無差別法中に於て依報正報の品が分れるのである。然るに既に能く若し自己を明めて自己の本體そのまゝに蓋天蓋地また第二人なきことを徹底したならば、何をか有情といひ何をか無情といはん、古來今に非ず過去も現在も未來もあるべきではない。根境識に非ず我が六根と他の六境と其根境の間に起る眼耳鼻舌身意の六識もあるべきではない。己に無明も煩惱もないに由て其の煩惱を絶滅せしむる所の能斷の修證もいらねば本より所斷すなはら斷ぜらるべき迷もない、結局此の一切の諸法は自作なく他作なし、都て誰が造作したといふものではない、此點に於て大に須らく身心脱落して見る

べし、脱落といふは繫縛を離れて自由を得ることである、凡夫は常に身に繫縛せられ心に繫縛せられ、何事にも自由を缺き障礙を受けるのである、一たび身も心も一切の繫縛を脱落して其後に始めて以て自由を得ることが出来るのである。

徒に僧形となるに誇り、猥りに塵家を出しに止まること勿れ。設ひ水難を免ると雖も、火難に煩ひぬへし。設ひ塵勞を破り去るとも、佛に在ても又免れ難し。何に況や是の如くならざらん人の、物に隨ひ他に迷ふ、輕毛の如く浮塵に同くして、東西に馳走し朝野に昇降して足實地を踏まず、心實處に到らざらん類、只一生を賺過するのみに非ず、亦累世を虚く過しもてゆかん。知らずや昔より今に及ぶまで曾て相錯らず、曾て隔てなきことを。汝未だ有ることを知らず。故に徒に浮塵となる。今日若し盡却せずんば何れの時をか待たん。適來の因縁を演へんとするに卑語あり聞かんと要すや。

惜哉道眼不清白。惑自酬他報未休。



然るに若し徒に僧形となるに誇り猥りに塵家を出しに止まり子細に參究して道眼清明に到らざる限りは設ひ水難を免るゝとも、亦火難に煩らふやうなものである。古人が出家入寺亦家といふて誠められたこともある、設ひ塵勞を破り去て悟りの境界に到り得ても、宿世の業報の免がれ難いことであつて、佛に在ても又免れ難く佛の九惱といふが如きことも有る。何に況や是の如くならざらん人すなはち凡庸なる者が物に隨ひ他に迷ふ、自己の識見は少しもなく學問しても修行しても何の見込も立たず、輕毛の如く浮塵に同く、種々様々に狂ひ迷ひ、諸方の叢林だの學寮だのと東西に馳走し、又は名聞利養を獵り求めて朝野に昇降して、足實地を踏まず心實處に到らざらん類、只一生を賺過するのみに非ず、亦累世を虚く過しもてゆかん。此中に賺過とある賺の字は重賣なりとも市物失實ともあつて、商賣に虚偽のある姿である、今は一生を眞面目に送ることが出来ぬといふことである。知らずや昔より今に及ぶまで曾て相錯らず曾て隔てなきことを、是の如き必然の道理決して間違つたことはい、然るに汝未だ此の必然の眞理有ることを知らず故に徒に浮塵となる、今日現在の一生の間に於て此の業累の本源を盡却せずんは何の時をか待たん。古人も己に此身今生に向て度せずんは更に何れの生に向てか此身を度せんと言はれてある。太祖は例の如く適來の因縁を演べんとするに卑語あり聞かんと要すやとあつて、惜いかな道眼清白ならず、自に惑ひ他に酬いて報未だ休せず、此頌は誠に讀て

字の如く少しも辯を要するところもないやうに思はれる。



第十七章

第十七祖僧伽難提尊者。因羅喉羅多。以偈示曰。我已無我故。汝須見我我。汝既師我故。知我非我我。師聞心意豁然。即求度脫。以上本則以下太祖の御提唱常の如くである。

師は室羅筏城。寶莊嚴王の子なり。生れながらにして能く言ふ。常に佛事を讚す。七歳にして即ち世樂を厭ひ、偈を以て其父母に告て曰く、稽首大慈父。和南骨血母。我今欲出家。幸願哀愍故。父母固く之を止む。遂に終日食せず。乃ち其家に在て出家するを許す。僧伽難提と號す。復沙門禪利多に命じて之が師たらしむ。積で十九載。未だ嘗て退倦せず。師毎に自ら念言すらく、身

王宮に居す。胡ぞ出家とせんと。一夕天光下る。偶一路の坦平なるを見て覺えず徐かに行く。約十里許にして大巖前に至る。石窟あり乃ち中に燕寂す。

第十七祖の尊者は印度の室羅筏城の寶莊嚴王の子である。生れながらにして能く言ふ且つ常に佛事を讚す、誠に宿因の勝れたる人であつたと見える。七歳にして世樂を厭ひ偈を以て其父母に告て曰く稽首大慈父、和南す骨血の母、我今出家せんと欲す、幸に願くは哀愍の故にと願ふた。本より國王の子のことであるから世間の榮耀榮華に何一つ不足はない、其れを捨て、出家を願はれたは眞の發心出家である。けれども父母固く之を止めて出家を許さない、然るに尊者の決心も亦甚だ堅固である、遂に終日食せず出家を許されざれば餓死する覺悟である、父母も已むを得ずして然らば其家に在て出家するを許す、王宮に居る其儘で出家の修行をするといふことになり、其の名を僧伽難提と號し父王の命に依て沙門禪利多といふ者が其師匠といふことになつた。かくて十二年の間王宮に於て出家の修行をしたのであつたが、師毎に自ら念言すらく、其身は現に王宮に居す胡ぞ出家とせんと切に眞の出家とならんことを求められた。然るに或日の夕刻に天光下る一道の光明が照り輝いて一路の坦平なるを見た、覺えず其路を徐ろに行くこと約十里ばかりにして大巖前に至る、其處に石窟あり坐禪するに都



合よく思はれたに由て其石窟に投じて中に燕寂すと初めて年來の志を達して山林幽寂の地に眞の出家の修行をすることとなつた、燕寂の燕の字は安息の義とあつて燕居だの燕樂だのと續く字である。

父王既に子を失て即ち禪利多を擯し、國を出て其子を訪尋せしむれども所在を知らず。十年を経て羅喉羅多尊者行化して室羅筏城に到る。河あり名を金水と曰ふ。其味殊に美なり。中流に復た五佛の影を現す。尊者衆に告て曰く。此河の源凡五百里。聖者僧伽難提と云あり。彼處に居せり。佛記したまふ一千年の後當に聖位を紹ぐべしと、語り已て諸學衆を領じ流に浜て上る。彼處に至て僧伽難提を見るに、安坐入定せり。尊者衆と之を伺ふ。三七日を経て方に定より起つ。

さて室羅筏城に於て父王は既に子を失てしまはれたので、其の師として置いた禪利多を擯し、免職の身とならせて、更に國を出て其子を訪尋せしむれども所在を知らず、石窟の中に坐禪入定して居ると知るべきやうもない、かくて十年を経て後の事であつた。第十六祖の羅喉羅多尊者が行化して室羅筏城に到られた、其地に金水といふ河があつて其水の味殊に美なり、而して其中流に五佛の影を現す、五佛といふこと密教には五智の如來といふこともあるが、今は只五體の佛像の影といふ意味かと思はれる。羅喉羅多尊者衆に告て曰く此河の源にさかのぼること凡五百里ほどの處に聖者僧伽難提と云ふあり彼處に居せり、此聖者の事に就ては曾て佛が記蒞して置かれた滅後一千年の後に當に聖位を紹ぐべしとの事である。そこで尊者は諸學衆を領し流に浜て上る五百里を経て彼處に至て僧伽難提を見るに、彼の石窟の中に安坐入定して居て言ふことが出來ぬ、己むを得ず三七日を経て方に定より起つて待つて居られた。

尊者問て曰く汝身の定か心の定か。師曰く身心俱に定なり。尊者曰く身心俱に定ならば何ぞ出入あらんと。實に身心もし定なりと謂は、何ぞ出入あらんや。若し身心に向て定を修せば是れ尙ほ眞定に非ず。若し眞定に非ずんば即ち是れ出入あらん。若し出入あらば是れ定に非ずと謂ふべし。定の處に向て身心を求ること勿れ。參禪は本より身心脱落なり。何を呼でか身と爲し、何



を呼でか心と爲ん。

羅喉羅多尊者は僧伽難提の定から起たのを見て汝身の定か心の定かと問はれた、師は之に答へて身心俱に定なりと云ふ、尊者は更に身心俱に定ならば何ぞ出入あらんと答められた。先づ此の一間一答を太祖が御提唱なされて若し身心に向て定を修せば是れ尙ほ眞定に非ず、若し眞定に非ずんば即ち是れ出入あらん、若し出入あらば是れ定に非ずと謂ふべし、僧伽難提は身心俱に定であると云ふが、定といふことは身や心の上に向つて修すべきものではない。若しも身や心に向て修するならば其れは眞實の定では無い、眞實の定でないから入定だの出定だのといふことも有る、出入あるやうなものは定では無い。一體に定の處に向て身心を求ること勿れ、眞實の定すなはち參禪といふものは本より身心脱落の境界でなければならぬ。己に是れ身心脱落のところは何を呼でか身と爲し何を呼でか心と爲んと此れが太祖の御批判である。一體に此の本章の問答は印度の外道の論師の議論の調子で餘程解しにくい、其上更に其間に太祖の御批評が加はるため益々混雜する氣味があるに依て、子細に注意して參究せぬければならぬと思ふ。

師曰く出入ありと雖も定相を失せず。金の井に在るが如く、金體常に寂なり。

尊者曰く若し金井に在り、若し金井を出るに金に動靜なくんば何物か出入せんと。其れ金に動靜あり出處あり入處あらば是れ眞金に非ず。然も猶ほ此道理に通ぜず。師曰く金動靜す。何物か出入と言ふ。金の出入を許す金動靜に非ず。金に動靜なし出入ありといは、猶ほ是れ兩箇の見あり。故に尊者曰く若し金井に在らば出る者金に非ず。若し金井を出ては在る者は何物ぞ。外終に放入せず内亦放出せず。出れば出で盡き、入れば入り盡く。何ぞ井に在り又井を出でん。故に出る者は金に非ず。在る者は何物ぞといふなり。

僧伽難提は第十六祖の身心俱に定ならば何ぞ出入あらんと詰られたるに答へて出入ありと雖も定相を失せず譬へて見やうならば金の井に在るが如く金體は常に寂なりと云ふた、此れは身心を井に譬へて定を金に譬へたのである。第十六祖は更に若し金井に在り若し金井を出るに動靜なくんば何物か出入せん、汝が云ふ通りに金の井に在るが如きものとしても、若し其金の井を出るに動靜がないといふならば何物が井に出入するぞ。之を太祖が批評せられて其れ金に動靜あり出處あり入處あらば是れ眞金



に非ず、元來眞金すなはち本統の定といふものは動靜だの出入だのといふことを離れたものである。然るに僧伽難提は猶ほ此道理に通ぜぬものであるから、更に尊者の言葉に附き廻つて金動靜す何物か出入すと言ふ此言葉に依て金の出入といふことを許して金は動靜に非ずといふことを認められると云ふた。太祖また之を批評せられて金に動靜なし而して出入ありといはゞ猶ほ是れ兩箇の見あり、二邊に滞ほり對待に迷ふて居るのである、故に尊者は若し金井に在らば出る者は金に非ず若し金井を出れば在る者は何物ぞ、此の譬を法に約して云へば若し定が身心の上にあるといふならば、今出るといふは定を出るのでは無い、若し定が身心を離れて出てしまふたといふならば其の身心の上にある者は何物であるぞといふのである。之を太祖が提唱せられて、眞實の定と云ふものは外終に放入せず内亦放出せず元來出入を超越したものである、出入を超越してをるから、亦出入自在であつて、出れば出で盡き入れば入り盡く、出入ともに蓋天盖地である、何ぞ井に在り又井を出でん、故に出る者は金に非ず在る者は何物ぞと尊者が言はれたのであるとのことである。

此理に達せず。師曰く金若し井を出ては在る者は金に非ず。金若し井に在らば出る者物に非ず。此言は實に金の性を知らず。故に尊者曰く此義然らず。實

に定に在て理を通ずるに似たりと雖も、師猶ほ物我の見あり。故に曰ふ彼の理著なるに非ず。然も此義眞實なし。輕毛の風に隨ふが如し。眞實ならざる故に。尊者曰く此義當に墮すべし。師の言に依て謂ふ。師曰く彼義成せず。尊者大慈大悲の深きに依て重て曰く、彼の義成せずんば我義成せり。然れども妄りに無我を解する故に。師曰く我義成すと雖も、法は我に非るが故に。尊者曰く我義已に成ず我れ我なきが故に。實に法皆無我なることを知ると雖も、尙是れ眞實を知らず。師曰く我れ我なきが故に復た何の義を成せん。親く汝を知らしめんとして、尊者曰く我れ我なきが故に汝が義を成すと。

然るに師は尙ほ此理に達せず、故に金若し井を出ては在る者は金に非ず、金若し井に在らば出る者物に非ずと云ふ、定が若し身心を離れてしまふたならば其後の身心は定の身心でない、若し定が身心を離れないとならば其れは出定したのではないといふのである。そこで太祖は此言は實は金の性を知らず未だ眞實の定といふことを會得せざるに由て此様なことを云ふのである。故に尊者は之を遮つて此義然



らずと否定せられた、太祖は此師かつて定に在て理を通ずるに似たりと雖も猶ほ物我の見あり、とかく二邊に滯ほりて絶對の境に達することが出来ない、故に井と金とを二つに見る即ち定と身心とが別物になる、謂ゆる物我の見が離れない。故に彼の理著なるに非ず、著は著明の義である、太祖は此義眞實なし輕毛の風に隨ふが如し、眞實ならざる故に、尊者が此義當に墮すべしと宣告せられたのであると言はれた、墮は負墮の義で汝は議論に負けたぞよと言はれたのである、是れは師の言に依てのことである。斯くの如く尊者の宣告を受けたに就ては僧伽難提も最早や抵抗するわけには往かず、彼の義成ぜずと自白せられた、彼の義といふは前來しきりに出入はあつても動靜は無いと云ふた義が到頭成立たないと自認したのである。羅喉羅多尊者は更に大慈大悲の深きに依て重て曰く彼の義成ぜずんば我義成ぜりと止めをさされた。然れども師は尙ほ妄りに無我を解する故に、我義成ぜりと言はれるけれども法は我に非ざるが故にと云て更に論端を開かれた、相變らず法と我との二見を持ち出されたのである。尊者は之を論された我義已に成ず我に我なきが故にと云はれた、我が義の已に成就したといふものは我れに我がないからのことであらうと云ふのである。然るに師は此れで法法皆無我であることを知り得たわけであるけれども、尙ほ是れ眞實を知らず徹底しないから、我に我なきが故に復た何の義を成ぜん、已に我が無いといふならば義を成ずるといふことが無意義ではないかと云ふのである。そこで尊者は更に親く汝を知らしめんとして、我に我なきが故に汝が義を成ずと示された、汝といはれた其物が果して如何なるものであるかを知らしめんとてのお示しである、我に我がないから汝にも我はない我他彼此すべて泯滅して眞實の義が成立するのである。

實に四大悉く我に非ず。五蘊本より有に非ず。是の如く無我なる所に我あることを少しく思量分別し辨へる故に。師問て曰く仁者何の聖をか師として是の無我を得たる。師資の道の猥りならざることを知らしめん爲に。尊者曰く我れ迦那提婆大士を師として是の無我を證す。師曰く稽首提婆師。而出於仁者。仁者無我故。我欲師仁者。尊者答て曰く我已無我故。汝須見我我。汝若師我故。知我非我我。

そこで太祖は此時の僧伽難提師の境界を批評なされて師は漸やく四大悉く我に非ず五蘊本より有に非ず是の如く無我なる所に我あることを少しく思量分別し辨へるやうになられたと仰せられる。四大五蘊のことは常の如く色受想行識の五蘊皆空にして悉く實體ないといふことは般若心經の通りである。



即ち吾人の身も心も乃至天地萬物も皆悉く假和合にして實體の見るべきものはない、四大といふは五蘊の中の色蘊を更に地水火風の四に分けたのであるといふことも常の如くである。さて是の如くに吾身も吾心も乃至天地萬物すべて皆悉く空寂にして實體なきものであるといふことの確かに會得の出來たのが即ち無我になり得たのである。眞に無我になり得て見れば、自分も無我なれば他人も無我である、見るものも聞くものも無我であれば見られるものも聞かれるものも無我である、さればと云ふて無我のまゝに見るものもあれば聞くものもあるは事實である、是に於て無我なる所に更に我がある、即ち無我の我といふことが出來てくるのである。今僧伽難提師は大に其の道理を會得せられて愈々第十六祖尊者に嗣法すべき機縁が熟してきたので、問て曰く仁者は何の聖をか師として是の無我を得たると其法流の本源を問ひ出した、尊者は其機に應じて師資の道の猥りならざることを知らしめん爲に、我は迦那提婆大士を師として是の無我を證したのであるぞと示された。そこで師は直に偈を以て提婆師に稽首したてまつる而も仁者を出だしたまへり、實に提婆大士は此の無我の師たる羅喉羅多尊者を作り出されたのである。仁者すなはち羅喉羅多尊者は無我なる故に我は仁者を師とせんと欲すと願はれた、尊者は之に答へられて我已に無我なる故に汝須らく我が我を見るべし汝若し我を師とするが故に我の我が我に非ざるを知らんと示された。此の無我の我といふことは今さら事あたらしく云

ふべきことでも無いが、とかく分つたやうで分りにくいことであるから、かやうな所で能く會得して置くが肝心である。一體に我といふことに二つあつて一を假我といひ一を眞我といふ。梵網經に我今廬舍那と云はれたり壽量品に自我得佛來と云はれたやうな時の我といふのは即ち眞我であつた、一切諸法の本體本性其儘のことである。然るに假我といふのは吾人一生一期五十年か七十年の間六根六境の奴隸となつて、我見我慢を起しつゝある所の我である、此の假我に執着して居るのが迷妄の凡夫であつて、此迷妄執着を離れてしまひ、謂ゆる假我を無くしてしまふたのが無我である。然るに此の假我を捨て、無我になつた時が即ち一切諸法平等一相の眞我の顯れてくる時であるから、此の眞我は全く無我の上に現成し來つたものであるゆえ、之を無我の我と名けることもあるのである。今こゝの問答も其の大體が分つて居らなければ、何の事やら一向に合點のゆかぬことになる。仍で今尊者の示された言葉も此の意味で見れば能く分る、我は已に假我の執着が無いに依て汝は我が眞我に契ふて居ることを見るであらう、汝は我が無我を師とするのであるから、我といふのも假我の我では無いといふことを知るであらうと云ふことになる。

實に夫れ眞實我を見得する人は、自己尙ほ存せず。豈に萬法の眼に遮ぎるこ



とを得んや。見聞覺知終に分たず一事一法更に分つことなし。故に聖凡隔てなく師資の道合す。此道理を見得する時乃ち佛祖に相見すとす。故に自己を以て師とし師を以て自己とす。刀斧斫れども開けず。恁麼の道理豁然として契ふ。故に度脱を求む。尊者曰く汝が心自在なり我が繋ぐ所に非ずと。

先づ太祖の御提唱である、實に夫れ眞實我を見得する人、即ち假我を脱して眞我の悟りに達した人であつたならば自己尙ほ存せず豈に萬法の眼に遮ざるを得んや己に無我であるから自己といふものがない、己に自己がなければ之に對する一切萬法といふものが見えたり聞えたりするわけがない。見聞覺知終に分たず一事一法更に分つことなし、自己を執し吾我に着して居ればこそ見聞覺知すべて我が見る我が聞く乃至我が覺知する我が分別するといふことになるので、即ち見るものと見られるものと別になるから、氣に入るものもあれば氣に入らぬものもあり、貪欲も生ずれば瞋恚も起るのであるけれども、今は己に一事一法千般萬端皆更に分つことなし、一切諸法無差別平等の境に達した上には、聖凡隔てなく聖者達の凡夫達の悟りだの迷ひだのといふ隔たりがないに依つて、師資の道合す師匠と弟子との道體が一致冥合することになる此道理を見得する時乃ち佛祖と相見すとす謂ゆる唯佛與佛乃能究竟

盡の眞際に達するのであるから自己を以て師とし師を以て自己とす、謂ゆる入我々入これを永嘉大師は諸佛の法身我が性に入り我が性却て如來に合すと誑はれ、曹山大師は刀斧斫れども開けず如何なる刀劍や斧鉞を以て之を截斷しやうとしても、決して分つことも離すことも出来るものではないと言はれてある。僧伽難提は恁麼の道理豁然として契ふに到つたものであるから尊者に對して度脱を求む濟度解脱せしめたまへと願ふたのである。然るに尊者は汝が心自在なり我が繋ぐ所に非ず、汝は解脱させてくれよと言ふけれども、汝の心は繫縛も解脱も汝の自由である元來汝の心は我が繫縛させたのではないに依つて、汝が自分で解脱するより外に道はないぞといふのである、誰が汝を縛すといふ公案は又後にも出るのであるが、實にすべて自業自得のものである。

語り已て尊者即ち右手を以て金鉢を擎げて、擧て梵宮に至る。彼の香飯を取て將に大衆に齋せんとす。而して大衆忽ちに厭惡の心を生ず。尊者曰く我が咎に非ず。汝等が自業なり。即ち僧伽難提に命じて座を分て同食す。衆之を訝る。尊者曰く汝食を得ざることは皆此に由るが故に。當に知るべし吾と座



を分つ者即ち過去の娑羅樹王如來なり。物を惑で降迹す。汝輩亦莊嚴劫中に已に三果に至りしも、未だ無漏を證せざる者なり。

汝の解脫は汝の自由にせよと言はれたのが即ち尊者の印可であつた。尊者は斯う言はれて直に大神通を現じ右の手を以て金鉢を撃げ擧て梵宮に至り彼の香飯を取て將に大衆に齋せんとす、梵天王の宮中の香飯は人間の凡夫の口に適ふはずがない。大衆忽ちに厭惡の心を生ず、果報の違ふといふは悲れなものである、御馳走とは思はずに却て厭ひ惡む心を起したとある。尊者曰く我が答に非ず汝等が自業なりと、獨り僧伽難提のみに命じて座を分ち尊者と同座させて彼の天の香飯を同食させた、そこで他の一同の衆は之を訝かる、今が今まで石窟の中に入定して居た者が何やら暫らく尊者と問答したと思ふうちに、直に座を分ちて坐せしめられた上に、天の香飯を同食して居る、此れは誠に不思議なことであると疑ふた。乃ち尊者は之を論じなされて、汝等が此の天飯を食することを得ざるは皆此に由るすべて宿世の業報に由ることぞ、今此の吾と座を分てる者すなはち僧伽難提は此れ即ち過去の娑羅樹王如來が物を惑みて其迹を凡夫の姿に降されたのである、實は汝輩も亦過去の莊嚴劫中に已に三果すなはち阿那含果までは悟り得たのであつたけれども、未だ無漏の阿羅漢果を證するに至らなかつた。

のであると、斯う示された。

衆曰く我師の神力は斯れ信すべし。彼れを過去佛と云ふこと即ち竊かに之を疑ふ。師は衆の慢を生ずるを知て、乃ち曰く世尊在せし日は、世界平正にして丘陵あること無く、江河溝洫の水悉く甘美なり。草木滋茂し、國土豊盈して、八苦なく、十善を行じき。双樹に滅を示してより八百餘年、世界丘墟にして、樹木枯悴し、人に至信なく、正念輕微なり。眞如を信せず唯神力を愛すと言ひ訖りて、右の手を以て漸く展て地に入て金剛輪際に至り、甘露水を取り瑠璃器を以て持して會所に至る。大衆皆見て歸伏悔過す。

尊者は懇切に一同の過去の宿因を論されたけれども大衆は尙ほ疑ひが晴れない。我が師羅喉維多尊者の神力は斯れ信すべし決して怪むべきではないけれども、彼の僧伽難提を過去佛の娑羅樹王如來であると云ふに至りては、何だか信じられないと竊かに疑つて居る。其様子を僧伽難提が察知せられて一同の衆が慢心を生じ吾を侮どると知つたから、乃ち先づ一同に向つて言はれた。往昔世尊在世の日に



は世界平正にして丘陵あることなし、皆平坦であつたのみならず、江河溝澗の水悉く甘美なり、すべての水が甘露のやうであつた。艸木滋茂し國土豊盈して八苦なく十善を行じき、八苦は生老病死の四苦と求不得苦と愛別離苦と怨憎會苦と五陰盛苦との八苦、十善は身三口四意三の十善業であることは常の如くである。溝澗の溝はみぞ澗は溝の大なるもの、地平らに國豊かなるは人心の正信に歸し大道の四方に弘通するをいふ。然るに世尊終に婆羅双樹の間に滅を示してより八百餘年このかた世界丘墟にして樹木枯悴し人に至信なく正念輕微なり眞如を信ぜず唯神力を愛すと、佛滅後の淺ましき状態を叱斥された。丘は「をか」墟は丘の大なるもの枯悴は枯れはて、寂寥なるをいふ。世界の都城も墟丘と變じ樹木も枯悴すといふは正法世に行はれず人心の險惡なる貌である。斯く慨歎せられたのは、從前のところに於て無我の眞理を色々と問答せられるのを聞いて居ながらも、其れには少しも耳を傾けず、只天上の香飯を取て來たといふやうな神通力にばかり感服して、終に僧伽難提を輕侮するにも至つたのであるから、先づ神力を示して見せやうと云ふので、僧伽難提は直に右の手を展て地に入れ大地の底の金剛輪際にまで手を伸ばして、甘露の水を取り瑠璃の器を以て持して一同列坐の會所に至られた。此の不可思議なる神通力を見て大衆一同始めて皆歸伏悔過すとある、今も昔もかやうな奇怪なることにのみ迷信が深くて眞實信心を起すもの少ないは誠に歎息すべき次第である。

悲むべし。如來在世より八百年尙ほ是の如し。何に況や後五百歳の今僅に佛法の名字を聞くと、道理如何なるべしとも辨へず。至れる身心なき故に如何なるべきぞと尋ぬる人なし。聊か其道理を得ることあれども護持し來ることなし。設ひ知識ありて大慈大悲の教誡に依て、聊が覺知覺了ありと雖も、或は懈怠に侵されて眞實の信解なし。故に眞實の道人なければ眞實發心する者なし。實に末世の澆運宿業の拙きに依て、是の如きの時分に遭へり。愧ても悔ても餘りあり。

以下まさしく本章の結勸としての御訓誨である、悲むべし如來在世より僅かに八百年にして尙ほ是の如し、何に況や後五百歳の今、正法千年像法千年で二千年が過ぎ、其れから後の五百年間は全たく末法に入つた後であつて、高祖太祖の御出世が丁度其年代に當るのである。金剛經の疏には佛滅後初めの五百歳は解脫堅固、第二の五百歳は禪定堅固、第三の五百歳は多聞堅固、第四の五百歳は塔寺堅固、第五の五百歳は闍諍堅固とある。即ち末世に於ては僅に佛法の名字を聞くと、道理如何なるべしとも



辨へず、至れる身心なき故に如何なるべきぞと尋ぬる人もなし、聊か其道理を得ることあれども護持し來ることなし、設ひ知識ありて大慈大悲の教誡に依て聊か覺知覺了ありと雖も或は懈怠に侵されて眞實の信解なし、眞實の道人なければ眞實發心する者なし、實に末世の澆運宿業の拙きに依て是の如きの時分に遭へり愧ても悔ても餘りありと。此の一段の御訓誨まことに親言の親口より出させたまひしもの、此の太祖の御時代を距ること更に六百年を過ぎたる今日の吾等、實に言語道斷の次第である。

然も諸仁者正法像法に生ぜず。師としても資としても悲むべしと雖も、思ふべし佛法東漸して末法に至て我朝如來の正法を聞くこと五六十年なり。この事初めなりと謂つべし。佛法到る處に興らずといふことなし。汝等が勇猛精進にして志を發し、吾我を吾我とせず。直に無我を證し、速に無心なることを得て、身心の作に拘ることなく、迷悟の情に封ぜらるることなく、生死窟に留ることなく、生佛の綱に結ばるることなく、無量劫來盡未來際會て變易せざる我あることを知るべし。着語に曰く。

心機宛轉稱心相。

我我幾分面目來。

以下太祖の御訓誨は悲歎の中に一縷の慶喜を述べて吾人を激勵したまふ。然も諸仁者正法像法に生ずることを得なかつたのは師としても資としても悲むべしと雖も、思ふべし佛法東漸してから太祖の時代までには已に六七百年を経て、色々なる宗派も開けてあつたにも拘はらず、正法も像法も過ぎてしまふて今や末法に至て始めて如來の正法を聞くことを得たのは、永平高祖のかた僅に五六十年なり、我朝に於て眞實正法を聞くこと此れが初めなりと謂つべし。近世五六十年のかた、京都鎌倉を始めとして佛法到る處に興らずといふことなし、誠に此の遭ひ難き好時節に遭ふたのであるから、汝等が勇猛精進にして志を發し、吾我を吾我とせず、直に無我を證し速に無心なることを得て、身心の作に拘ることなく、迷悟の情に封ぜらるることなく、生死窟に留ることなく、生佛の綱に結ばるることなく、無量劫盡未來際會て變易せざる我あることを知るべしとある、語句平穩にして別に辯解を要するところはない。但此中に身心の作に拘はることなくとある一語まことに修行の用心に尤も大切なることと思ふ。身心の作に拘はるといふは己れの身に行ふところ心に思ふところが、善であらうか悪であらうか罪業にならうか福因にならうかなどと思量分別することである。故に若し此一語を誤解して善惡に



も罪福にも心を用ゐず、任意放縱に直情徑行することとしたならば、之に過ぎたる罪惡はないのである。故に最初のところにては一言一行ことごとく注意に注意を加へて其習ひが性質の如くになり、先づ孔子の謂ゆる心の欲する所に從へども矩を踰えざるの境に到り、更に進んで高祖の謂ゆる諸惡莫作と願ひ諸惡莫作と行ひもてゆく、諸惡作られずなりゆく所に修行力たちまちに現成すといふところまで到り得た時が、即ち身心に拘はるところなきに到り得たのである。此の如く諸惡作られずなりゆく所に悉ち現成し來れる修行力は、盡地盡界盡時盡法を量として現成するなりとある。そこが即ち今のお示しに無量劫盡未來際曾て變易せざるの我すなはち無我の真我あることを知るべしと仰せられた所である。従前は多く卑語ありとばかり仰せられたが、本章には着語に曰くとある。心機宛轉心相に稱ふ、我々幾ばくか面目を分ち來る、人の心といふものは機關のやうなものである、機關といふは車を以て運轉させる器械のやうなものであるから又は機輪ともいふ。すべての機關または機輪は別に運轉して用を作すが如く人の心も亦た見聞覺知等の器械に隨つて常に運轉する邊に於て之を心機と名けられるのである。此の心機の運轉の仕やうに依て、迷ひともなれば悟りともなり、佛ともなれば魔ともなる。今第十六祖と第十七祖との師資の心機が誠に圓滑に健全に運轉したる様子を宛轉と云はれた。互ひに誠に圓滑に健全に宛轉無礙の結果が心相に稱ふとある。心相とは十方法界に充滿瀾淪してゐる

唯一大心の實相、其れにかなふといふは第十六祖の心機と第十七祖の心機とが、互ひに自在無礙に宛轉して法界唯心の實相と隔てがなくなつた、其時が即ち師資面授證契即通の嗣法相續成滿した時であつて、始めて謂ゆる無我の真我が是から縱横自在に神通妙用を顯はすことになるのである。其の様子を我々幾ばくか面目を分ち來ると言はれた、我々は即ち無我の上には顯はれ來るところの真我大我十方三世を悉く我が有とした上の我、此の我が茶に逢ふては茶を喫し飯に逢ふては飯を喫し、渴しては飲み困じては眼る、乃至春になつて花と咲き秋になつては月と照る、皆是れ我々の面目ならざるものはない。



### 第十八章

第十八祖伽耶舍多尊者。執侍僧迦難提尊者。有時聞風吹殿銅鈴聲。尊者問師曰。鈴鳴耶風鳴耶。師曰非風非鈴我心鳴耳。尊者曰心復誰乎。師曰俱寂靜故。尊者曰善哉善哉。繼吾道者非子而誰。即付法藏。

右本章の本則、以下太祖の御提唱例の如し。

師は摩提國の人なり。姓は罽頭籃。父は天盖、母は方聖。嘗て夢むらく大神あり鑑を持すと。因て娠むことあり。凡そ七日にして誕る。肌體瑩として瑠璃の如し。未だ嘗て洗浴せず。自然に香潔なり。生るる時より一圓鑑ありて現ず。尋常此童子に伴なふ。童子常に閑靜を好む。都て世縁に染まず。謂ゆる

此圓鑑、童子坐する時は面前に在り。古今の佛事都て此鑑に浮ばずといふことなし。恰かも聖教に依て照心するよりも猶ほ明かなり。童子若し去る時は此鑑後に從ふこと圓光の如し。然も童形隠れず。童子臥す時は此鑑床の上に天盖の如くにして覆へり。總て行住坐臥此鑑相隨はずといふことなし。

第十八祖伽耶舍多師は摩提國の人で姓は罽頭籃、父は天盖、母は方聖といふた、其母が嘗て或る大神が鑑すなはち一つの鏡を持って來たといふ夢を見て懷妊せられた。常の如く十箇月を経たのではなくて、僅に七日目に誕生した。其子の肌膚が瑩として瑠璃の如し如何にも美しく未だ嘗て洗浴せず自然に香潔とあるから美しいばかりでなく誠に好い香がしたと見える。さて又其子の生れた時に自然に一つの圓鑑すなはち丸い鏡が現じて、常に其の童子に伴ふて居る、童子は常に閑靜を好み都て世縁に染まず、自ら脱塵の風がある。童子坐する時は鑑面前に在り古今の佛事都て此鑑に浮ばずといふことなし、恰かも聖教に依て照心するよりも明かなりとあるから、只古今の歴史上の事がらが見えるばかりではなくて、自然に教義道理の上のことも觀照し得られたものと見える。童子去る時は此鑑後に從ふこと圓光の如し畫にかいた佛像の後光のやうであつた、然も童形隠れず童子の背から鏡が從ふて行くから、



其れだけ童子の身が隠れるかといふに其鏡が透明して居るから形が隠れない、恰かも當今の硝子の障子のやうなものと見える。童子臥す時は此鑑床の上に天蓋の如くにして覆へり、總て行住坐臥此鑑隨はずといふことなし、恰かも彼の第三祖商那和修尊者の生れながらに衣服を着て居られたと同じやうなことで宿因の然らしむる所是の如き靈應の現はれたものと見える。

然るに僧伽難提尊者行化して摩提國に到る。忽ち涼風あり衆を襲ふ。身心悦適すること常に非ず。而して其然ることを知らず。尊者曰く此れ道德の風なり。當に聖者あり出世して祖燈を嗣續すべし。言ひ訖て神力を以て諸大衆を攝して山谷に游歴す。食頃に一峯の下に至て、衆に謂て曰く此峯頂に紫雲あり蓋の如し。聖人之に居せん。即ち大衆と徘徊すること久し。山舎を見るに一童子あり圓鑑を持して直に尊者の前に造る。尊者問て曰く汝幾歳ぞ。曰く百歳。尊者曰く汝年尚ほ幼なり。何ぞ百歳と言ふや。曰く我は理を會せず。正に百歳なるのみ。尊者曰く汝機を善くすや。曰く佛言く若し人生れて百歳なるも、諸佛の機を會せずんば未だ生て一日にして而も之を決了することを得るに若かずと。

然るに僧伽難提尊者行化して摩提國に到る、忽ち一陣の涼風いづくからともなく颯と吹き來て尊者及び隨伴の大衆一同を襲ふた、一同は其風に當りて身心悦適すること常に非ず何とも言ひやうのない好い心もちになつた。而して其然ることを知らず何のために心もちが好くなつたか其理由は分らぬ、そこで尊者が一同に向つて此は道德の風である、必らず此邊に聖者が出世して祖燈を嗣續するのであらう。斯う言ひつゝ神通力を以て大衆一同もろともに山谷の間に游歴させ暫時の間に或る一峯の下に至て衆に謂て曰く此峯に紫雲あり蓋の如し、かならず聖人がこゝに居るであらうと一同で其邊を徘徊すること久し、或る山舎を見るに舎中に一童子あり圓鑑を持して出で來り、直に尊者の前に造る、尊者は汝幾歳ぞと先づ其年を問はれた、童子は百歳であるといふ、いや汝はまだ幼少であるに百歳とは如何なるわけであるかと問はれた、童子我は理を會せずいかなるわけか其理由は知らぬが正に百歳なるのみ、我は理を會せず正に百歳なるのみといふ此の一言實に天地を震撼するの響きがある。そこで尊者は更に汝は機を善くすやと問はれた、此の機の字は後世に禪機とか佛祖の要機とかいふ機の字で、



彼の我は理を會せず正に百歳なるのみといふ即ち是れ尤も力あるの機語である。童子曰く佛言く若し人生れて百歳なるも諸佛の機を會せずんば未だ一日にして而も之を決了することを得るに若かずと經語を引て明かに答へられた。高祖の正法眼藏に徒らに百歳生くらんは恨むべき日月なり、乃至其中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなりと示させられたのも、正しく此の道理を訓誨せられたのである。

尊者曰く汝が手中の者當に何の所表ぞ。童子曰く諸佛大圓鑑。内外無瑕翳。兩人同得見。心眼皆相似。父母子の語を聞いて即ち捨て、出家せしむ。尊者携て本處に至て具戒を受けしめ訖て、伽耶舍多と名く。有時風の殿の銅鈴を吹く聲を聞いて、乃至即ち法藏を付し終に第十八祖に列す。彼の圓鑑童子出家せし時忽然として見えす。

尊者は更に問端を轉じて童子の手中に携へたる鑑に就て其れは當に何の所表ぞと問はれた、此の一面の古鏡は人々各自個々圓成底のものであるけれども、之を實地に光を放ち萬象を照さしむることが大

難事である、童子は明かに之に答へて諸佛の大圓鑑は内外瑕翳なし、兩人同く見ることを得て心眼皆相似たりと、諸佛の四智を説く時には謂ゆる阿頼耶識を大圓鏡智と名くるのである、識を轉じて智と成すといふことは心地觀經等に委く説かれてある通りのことである。此の大圓鑑は内外瑕翳なし一點の疵もなければ少しの曇りもない、内外もなければ向背も無いに依て兩人はあるか千人でも萬人でも花も月も山も川も皆一時に見ることが出来る、其の同く見ることを得るものは悉く互ひに心眼皆相似たりと、現在の諸佛は過去の諸佛と同く見ることを得て、未來の諸佛も亦た過去現在の諸佛と心眼皆相似たりである、是に於て師資同道唯佛與佛の證契も出来るのである。是の如くに童子が無上の法を説くのを聞いて童子の父母が非常に驚ろき、此れは到底吾子として塵中に留め置くべきものでないといふことを覺り即ち捨て、出家せしむ、そこで尊者が直に此童子を携へて本處もとのところへ歸り、具戒すなはち具足戒を受けさせて名を伽耶舍多と命ぜられた。此れから久しく僧伽難提尊者の座下に隨侍して居られたこと、見えるが、或時に風の殿の銅鈴を吹く聲を聞いて、師資の間に問答があり、即ち法藏を付し終に第十八祖に列せらるることになつたのである、其問答が即ち本章の本則であるから、後に委しく提唱せられるのである。法藏といふことは前にも有つたかと思ふが、即ち正法眼藏といふことを略したので、摩訶迦葉以來代々嗣續のことを單に付法藏とばかりもいふのである。さて又こゝ



に不思議なことには彼の童子出家せし時に誕生以來しばらくも身を離れざりし圓鑑は忽然として見え  
ず影を隠してしまふたのである、今までは人間の鏡に類した形を以て顯はれて居たる所の第二義門の  
ものが、是れからは第十八祖の日用光中に一切の行持となつて第一義諦の光明を放つこととなつたの  
である。

實に夫れ人々一段の光明。今圓鑑の内外瑕翳なきが如く悉皆相似たり。彼の  
童子生れてより以來、常に佛事をほめ俗事に混ぜず。明鑑に對し古今の佛事  
を看見す、眞に心眼皆相似たることを知ると雖も尙思ふに諸佛の機を會せず  
故に百歳といふ。設ひ一日なりと雖も若し諸佛の機を會せば唯百歳を超ゆる  
のみに非ず、無量の生をも超ゆべし。此故に終に圓鑑を捨つ。實に是れ諸佛  
の一大事因縁忽がせにせず容易からざること此因縁にても知るべし。實に諸  
佛の大圓鑑を解會す殘る所あるべけんや。然れども尙ほ是れ眞實底に非ず。  
更に何ぞ諸佛の大圓鑑あるべき。又何ぞ兩人同得すべきあらん。又何の内外

瑕翳なきがあらん。何を呼でか瑕翳とせん。心眼とは何ぞ。豈相似たるべけんや。  
故に圓鑑を失す。豈に是れ童子の皮肉を失するに非ずや。然も設ひ所  
見今の如く心眼相隔たらず。兩人同得見と會すとも眞箇是れ兩箇の所見なり。  
更に眞に自己を明むる底に非ず。

以下太祖の御提唱漸く入ればく漸深くなる。先づ初めに實に夫れ人々一段の光明、今圓鑑の内外瑕  
翳なきが如く悉皆相似たり一切衆生森羅萬象皆な一大圓鑑の影像である。彼の童子生れてより以來、常  
に佛事をほめ世俗に混ぜず、明けても暮れても明鑑に對し古今の佛事を看見して直に心眼皆相似て一  
切差別なきことを知ては居るけれども、尙ほ思ふに諸佛の機を會せず居られた。故に尊者から年を  
問はれた時に百歳といふ、若し諸佛の機を會して居られたならば、唯百歳を超ゆるのみに非ず、無量  
の生をも超ゆべし、然るに今は風鈴の因縁に依て一大事を結了せられて見れば、もはや從前唯一の頼  
みとし來つたる所の圓鑑を一撃に擊碎して捨つべき時節に到着したのである。實に是れ諸佛の一大事  
因縁を忽がせにせず容易ならざること此因縁にても知るべし、一大事因縁といふは法華經方便品の金  
言であつて、諸佛は皆佛智見を開示悟入するを以て一大事因縁とするがために世に出現したまふたの



であるといふのである。今夫れ伽耶舍多は童子にして已に諸佛の大圓鑑を解して居る殘る所あるべけんや、大圓鑑に欠くる所なきが如く佛法に於て一點の不足あるべきに非ず、然れども尙ほ是れ眞實底に非ず、何故かといふに若し眞實底ならば更に何ぞ諸佛の大圓鑑などと稱すべき物があらうぞ、又何ぞ兩人同得などいふ、餘計なることがあらうぞ、又何の内外だの瑕翳だのといふ、曲折を要せんや、何を呼ぶか瑕翳とせん、心眼とは何ものぞ、何と相似たりといふや、是の如くに看破し來れば圓鑑果して何か有らん、故に圓鑑を失す豈に是れ童子の皮肉を失するに非ずや、乃ち今圓鑑を失すといふ只是れ童子の皮肉を失したのであつて、童子の骨髓は更に圓鑑の外に在ることを知らねばならぬ。且つ又設ひ所見今の如く心眼相隔たらず兩人同得見と會し來るといふとも畢竟是れ兩箇の所見たるを免がれぬ、苟くも兩箇の見に住し二邊に滯ほる者は決して眞に自己を明むる底に非ず、尙ほ是れ第二第三と言ふべきである。

然れば汝諸人圓相の所見を作すこと勿れ。身の相を作すこと勿れ。大に須らく子細に參徹して急に依報正報一時に破裂し、自己又不了なることを得べし。若し此田地に到らずんば唯是れ業報の衆生、未だ諸佛の機を會せるに非ず。

是の如く懺悔禮謝し、遂に出家受具して、後に僧伽難提に執侍して年を送る。

是の如くなるに依て汝諸人圓相の見を作すこと勿れ、とかくに圓と聞けば直に圓に囚はれ方と聞けば忽ち方に着す、今も此の圓鑑といふに就て直に圓相の見を作して居ては、到底眞實の田地に到ることは出來ぬ。身の相を作すこと勿れ此前後に脱文あるかと思はれるけれども今のまゝにても意旨は明らかに透徹して居る、即ち身心脱落せぬければならぬに依て身の相も心の相も皆離れてしまはなければならぬ。大に須らく子細に參徹して急に依報たる世界も正報たる我が身心も一時に破裂して自己又不了なることを得べし、此の自己又不了といふこと此れ又何より聞きつけぬ語句である、或ひは何かの寫誤か脱文あるのではあるまいかと思はれる。然かし尙ほ意を迎へて之を見れば、已に正報依報皆破裂し盡して上には、自己も他人も亦た有るべきに非ずとの義とも見られる、又不了の二字は自救不了の時と同じく不得の意と見れば自己も亦不可得で謂ゆる身心脱落の意味である、若し此田地に到らずんば唯是れ業報の衆生といふべきもので未だ諸佛の機を會せりと云ふことは出來ぬ。以上は太祖が座下の大衆に對しての御訓誨である。次の是の如く懺悔禮謝しといふから後は伽耶舍多の因縁を示されたので此の間にも何か脱文あるかと思はれるけれども、何れの寫本も皆斯うなつて居て更に考勘の



しやうもない、遂に出家受具し後に僧伽難提に執侍して年を送ると本章の本則にうつる。

有時風の殿の銅鈴を吹く聲を聞いて、尊者師に問て曰く鈴鳴るか風鳴るか云々。此因縁實に子細にすべし。尊者終に鈴を見ず風を見ずとも、更に此何事を知らしめん故に、恁麼に鈴鳴るか風鳴るかと問ふ。是れ何事ぞ。風鳴るを以て解會すべからず。尋常の風鈴に非ず。即ち堂殿の角に掛たる鈴なり。鈴鐸といふ今南都堂閣等に悉く皆掛け來り。此を以て人家と堂舎と辨別す。北京と爲てより初つかたは堂舎に鈴鐸を掛くと雖も、近代は土風すたれて義なし。然れども西天の義も是の如し。此鈴鐸を風の吹く時此公案ありき。然も師答て曰く、風に非ず、鈴に非ず、我心鳴るのみと。實に知ぬ都て一塵の邊表を出し來ることなし。之に依て風鳴に非ず鈴鳴に非ず。又鳴と思へば即ち鳴なりと。恁麼の所見も尙ほ是れ心俱に寂靜に非ず。之に依て乃ち曰く我心鳴るなりと。

伽耶舍多の修行久く年を経て時節因縁漸く熟しての後の事と見える。有時風の殿の鈴を吹く聲を聞いて、僧伽難提尊者が師に問て曰く鈴鳴るか風鳴るか云々と、太祖之を提唱せられて曰く、此因縁實に子細にすべし尊者に在ては元來鈴を見ず風を見ず風にも鈴にも用はない、但此何事かを伽耶舍多に知らしめんための故に恁麼に風鳴るか鈴鳴るかと問はれたのである。抑も是れ何事ぞ、此れは決して風鈴を以て解會すべき事ではない、是れ實に尋常の風鈴の話と思ふてはならぬ。一體に此の鈴といふものは處々の寺院の堂殿の角に掛たる鈴のことと之を鈴鐸といふ、今南都すなはち奈良の興福寺東大寺あたりの堂閣等に悉く皆掛け來り、此を以て人家と堂舎と辨別するほどのことである。北京すなはち今の京都と爲てより初めつかたは堂舎に鈴鐸を掛けてあつたが、近代は土風すたれて其義もなくなつた然れども曾て西天に在ても堂舎の角に鈴鐸を掛ける風義があつたに依て、其鈴鐸を風の吹く時に其れを機縁として此公案が起つたのである。即ち風と鈴とに就て此問が起つたけれども、然も師は答て曰く風に非ず鈴に非ず我心鳴るのみと、風鈴の問題が更に心の問題となつた、實に知りぬ都て一塵の邊表を出し來ることなし、邊表といふは邊際とか表裏とかいふことで即ち物に限りのあることである。然るに今は無邊無表絶對無限の眞際であるから、塵ほども邊表を出だし二邊に涉り對待に陥るべきではない、之に依て風鳴に非ず鈴鳴に非ず、又我心鳴るのみと云ふたからとて、鳴と思へば即ち鳴なり



なごといふが如き。慙廢の所見では尙ほ是れ心俱に寂靜といふわけには到らぬ。故に尊者は更に我が心鳴ると云へる。其心とは果して何物ぞと再問せられた、師は是に於て始めて俱に寂靜の故にと決定せられたのである。俱に寂靜といふは元來風といふも鈴といふも乃至心といふも皆天真寂靜にして動搖のないものである。然るに其の俱に寂靜のまゝに風吹けば鳴る、鈴鳴れば聞く、吹くに吹くの相なく鳴るに鳴るの相なく、而して之を聞いて聞くの相なければ天下泰平國土安穩、之を名けて俱に寂靜といふのである。之に依て乃ち曰く我心鳴なりと、若しも伽耶舍多の心寂靜ならざるに依て我心鳴のみと答へられたと思ふたならば其れは甚しき誤りとなる、其の事は次下の御提唱に於て窺ふべきである。

此因縁を聞きて人皆邪解す必ずしも風の鳴に非ず。唯心鳴と覺ゆと。故に伽耶舍多是の如く言ふと。若し天真天然として一切發せざらん時、豈に鈴鳴に非ずともいふべけんや。故に我が心鳴るなりと。伽耶舍多より六祖に到るまで時代遙に隔たれり。然れども更に隔たらず。故に風幡動に非ず。仁者心動なりといふ。今汝諸人も其心地徹通する時三世本より隔たらず。證契古今に

連綿たり、何の同異を辨ぜん。尋常の所見に辨ずること勿れ。風鳴に非ず鈴鳴に非るを以て始て知るべし。此何事を知らんと思はば、須らく我が心鳴るなりと知るべし。其鳴る姿は山の突兀と高く、海の平沈と深きが如し。草木森々たるも、人人眼目の分明なるも、心の鳴る姿なり。然れば聲の鳴ると思ふへからず。聲も又心の鳴るなり。四大五蘊一切萬法都盧皆是れ心鳴なり。此心都て鳴らざる時なし。故に遂に響を帯びず。更に又耳を以て聞かるゝに非ず。耳是れ鳴が故に俱に寂靜といふ。

此因縁を聞いて人皆邪解す、とかく何事にも都て言葉に附き纏はるゝ故に心鳴のみと聞けば直に風の鳴に非ず唯心鳴と覺ゆ、其れ故に伽耶舍多が是の如く言つたのであるとの邪解に涉る、能く子細に思量して見よ若し天真天然に一切發せざらん時に於ては鈴鳴に非ずといふの語も亦た有るべきに非ず、何ぞ我が心鳴るなりといふべき道理があらうぞ、此前後にも脱文あるかと思はれる。此因縁に就て思ひ出されるのは曹溪六祖の風幡の因縁である、第十八祖の伽耶舍多より第三十三祖の曹溪六祖に到る



まで數百年間の時代遙に隔たれり、世俗の歴史上の時代は遙に隔たれども佛祖相承の命脈に於ては一刹那も更に隔たらず、故に六祖の時に於て又風幡動に非ず仁者心動なりといふの提示を聞くことが出来たのである。此れは六祖大師が廣州の法性寺に居られた時、或る僧二人が風のために幡が吹き動かされるを見て此れは風が動くのであるいや幡が動くのであると議論して居るのを聞いて、六祖が之を裁判せられ其れは風動に非ず幡動に非ず汝等の心動なりと言はれたる一段の因縁である。此の古今一轍の心動の因縁如何に之を參究すべきであるぞ、今汝諸人も其心地徹通する時三世本より隔たらず、伽耶舍多と六祖との如く證契古今に連綿として同異の辨すべきはない、故に此の一段の因縁は決して尋常の所見に辨ずること勿れ、要する所は風鳴に非ず鈴鳴に非ずと云ふを以て始て知るべきである。其れは何事を知るのであるかといふに須らく我が心鳴るなりと知るのである、然らば其心鳴とは如何なることかといふに其鳴る姿は山の突兀と高く海の平沈と深さが如し、草木森々たるも人々眼目の分明なるも皆是れ心の鳴る姿である。故に鳴るといふても聲の鳴ると思ふべからず、尤も其聲の鳴るのも又心の鳴るのである、四大五蘊一切萬法都盧皆是れ心鳴なり此心都て鳴らざる時なし、故に此心鳴は遂に響を帯びず響を帯びざる故に耳を以て聞るゝに非ず、其實は其聞くといふも是れ心鳴である、耳是れ鳴が故に蓋天盖地皆是れ心鳴なる時一切萬法俱に寂靜といふのである。

恁麼に見得する時、總て萬法出頭の處なし。故に山の形なく海の形なく更に一法の形貌を帯するなし。恰も夢に蘭舟を浮へ滄溟に行くが如し。竿を揚て波瀾を分つも、舟を留めて水勢を諳んずるも、浮ぶ空なく沈む底なし。更に何の山海の外に立すへきかあらん。更に何の自己の船中に游戲するかあらん。故に恁麼に指説す。眼あれども聞くことなく、耳あれども見ることもなし。故に六根互融すと謂ふべからず。六根の帯すべきなし。故に俱に寂靜なり。取らんとするに六根なく、捨てんとするに六境なし。根塵共に脱し心境兩つながら共に忘す。子細に見れば脱すべき根塵なく泯ずべき心境なし。眞箇寂々にして、同異の論に非ず。内外の情に非ず。

恁麼に見得する時總て萬法出頭の處なし、十方法界只此の心鳴となり盡したる時には心鳴の外に、別に一法の見るべきものは無い、故に山の形なく海の形なく更に一切の形貌を帯するなし、之を譬へて見れば恰も夢に蘭舟を浮へ滄溟に行くが如し蘭舟といふは潯陽江の近處に木蘭といふ木が多くある其



木を以て造りたる舟を蘭舟といふ、小さい美しい游山玩水の輕舟と見ゆる。其様な舟に乗て渺々たる  
 滄海を渡る、竿を揚て波瀾を分つと動かして見ても、又舟を留て水勢を諳んずると靜かにしても、結  
 局浮ぶべき空なく沈むべき底もない、其外更に何の山海の立すべきかあらん、更に何の自己の船中に  
 游戲するかあらん、唯是れ一場の夢何を呼でか舟となし海となし將た自己と作すべきぞ、故に恁麼に  
 指説すとは前の心鳴の眞際に萬法の立すべきなきの指説である。是に至りては眼あれども眼處に聞く  
 ことなく耳あれども耳處に見ることもなし、されば六根互融すとも謂ふべからず、元來六根の帶すべ  
 きなきに依て俱に寂靜であるから取らんとするに六根なく捨てんとするに六境なし、之  
 を根塵共に脱し心境兩ながら共に忘すといふのであるが其實子細に見れば脱すべきの根塵なく混すべ  
 き的心境もない。眞箇寂々にして同異の論に非ず内外の情に非ず、是に至りては全たく曾て諸佛の大  
 圓鑑に於て兩人同く見ることを得るとか内外瑕翳なしとか云ふが如き程度ではなくつたのである。

實に恁麼の田地に到る時、即ち諸佛の法藏を受持して正に佛祖の位に排列す。  
 若し是の如くならずんば設ひ萬法不錯と會すとも猶是れ自己を存し他を談じ  
 て遂に法々隔歴す。若し隔歴せば何ぞ佛祖に即通せん。恰も空裏に界障を築

くが如し。空豈に礙ゆべけんや。自ら界障を作すのみなり。若し界畔一度破  
 る、時何を内外とせん。此に到て釋迦老子も始めに非ず。汝諸人も亦終りに  
 非ず。都て諸佛の面目なく、諸人の形貌なし。是の如くなる時恰も清水波濤  
 をなすが如く、佛祖出興しもてゆく。是れ増に非ず減に非ずと雖も、水流れ  
 浪激しもてゆかん。然れば子細に參徹して恁麼の田地に到り得へし。

伽耶舍多は久しく僧伽難提に執持して、實參實究の上に於て實に恁麼の田地に到られた、其時即ち諸  
 佛の法藏を受持して正に第十八祖の位に排列せられたのである。若し是の如くならずんば設ひ萬法不  
 錯と會し諸法住法位と悟り山は是れ山水は是れ水と道ひ得るとも、猶是れ自己を存し他を談じて遂に  
 法法隔歴するに到るのである乃ち口に玄妙を談ずるも胸中は依然として自他の相を存するから見聞の  
 法々皆な隔歴して畢竟自己を繫縛し去ることは免れぬ。若し隔歴して兩箇相對し二物相待つやうなこ  
 とであつたならば、何ぞ佛祖に即通せん、斷じて佛祖の心印を證得することは出来ぬ。其れは恰も空  
 裏に界障を築くが如きものである、設ひ如何なる伎倆を以てしても空を礙へるわけには往かぬ、如何  
 にして空中に牆壁を設くることが出来やうぞ、其れは唯自ら空中に界障を作つたと思ふだけのこと



過ぎぬ、其の自己の心中に築いた界障なれば一度破る、時元來空であるその何を内外とせん都て是れ蓋天蓋地の一真空のみである。即ち各自其心の隔を取除いた時、釋迦老子も始めに非ず汝諸人も亦終りに非ず、釋迦老子に在ても別に諸佛の面目なく汝等に於ても別に諸人の形貌はない、是の如くなる時恰も清水波濤をなすが如き者である、水が澄みわたりても波立ちても増しもせねば減りもせぬ、増さず減らず其儘に澄みもすれば濁りもする。乃ち佛祖出興してもゆくも是れ増に非ず減に非ず、減に非ず増に非ざるまゝに水流れ浪激してもゆく、此の道理子細に參徹して始めて以て恁麼の田地に到り得ることが出来るのである。

曠劫以來及び未來永際。且く界畔をなして三世を排列すと雖も、總に從劫至劫唯だ是の如し。這箇明白の本性を會得せんに、皮肉を以て煩ひ、身の動靜を以て辨ふべきに非ず。都て此田地身心を以て知るべきに非ず。動靜を以て辨ふべきに非ず。子細に參徹し自休自歇し自ら承當して始めて得べし。若し恁麼に明めずんば徒に十二時中身心を擔ひ持ち來らん。恰も重擔を肩に置くが

如く、身心遂に安かるべからず。若し身心を放下して心地空廓々地にして最も平生なることを得ん。然も是の如くなりと雖も、適來の因縁心鳴る所を道得して明め得ずんば、諸佛の出興をも知らず。衆生の成道をも知らず。故に心鳴を道得せんに、卑語を付けんと思ふ。聞かんと要すや。

寂寞心鳴響萬様。 僧伽伽耶及風鈴。

人々各自迷情の然らしむる所に依て曠劫以來及び未來永際、界畔なきところに界畔をなして過去現在の未だの未來だのと三世を排列し時劫に隔をつけて居るけれども、法性眞如の本體から見るときには總に從劫至劫唯だ是の如く人々具足個々圓成底のものである。這箇明白の本性を會得せんに、皮肉を以て煩ひ身の動靜を以て辨ふべきに非ず、此の幻化身を執して居ては皮肉に礙られ動靜に役せられて無罣礙の安心を獲得することは出來ぬ。此の赤肉團を如何やうにしたからといふても、都て此田地に到るには身や心を以て知るべきに非ず謂ゆる身心脱落でなければならぬ。又動靜を以て辨ふべきに非ず謂ゆる動靜二相了然不生の境に到らなければならぬのである。實に能く子細に參徹し自休自歇し自ら承當して始めて得べし、休歇のことは太祖の坐禪用心記の結勸に石霜和尚の七去を擧示せられて



ある、承當といふことに就ては高祖の學道用心集に直下承當の事といふ一章がある、孰れも就て拜觀するが宜しい。若し恁麼に明めずんば徒に十二時中身心を擔ひ持ち來らん、其れも身のため此れも身のため、嬉いにも心動き悲いにも心動き、身や心の奴隸となつて一生を送る恰も重擔を肩に置いて旅行するやうなものである。身心のためと思ふのが却て身心遂に安かるべからず、若し身心を放下して身にも心にも一點の拘はる所なきに到らば、始めて以て心地空廓廓地にして尤も平生なることを得ん、廓々空洞の貌即ち差別の見を離却したる心境である、平生とは取捨の念に驅られず迷悟の情に煩はされず、安穩無爲の境界である。然も是の如く心地空廓にして平生なることを得たりとしても、尙ほ適來の因縁すなはち心鳴る所を道得して明め得ずんば、諸佛の出興する所以も知らず、衆生の成道するわけも知らずに終るであらう。就ては今その心鳴るを道得せんに卑語を付けんと思ふ聞かんと要すやとあつて、例の如く七言二句の着語をなされた。寂寞たる心鳴響萬様、僧伽と伽耶と及ひ風鈴と、寂寞といふは法性真如の本體本性常住不變にして寂靜なる姿、心鳴は其の寂靜なる體性が縁に隨ひ感に赴いて森羅萬象と活動する有様、其活動の山となり川となり草木となり禽獸となる様子を即ち響萬様と言はれた、中に就て今此の因縁に於ては、其心鳴が僧伽難提と現はれ伽耶舍多と現はれ又風となり鈴となつたのである。要するところ十方三世の一切諸法皆悉く寂寞たる心鳴の響ならざるものは無

い、此の響は耳を以て聞くべきでは無い六根門を閉却し去て始て之を聽得することが出来る。洞山大師の無情説法の話も此の玄旨より發したものである。要するに徹底寂靜の三昧に安住する時法界總に寂靜となる、その大寂靜裏に雲雷の如き響あることを知るべきである。



### 第十九章

第十九祖鳩摩羅多尊者。因伽耶舍多尊者示曰。昔世尊記曰。吾滅後一千年。有大士。出現於月支國。紹隆玄化。今汝值吾。應斯嘉運。師開發宿命智。以上本章の本則、以下太祖の御提唱例の如し。

師は月支國の人なり。姓は婆羅門、昔し自在天人(欲界第六天)たりしとき、菩薩の瓔珞を見て忽ち愛心を起す。墮して忉利(欲界第二天)に生じ、憍尸伽が般若波羅蜜多を説くを聞き、法の勝れたるを以ての故に、梵天(色界)に升り、根利なるを以ての故に、善く法要を説く。諸天尊て導師となす。祖位を繼ぐの時至れるを以て、遂に月支に降る。

師は月支國の人なり、月支または月氏とも書く。翻譯名義集には雪山の西北の國であると云ふから北印度といふ方面の人、四姓の中には婆羅門姓の家に生れた人に見える。此人前世には他化自在天に生れて居つた、自在天といふは三界の中の欲界の第六天といふ處である。其時に或る菩薩の瓔珞の非常に美しいのを見て忽ち愛心を起した。他人の物に愛着した業報に依て同じ欲界の中にも尤も等級の下つた第二天の忉利天に生れた、然るに仕合なことに此の忉利天に於て憍尸伽が般若波羅蜜多を説くを聞くことが出来た。憍尸伽といふは謂ゆる帝釋天のことで帝釋天は欲界の主と謂はれる果報の者であるから、常に佛法をも尊信して般若の説法などをするのである。是の如き因縁に依て其の聞たる所の法の勝れたるの故に、次の生には欲界を離れて更に上界なる色界の梵天に升ることが出来た。本より根機の穎利なものであつたから、兼て帝釋などから聞き得たる所の法要を説く、其れを色界の諸天が聞て大に尊で導師となすに到つた。然るに今は因縁時節純熟して第十九祖たる祖位を繼ぐべきの時至れるを以て遂に月支に降誕することとなつたのである。

十八祖化度して月支に到る。一の婆羅門の舎に異氣あるを見て尊者將に彼舎に入らんとす。師問て曰く是れ何の徒衆ぞ。尊者曰く是れ佛弟子なり。師佛



號を聞て心神悚然として戸を閉づ。尊者良久して其門を叩く。師曰く此舍に人なし。尊者曰く無しと答る者は誰ぞ。師此語を聞て是れ異人なりと知る。遽かに關を開て延接す。尊者曰く昔し世尊記して曰く、乃至宿命智を發す。此因縁須らく子細にすべし。

第十八祖伽耶舍多尊者が化度して月支國に到られ、或る一の婆羅門の舍に異氣あるを見て、尊者將に彼舍に入らんとす、此の婆羅門が即ち鳩摩羅多師の宅であつた。師は今突然に尊者の入り來るを見て宅の内から聲をかけて是れ何の徒衆ぞと問はれ、尊者が之に答へて是れ佛弟子なりと云ふを聞て、其の佛弟子とある佛號を聞て心悚然として怖れた様子で、直に戸を閉ち尊者の入り來るを拒んだ。そこで尊者良久と暫時その氣を抜いて更に其門を叩く、師は之に應じて此舍に人なしと云ふ、自から取次に出て拙者は不在で御座ると云ふたやうなもの、是れ又一大公案である。乃ち尊者は其の人無しと答ふる者は誰ぞと推問せられた、鳩摩羅多は此語を聞て是れ異人なりと知る、遽かに關を開て延接すと師資初て相見せられた。そこで伽耶舍多尊者は徐ろに往昔釋迦如來が記誦せられて吾滅後一千年に當り大士あり月支國に出現し玄化を紹隆すと仰せられてある。然るに今汝吾に値ふ斯の嘉運すなはち如來の

記前キゼンに應ずるのであるぞと示された、鳩摩羅多は此語を聞て忽ち宿命智を發したといふのが即ち本章の本則である。以下太祖の御提唱、先づ第一に此因縁須らく子細にすべしとの御訓誨である。

名字道を明らめ、若しは生死去來眞實の人體と明むとも、自己本性の虛明靈廓なることを明らめずんば諸佛の所證を知らず。故に菩薩の放光を見て驚き、諸佛の相好を見ても愛すべし。故如何となれば貪瞋痴の三毒未だ免かれざるが故に。今師の往因を見るに、愛に依て退墮して切利天に下る。然も宿因に依て帝釋の說法に遭て梵天に升起、月支國に降生す。積功累徳空しからず。終に十八祖に遇て宿命智を發す。

設タトひ一往は名字道を明らめ若しは生死去來眞實人體と明むとも、自己本性の虛明靈廓なることを明めずんば諸佛の所證を知らずとある。名字道といふは天台の教相に六即を談ずる中に名字即といふことがある、其れは佛經祖釋などの上に現はれて居る名文字句又は知識の講說などを聞て、一往吾は諸佛と同體であるといふことを合點した時其れが其儘に即心成佛の一部分に當るといふ意味である。又



生死去來眞實人體といふは祖師門下の常套語であつて、吾人が六道四生に生死去來する其儘に本來本性天真法爾の法身佛であると會得するのである。是の如く一往の道理や知見を以て吾は是れ此儘に佛であるなど、自覺したつもりであつても、更に眞實に自己本性の虛明靈廓なることを明めずんば諸佛の所證を知らず、譬へば如何ほどに氷冷火熱の道理を解了したからといふても、一たび實際に氷に觸れ火に接した上でなくては、眞に冷煖自知了つたものと同道唱和することが出来ないやうなものである。未だ眞實に佛菩薩の境界を徹見し得ない者は、僅かに菩薩の放光を見ても驚き、諸佛の相好を見ても愛す、此の或は驚き或は愛すといふは尙ほ是れ眞實に貪瞋痴の三毒未だ免がれざる故である。現に今此鳩摩羅多師の往昔の宿因を見るに、或る菩薩の瓔珞を見て其の美しさに愛着した其愛に依て退墮して忉利天に下生したといふのである、愛着の恐るべきは此の通りである。然も又他の勝れたる宿因に依て帝釋の説法に遭て梵天に上生することが出来、今度は諸天の爲めに法を説て度脱の因縁を結ばせ、更に如來の記莖に應じて月支國に降生することになつた、其間の積功累徳空しからず因縁時節純熟して終に第十八祖に遇て宿命智を發することになつたのである。

謂ゆる宿命智とは、尋常過去を知り未來を知ることと思へり。是れ何にかせ

ん。唯本來不變の自性聖凡なく迷なきことを看得すれば、百千の法門無量の妙義總に心源に在り。故に衆生顛倒も諸佛成道も自己方寸の中に在り。全く根塵の法に非ず。心境の相に非ず。此に到て何をか古とし何をか今とせん。何れか是れ諸佛何れか是れ衆生、一法の眼に遮るなく、一塵の手に觸るるなし。但虛明一片にして廓落無際なるのみなり。即久遠實成の如來、不昧本來の衆生なり。是の如く悟り知る時も増さず。是の如く知らざる時も減ぜず。久遠劫來恁麼なりと覺觸するを宿命智を發すと謂ふ。

以下宿命智の御提唱である、宿命智といふは謂ゆる六神通の中の一つである、又三明といふ時には其中の宿住明といふのが同じことである、能く神通の力を以て過去の事も未來の事も明かに知ることが出来るといふのである。然るに今こゝで鳩摩羅多師が宿命智を發したとあるのは其は世に謂ゆる宿命智の事ではない、世に有りふれた尋常過去を知り未來を知るといふが如きものは是れ何にかせん、第十九祖たちの資格に於て何の詮もない。今の要する所は唯本來不變の自性謂ゆる常住佛性の上には



聖凡なく迷なきことを看得す、迷といふ字の下に悟といふ字も有たのを寫傳の間に脱漏したものと  
 思はれる。是の如く自性を看得すれば百千の法門無量の妙義、總て此の心源すなはち本來不變の自性  
 の上に備つて在る、即ち衆生顛倒して六趣四生に輪轉するといふのも、又諸佛成道して三身四智を具  
 足するといふのも、悉く自己方寸の中なる不變自性に外れたものはない、故に此自性といふものは全  
 く六根六塵の間に於て見るとか聞くとかいふ所の法に非ず、即ち吾が心と他の萬境との間に出没する  
 諸相をも離れたものである。元來不變のものであるから此に到て何をか古とし何をか今とせん、又何  
 れか是れ諸佛、何れか是れ衆生と分別すべき、實に一法の眼に遮るなく一塵の手に觸るゝなし、然ら  
 ば果して如何なるものかといふに但虛明一片にして廓落無際なるのみなり、虛明といふは形も影も無  
 い姿、廓落といふは一切の障礙を離れた貌、十方法界に充滿して居るから無際である、此れが即ち吾  
 人各自の自己の本性すなはち自性の姿である、之を名けて或時は久遠實成の如來とも曰ふ、又は本  
 來の衆生とも曰ふのである。久遠實成といふは久い遠い無始劫の大昔から已に眞實に成就してある  
 といふことである、人々各自の自性の本佛は實に是の如きものであると是の如く知る時も此の自性は  
 別に一塵も増しはせぬ、又是の如く知らざる時も敢て一毛も減りはせぬ、即ち久遠劫來恁麼なりと覺  
 觸するを宿命智を發すと謂ふのである、彼の世に所謂三明六通の中の宿命通とか宿住明とかいふもの  
 と同じやうに思ふてはならぬぞといふのである。

若し此田地に到らずんば、徒に迷悟の性情に亂され、去來の相に移され、遂  
 に自己あることを知らず。本心錯らざることを明めず。故に諸佛をして煩は  
 しく出世せしめ、祖師をして遙かに西來せしむ。出世の本懷西來の本意、只  
 此事の爲なり更に他事に非ず。須く子細に用心して靈々として不昧、明々と  
 して不藏なることを知るべし。本來一段の光明あることを知るを宿命智と謂  
 ふなり。今日又卑語あり聊か此子の理を通ぜんと思ふ。大衆聞かんと要すや。

推倒宿生隔歷身。而今相見舊時漢。

若し此田地に到らずんば徒に迷悟の性情に亂され、教育家流などに在ては動もすれば性と情との分別  
 を本にして迷は心の相であつて悟は心の性であるといふやうに考へて居るのが多い、其様なことに心  
 を亂されて居ては決して自性を明めることは出来ぬ。又動もすれば去來の相に移される去來といふも  
 生滅といふも畢竟同じ意味で、過去の世から此世へ來たとか、此世から未來の世へ去るとかいふ觀念、



其様なことに心を移されるやうでは、決して眞實の自己あることを知ることが出来ぬ、どうして本心を錯らざるやうに正當に明らめることが出来やうぞ。是の如く淺ましき有様であるのを佛祖が慙れませられて、諸佛をして煩はしく出世せしめ、又祖師をして遙に西來せしむることにもなつたのである。釋迦如來御出世の本懷も達磨大師西來の本意も只此事なり更に他事に非ずと心得て、須く子細に用心して自己本具の光明は無始劫來未來永劫靈々として味まさず明々として藏れざる者なることを知るべきである、是の如く人々各自本來一段の光明あることを知るを今は之を宿命智と謂ふのである。今日又卑語あり聊か些子の道理を通せんと思ふと例の着語二句を示された、宿生隔歴の身を推倒して而今相見す舊時の漢、宿生とは或は宿世に天上界に生を受け或ひは欲界に或ひは色界に、上生したり下生したり色々隔歴と果報に隔たりもあつたが、今は其の隔歴の身を推倒と都べて超脱排除して現在今日舊時の漢に相見することを得た。舊時の漢とは即ち久遠劫來の自己の本性、眞實の主人公、其れに久しく天上人間と生死去來して、疎遠なりしが、今や親しく相遇ふて、第十九祖の祖位に列することになつたと誠に領解し易い頌句である、人々各自其舊時の漢に一日片時も早く相見し了ることを期せねばならぬ。

### 第二十七章

第二十祖闍夜多尊者。因十九祖示曰。汝雖已信三業、而未明業從惑生、惑因識有、識依不覺、不覺依心。心本清淨、無生滅、無造作、無報應、無勝負、寂々然靈々然。汝若入此法門、可與諸佛同矣。一切善惡、有爲無爲、皆如夢幻。師聞、承言領旨、即發宿慧。

以上本章の本則、以下太祖の御提唱例の如くである。

師は北天竺國の人なり。智慧淵冲にして化導無量なり。當時中印度にして十九祖に逢て問て曰く我家の父母素より三寶を信ずれども、而も嘗て疾瘵に縈はる。凡そ營作する所、皆不如意なり。而して我隣家は久く旃陀羅の行を爲



す。身常に勇健にして所作和合す。彼れ何の幸ありて、而して我れ何の幸かある。尊者曰く何ぞ疑ふに足らんや。且らく善惡の報に三時あり。凡そ人恒に仁は天に暴は壽に、逆は吉に義は凶なるを見て、便ち謂へり因果なく罪福虚しと。殊に知らず影響の相隨ふこと毫釐も惑ふことなく、縦ひ百千萬劫を経るも亦磨滅せず。因縁必ず相値ふことを。時に師是語を聞き已て頓に所疑を釋く。尊者曰く。汝已に三業を信ずと雖も乃至即ち宿慧を發す。

第二十祖の闇夜多師は北天竺國の人である、生れつき智慧淵冲にして化導無量なり、淵冲とある淵は深といふ意味、冲は遠いといふ意味で天性甚だ伶俐であつた、従つて其化益を受ける者も頗る多かつた。そのころ中印度に於て、十九祖の鳩摩羅多尊者に逢ふたちなみ平生の疑を問はれた、我家の父母は素より三寶を信ずれども而も嘗て疾瘵に禁はる、瘵は勞とも病とも注す、其れのみならず凡そ營作する所皆不如意で不幸が續く、然るに我隣家は久く旃陀羅の行を爲す、旃陀羅は梵語譯して屠者とも惡人ともいふ印度四姓の中で最下の階級である、故に常に殺生其他惡業ばかり作て居るにも拘はらず身常に勇健にして所作和合すと誠に幸福なる生活を營んで居る、彼れ何の幸ありて彼の如く幸福が

續き、我に何の幸ありて此の如く災害が多いので有りませうかと十九祖に進問なされ、尊者曰く其れは何ぞ疑ふに足らんやと仰せられて更に委しく示された。凡そ善惡の報に三時あり善業にもせよ惡業にもせよ因果の報には順現報受業と順次生受業と順後次受業との三つあり。現世の因が現世に果を見るのが順現報受業、現世の因が來世に報い又は前世の業が現世に報ふのが順次生受業、前世の因が現世を通り過ぎ又現世の業が來世を通り過ぎて第二生以後に果報の現はれるのが順後次受業で之を三時業といふのである。然るに此の道理を知らぬ者は恒に仁は天に暴は壽に逆は吉に義は凶なるを見て便ち謂ふ因果なく罪福虚しと邪解するのが多い、成る程順現報受業だけの上で見れば仁者が天死して暴人が長壽を保ち、逆徒に吉事があつて義士に凶事のあることもある。其ればかりを見て因果もなければ罪福もないと速断するのは、謂ゆる更に順次および順後次の免がれざることを知らぬからのことである。此の三時の業報は必ず影響の相隨ふこと毫釐も惑ふことなきが如く、縦ひ百千萬劫を経るも亦磨滅せず、因縁必ず相値ふものである。この惑ふとある惑の字は忒の字の寫誤かと思ふ忒は音トクでたがふと訓ませる字である。闇夜多は十九祖の是の如く示されるのを聞て頓に所疑を釋く今までの疑惑が忽ち氷解してしまはれた、そこで十九祖尊者は更に汝已に三業を信ずと雖も云々と是から本則を指示しになり、其結果師は即ち宿慧を發すといふに到つたのであるが、其子細は次下の御提唱で



明らかになる。

上來の因縁實に學人として一一精細に見得すべし。謂ゆる素より三寶を信ずれども而も嘗て疾瘵に縈はる。凡そ營作する所皆不如意なり。而して我隣家は久く旃陀羅の行を爲す。而して身常に勇健にして所作和合すと。此に到て思ふ我れ佛法に歸依して年久し。佛法の力に依て其身常に恙なく其事に適ふべきに悉く心に適はず、身又病に縈はる。是れ何の罪ぞ。旃陀羅もとより惡事を行す。都て善種を修せず。然るに事に觸るること吉祥にして身勇健なり。是れ何の幸かあると。今人も是の如く思へり。出家猶ほ是の心あり。況や在家は皆是の如し。曰く汝何ぞ疑ふに足らん。且らく善惡の報に三時あり。大凡そ人の仁ある者中天あり。卒暴なる者壽命長し。逆罪するも吉祥なり。義深き者凶惡なるを見て過去をも明めず未來をも會せず、唯現前の境に惑はされて即ち因果なし罪福虚ししと思ふ。是れ則ち愚痴の甚しきなり。學道おろかなる故に是の如くなり。

此の一段は全たく前の闇夜多尊者が初めて十九祖に遭た時に平生の疑ひを問はれた時の問答を其儘に擧げられたのであるから、別に辯解する必要もない、仍て省略して置くことにする、次に。

三業とは一に順現業。今生善惡業を修するに即ち一生涯の中に報を受く是を順現業と名く。二に順次生受業。今生業を修して次の生に果報を受く。五逆七遮等は必ず順次生に報を受く。三に順後業。今生に業因を修して次の三生四生乃至無量生の間に業果を受く。然れば過去の善業に依て今生の善を受くと雖も、或は往業に依て今果不同なり。謂ゆる純善惡業因の者は今生純善惡業果を感ず。雜善惡業の者は雜善惡業を受るなり。又佛法修行の力、重を轉じて輕を受け輕を轉じて今は無らしむるなり。曰く過去劫の惡因未來に重苦を感得すべきを、今生修行の力に依て輕く受ることあり。或は病に縈はれ或



は事として心に適はず或は言を出せば人に輕じめらる。是れ悉く未來の重苦を今生に輕く受るなり。然れば佛法修行の力愈頼みあるべし。過去遠々に修せし報は唯勇猛精進せば悉く皆な輕からしむべし。然も參學の人として隨分道を解すと雖も、或は惡名を受け、或は營作心に適はず身も勇健ならざることあり。即ち重を轉じて輕を受くと思ふて、人ありて憎惡すとも曾て恨ること勿れ。人ありて誘毀すとも曾て咎むること勿れ。彼の誘人を剩つさへ敬禮することは有りとも厭惡すること勿れ。道業日に増長し、宿業時時に消滅す。然も須く子細に參得修行すべし。

三業とは一に順現業、今生善惡業を修すれば即ち一生涯の中に報を受く是を順現業と名く此の一節も亦前に已に辨じた通り、二に順次生受業、今生業を修して次の生に果報を受く、五逆七遮等は必ず順次生に報を受く五逆罪といふは一に父母を殺す、二に和合僧を破る、三に佛身血を出だす、四に阿羅漢を殺す、五に羯磨僧を破る、又父と母とを別々に二罪として羯磨僧を除いた説もある、羯磨はコン

マともカンマとも讀む作業又は作法と譯す受戒の作法を指南する者を羯磨師といふ、七遮罪といふは父を弑し母を弑し佛身血を出だし和尚を弑し阿闍梨を弑し羯磨僧を破り阿羅漢を殺すの七つである。遮罪とは聖道を遮障するの意、阿闍梨は軌範師と譯す。三に順後業、今生に業因を修して次の三生四生乃至無量生の間に業果を受く、然れば過去の善業に依て今生の善を受くと雖も或は往業すなはち幾生も前の世の往昔の業に依て今果すなはち現今の世の果報に不同あり、或は少壯の時に幸福多くして老後に不幸なるもあれば又之と反對なるもある、謂ゆる純善惡の業因の者は今生に純善惡業果を感じ雜善惡業の者は雜善惡業を受るのである、此雜善惡業を受るの業の下果の字を脱したものと思はれる。又佛法修行の力に依て重を轉じて輕を受け或は輕を轉じて今は無らしむるもある、是の如き道理を以て過去劫の惡因に依り未來に重苦を得すべきをも、今世修行の力に依て輕を受ることもあり、或は病に禁はれ或は事として心に適はず、或は言を出せば人に輕じめらるが如き是れ悉く未來の重苦を今生に輕く受るなり、金剛經には若し人の爲めに輕賤せられんに、是の人先世の罪業を以て當に惡業に墮すべかりしを、今の世に人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業即ち爲めに消滅して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしとまで説かれてある。然れば佛法修行の力愈々頼みあるべし過去遠々の間に修せし報は唯勇猛精進せば悉く皆輕からしむべし、然も參學の人として隨分に道を解し世の尊崇をも



受くべきの身でありながら却て或は悪名を受け或は營作心に適はず身も勇健ならざることあり、是の如きも皆な即ち重を轉じて輕を受くるのであると思ひ、或は人ありて憎惡すとも曾て恨ること勿れ或は人ありて謗毀すとも曾て咎むること勿れ却て彼の謗人を剩つさへ敬禮することは有りとも決して厭惡すること勿れ、是の如くに用心して修行すれば必ず道業日々に増長し宿業時々消滅することになる、然も子細に參得修行すべきことである。

汝既に三業を信ずと雖も、未だ業の根本を知らず。業と云は善惡の報分れ凡聖の品異なり、三界六道四生九有並に業報なり。此の業は迷より發す。夫れ迷と云は憎愛すべからざるを憎愛し、是非すべからざるを是非す。其の惑と云は男に非ざるを男と知り女に非ざるを女と知り。自を分ち他を隔つ。其の不覺と云は自己の根源を知らず萬法の生處を知らず、一切處に智慧を失ふ之を無明と名く。是れは思慮なく緣塵なし、是の心本清淨にして餘縁に背くことなし。此心の一變するを不覺と謂ふ。此不覺を覺知すれば自己心本と清淨

なり。自性靈明なり。是の如く明め得れば、無名即ち破れて十二輪轉終に空じ、四生六道速に亡ず。人々本心是の如し。故に生滅の隔てなく造作の品なし。故に憎なく愛なく増なく減なし。唯だ寂々然たり靈々然たり。

此れより愈々本則の提唱になる。汝既に三業を信じて従前の疑團は氷解しても未だ業の根本を知らず業と云は善惡の報分れ凡聖の品異なり、業は作業の義で身三口四意三と云ひ、身に行ふところに三つ即ち殺生と偷盜と邪淫、口に言ふところ四つ、妄語と綺語と惡口と兩舌と、意に想ふところ三つ、貪慾と瞋恚と邪見、合せて十の作業ありこれを作せば十惡業これを作さざれば十善業、之を我が宗相傳の十重禁戒に配當して見ることも出来る。さて又此の十善業を段々向上せしめて上品の十善に到れば聖者となるべく、之に反して十惡を行へば三惡道に墮落するのである。三界六道四生九有並に業報なり三界六道は常の如く四生は胎生卵生濕生化生、九有は地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道に聲聞と緣覺と菩薩とを加へて常には九界ともいふ、皆それの業因に由て其の果報を受ることは凡夫も聖者も異りはない、然らば此の業は元來何が根本であるかといふに此業は迷より發す之を本則には業は惑より生じ惑は識に因て有り識は不覺に依り不覺は心に依るといふ順序になつて居る。然るに此の御



提唱には迷と惑と不覺と無明と本心との順序に示されてある、名目に少しの異同はあつても意義は本より同一である、先づ第一に迷と云は憎愛すべからざるを憎愛し是非すべからざるを是非す、是非憎愛畢竟我見から起る、我が心に適ふるものは之を是として之を愛し、我が氣に入らぬものは之を非として之を憎むのである。是の如きの我見の根源は惑である、其惑と云は男に非ざるを男と知り女に非ざるを女と知り自を分ち他を隔つ、己に自我を執着すれば自我に對して他人といふ觀念が強くなる、其の他人に同性と異性とが有て自然に男女の差別が起る、是れ畢竟不覺が本になる。不覺といふは起信論に本覺と不覺と始覺といふことが説てあつて、本來清淨の覺體を本覺と名け譬へば上天の月の如く元來圓滿光明のもの、然るに途中に雲が掛つて其月光を掩ひ隠すのが即ち不覺、修行の力に依て其の雲霧を拂ひ盡して本來の月光を見ることが出来るのが始覺である。今は其の謂ゆる不覺に依て惑を起し業を造り迷に陥るのである、其の不覺と云は自己の根源すなはち本來清淨の本覺の體を知らず、從て一切萬法皆此の本覺が其生處であるといふことを知らず、一切處に智慧を失ふ却ての事に其本性實體が分らない、之を無明と名く謂ゆる根本無明といふので迷界に於ける一切諸法凡そ形に顯はれたものは皆此の無明が本源になるのである。此次に是れは思慮なく縁塵なしとある此句の上に或ひは脱文がありはせぬかと思はれる、本則に依れば不覺の次に不覺は心に依るとある如く、今こゝも不覺

の説明に無明か出て其の無明は心に依て起る、其心と云ふは自性清淨心であるに依て是れは思慮なく縁塵なしと續きたいのである、其の心本清淨にして餘縁に背くことなし、背くことなしとは根塵の縁に亂されて其の清淨本然の自性に背くといふことはないといふ意味である。又は此の本心は遍一切處であるから諸縁に背かず即ち萬境と相隔つること無し十界の諸法そのまゝ清淨本然の心地海であるとも見ることが出来る。然るに此の誠に能く澄みわたりたる大海の如き清淨本心が、忽然念起と無明の風に吹かれて波だちてくる、乃ち此心の一變するを不覺と謂ふのである、此不覺畢竟何物ぞと其本體を覺知すれば即ち起信論に謂ゆる始覺であつて自己心本清淨なり自性靈明なりと其本源を徹見するこゝとが出来るのである。是の如く明め得れば無明即ち破れて十二輪轉終に空じ、十二輪轉は即ち十二因縁であつて無明より行、行より識、乃至名色六入觸受愛取有生老死と順流して三世に輪廻するのであるが、其の根源たる無明が滅すれば行識名色乃至老死まで皆還滅してしまふことは、委しくは法華經の如く近くは般若心經にも見えて居るのである。人々本心是の如し故に生滅の隔てなく造作の品なし、造作の品なしとは一切無爲無作で天真自然なものであるといふこと、己に本然清淨にして造作に涉らず姿形の見るべきものがないのであるから、憎なく愛なく増なく減なし是等の道理も皆悉く般若心經を祖師意を以て參究すれば明らかかなことである。是に至りては何とも形容のしやうもないに依て、



已むを得ず只寂々然たり靈々然たりといふまでのことである、寂々は不動不變のかたち靈々は活氣の  
潑灑たるすがた、只寂々では枯木死灰の如くなる只靈々たる活氣のみでは動もすれば妄動に陥る、  
乃ち寂にして靈、靈にして寂、此れ修行の用心工夫の端的に於て最も大切なるところである。

諸仁者本心を見得せんと思はば、萬事を放下し諸縁を休息して善惡を思はず、  
且らく鼻端に眼を掛けて本心に向て看よ。一心寂なる時諸相皆盡く。其根本の  
無名既に破るるが故に枝葉業報即ち存せず。故に無分別の處に滯ほらず不思  
量の際に拘はらず。常住に非ず無常に非ず。無明あるに非ず清淨なるに非ず。  
諸佛の隔てなく衆生の分ちなし。清白圓明の田地に到て始て本色の衲僧たる  
べし。若し是の如くならば諸佛と同じかるべし。此に到て一切有爲無爲皆盡  
きて夢幻の如し。取らんとすれども手空く見んとすれども目拘はることなし。  
此田地に到りぬれば諸佛も未だ出世せざる旨を明らめ、衆生も未だ顛倒せざ  
る處に達す。參學未だ此田地に到らずんば十二時中禮佛し、四威儀中に身心

を調ふるとも、唯是れ人天の勝果有漏の業報なり。影の形に隨ふが如し。有  
と雖も實に非ず。故に人々精彩を着けて本心を明めよ。例に依て卑語を着く。  
聞かんと要すや。

豫章從來生三空裏

枝葉根莖雲外榮

以下實地修行の用心を示させられる、諸仁者本心を見得せんと思はゞ只管打坐の外はない、打坐の法  
は萬事を放下し諸縁を休息して善惡を思はずとは普勸坐禪儀や坐禪用心記の通り、更に且らく鼻端に  
眼を掛けて本心に向て看よとは太祖の特に示さるゝ所の用心、鼻端に眼を掛くるとは正身端坐の儀であ  
る、古人は衲僧鼻孔長く古佛舌頭短しともいふて居る。是の如くにして一心寂なる時諸相皆盡く謂ゆ  
る寂々靈々たる本心現成し來る、其根本の無明既に破れたのであるから枝葉の業報の存在すべきやう  
がない、然らば無分別かといふに無分別の處に滯ほらず不思議の際にも拘はらず故に常に靈々然とし  
て活氣潑灑である。本より形の見るべきでないから常住に非ず無常にも非ず畢竟常住とか無常とか  
いふことは物の形ある上のことである、天真自性の本心に無明のあるべきはずなく、已に穢濁がない  
のであるから又清淨といふ名も聞かぬ。此の際に當りて元來諸佛と隔つべきもなければ衆生と分つべ



きものもない、是の如き清白圓明即ち清淨潔白圓通靈明の田地に到てこそ始めて本色實際諸佛の大道に參徹したるの衲僧たることも得らるゝのである。若し是の如くならば諸佛と同じかるべし、此に到て一切諸法の有爲も無爲も皆盡きはて、全く夢幻の如し圓覺經には始めて知る衆生本來成佛、生死涅槃猶ほ昨夢の如しとある。此法元來取らんとすれども手虚く見んとすれども目拘はることなし、握る手にも一物を留めず眺むる目にも一塵を存せぬ。此田地に到りぬれば諸佛も未だ出世せざる旨を明らめ、衆生も未だ顛倒せざる處に達す、元來清淨本然の自性には迷も悟もないに依て佛も衆生もない、然るに無明不覺惑業等の競ひ起るに依て已むを得ずして諸佛の出世を要し、其諸佛の化導に依て衆生の得脱も出来るのであるから、此の田地に到りおふせて見れば清淨本然の眞際であるに依て、一切の形象は皆絶えて無くなるのである。參學未だ此田地に到らずんば設ひ十二時中禮佛三昧に勤行しても、行住坐臥の四威儀中に身心を調るとも、其れは唯是れ人天の勝果有漏の業報に過ぎぬのである。曾て梁の武帝が達磨大師に向て朕即位してより已來寺を造り經を寫し僧を度すること勝て記すべからず何の功德かあると問ひしに大師は並に功德なしと答へられた。武帝驚ての其理由を問はれし時、此れ但だ人天の小果有漏の因、影の形に隨ふが如し有りと雖も實に非ずと答へた。武帝重ねて何物か眞の功德なるやと問ひしに、淨智妙圓にして體自ら空寂、是の如きの功德世を以て求めずと示されてある。

限りある心を以て道を修すれば功德も亦限りあり、僅に人間天上に生じて一時の快樂を享有する丈の勝果にして、果報盡きぬれば復た惡道に墮落すること、水を笊に容るゝが如く暫くにして漏ることを免れず、是を有漏の業報といふ、故に影の形に隨ふが如く暫くは有と見えても其實あるに非ず、故に人々精彩を著けて本心を明めるやうに心懸けなければならぬぞ。精彩とは工夫の綿密審細なること、例に依て卑語を着くとあつて、豫章從來空裏に生ず、枝葉根莖雲外に榮ゆ、豫章といふは檉樟とも書いて楠木のことである、楠木は最初種が落ちてから七年の間は芽の出ないものであるさうだが、一旦芽が出ると非常に成長が早く遂に雲を凌ぐやうな大木になるものであるといふ、今は其れを人間の惑業煩惱の無明不覺の種から根が生え八萬四千の業累の枝葉が盛に繁茂するに譬へられたのである。然かし此の惑業苦惱の大木は如何ほどに成長しても、畢竟本然清淨の空裏に生じたものであるから、能く其の本然清淨なる眞空の實際虛明清白なることを認めたと上には、如何ばかり繁茂せる枝葉も根莖も皆空中に浮遊せる雲霧の間に虛假不實の榮を弄して居るに過ぎぬのである、了ずれば業障本來空である。證道歌には、無明の實性即佛性、幻化の空身即法身といへり、一たび此玄理を究むれば、從前の惑業は直ちに諸佛の神通光明とも化し去るのである、皆如夢幻の祖訓深く參究して自己に辜負すること無からんことを要す。



### 第二十一章

第二十一祖婆修盤頭尊者。因二十祖曰。我不求道。亦不顛倒。我不禮佛。亦不輕慢。我不長坐。亦不懈怠。我不一食。亦不雜食。我不知足。亦不貪欲。心無所求。名之曰道。時師聞已。發無漏智。

以上本章の本則、以下御提唱常の如し。

師は羅闍城の人なり。姓は毘舍佉。父は光蓋、母は嚴一、家富て子なし。父母佛塔に禱て嗣を求む。一夕母明暗の二珠を吞むと夢む覺て孕むことあり。七日を経て一りの羅漢あり賢衆と名く其家に到る。光蓋禮を設く。賢衆端坐して之を受く。嚴一出て拜す。賢衆席を避て曰く。禮を法身の居士に廻すと。

光蓋其由を測ることなし。遂に一の寶珠を取り跪て賢衆に献じ其眞偽を試む。賢衆即ち之を受て殊に遜謝することなし。光蓋忍ぶこと能はず問て曰く我は是れ丈夫、禮を致すに願みず。我妻何の徳ありてか尊者之を避く。賢衆曰く我禮を受け珠を納るゝことは汝に福せんことを貴ぶのみ。汝が婦は聖子を懷めり。生れば當に世燈慧日と爲るべし故に之を避く。女人を重んずるには非ず。賢衆又曰く、汝が婦は當に二子を生むべし。一を婆修盤頭と名く。則ち吾が尊ぶ所の者なり。二を芻尼と名く。(此に野鵲子と云ふ)昔し如來雪山に在て道を修したまひき。芻尼頂上に巢ふ。佛既に道を成じたまひて芻尼報を受て那提國王と爲る。佛記して曰く汝第二の五百年に至て羅闍城の毘舍佉が家に生れて聖と同胞たらんと。今爽ふことなし。後一月にして果して二子を産む。

第二十一祖婆修盤頭師は羅闍城すなはち王舍城の人で姓は毘舍佉氏であつた。毘舍佉は四姓中の第三



位で商賈の種である、父は光蓋といひ母は嚴一といふ、家富で子なし家督を譲るべき者が不在に依り佛塔に禱て嗣子を求めた、一夕母の嚴一が明と暗との二つの珠を呑んだ夢を見た其後孕むことあり娠したところが七日を経て一りの羅漢あり賢衆と名くるのが其家に至る、父の光蓋が禮を設くと禮拜したのを賢衆は端坐したまゝで其拜を受けた、次に母の嚴一出で、拜するに當り賢衆は席を避て且つ禮を法身の大士に廻すと云て恭敬の意を表した。法身の大士とは聖者といふに同じ即ち聖者に答禮すといふ意味である。之を見て居た父の光蓋は何の事とも其由を測ることなし遂に一の寶珠を取て跪て賢衆に献じ其道人なるや否やの眞偽を試む、寶珠の施しを受けて禮をするやうな者ならば俗物の賣僧であるといふことが分るからである。然るに賢衆は其珠を受けて殊に遜謝することもなく相變ず光蓋に對しては尊大である、そこで光蓋忍ぶこと能はず堪忍しきれないで問て曰く、苟くも我は丈夫の男子である然るに其禮を致すに願みず尊大に構へて居りながら、我妻の嚴一にばかり何の徳ありて席を避て敬意を表するのであるかと問ふた。賢衆曰く我今其方の禮を受け且つ其施す所の珠を納ることは、是れは此の功德に依て汝に福せんことを貴ぶのみ、將來必らず其方が供養の功德に依て幸福なる好き果報を受るであらう。然るに今汝が婦は聖子を懷妊して居る、此子が生るれば必ず當に世燈慧日即ち世間を照す法の燈、迷昏を破る智慧の日光と爲て世間出世間に利益を興へるであらう、故に今我は其

の胎内の聖子に對して禮を盡すので、決して女人を重んずるには非ず、且又汝が婦は當に二子を生むべし即ち曾て夢に明暗の二つの珠を呑んだのが此の前兆であつた、其二子の中の一を婆修盤頭と名く其れが則ち吾が尊ぶ所の者である。又外の一子は芻尼と名く芻尼といふことは梵語であつて翻譯すれば野鶻子となる、此れは昔釋迦如來雪山に在て道を修したまひ端坐六年其座を起たせられ膝の下からは茅や薄が生えたとある、其時に此の野鶻が如來の頂上に集つたのであつたが、佛既に道を成じたまふた後に、野鶻の芻尼は其因縁の報を受けて那提國王と爲て生れた、然るに尙ほ如來は來世の記莖を授けなされ滅後第二の五百年に至て羅閱城の毘舍佉が家に生れ聖と同胞たらんと示されてあつた、今爽ふことなし汝の婦が此記莖に應じて明暗すなはち聖者と凡夫との二子を生むのであるぞと示された。果して其後一月にして嚴一は二子を産んだといふことである。

尊者婆修盤頭は年十五に至て光度羅漢を禮して出家す。毘婆訶菩薩これが爲に戒を授ることを感ず。二十祖闍夜多尊者行化して羅閱城に至り頓教を敷揚す。彼に學衆あり唯辯論を尙ふ。之が首たる者を婆修盤頭(此に徧行と云ふ)と名く。常に一食不臥、六時に禮佛し、清淨無欲にして衆の歸する所と爲る。